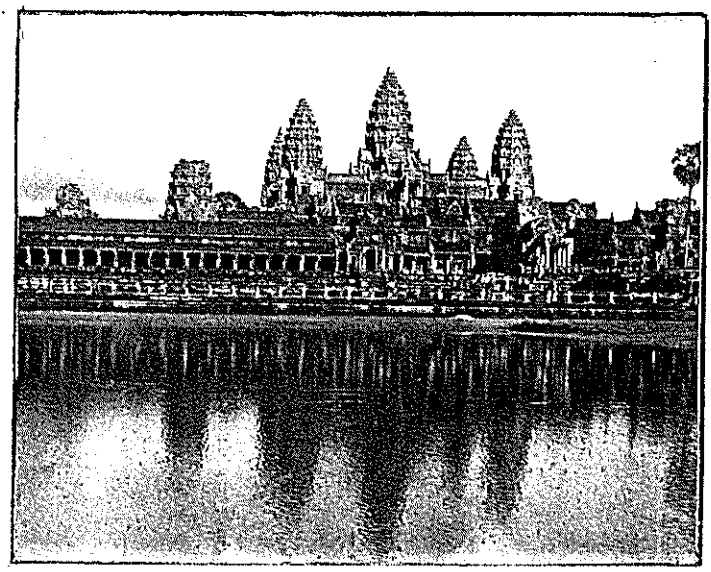
アンコール・ワット遺跡探訪

と

ベトナム・カンボジア紀行



昭和６２年１２月２７日～昭和６３年１月５日

寺　前　信　次

アンコール・ワット遺跡探訪とベトナム、カンボジア紀行

まえがき ・・・ 1
S62・12・27 ・・・ 3
成田～バンコク ・・・ 3
S62・12・28 ・・・ 3
バンコク～サイゴン ・・・ 3
ベトナムの歴史 ・・・ 5
民族の形成 ・・・ 5
１８５８以前の歴史 ・・・ 5
植民地主義と民族開放運動 ・・・１１
サイゴンの概要 ・・・１６
S62・12・29 ・・・１７
サイゴン市内観光ショロン ・・・１７
線香寺 ・・・１８
戦争博物館 ・・・１８
バシリカ教会 ・・・２０
ペンタン市場とサイゴン駅 ・・・２１
旧大統領官邸 ・・・２１
永厳寺 ・・・２２
漆器工場と商売の実相 ・・・２３
民族芸能の鑑賞 ・・・２４
S62・12・30 ・・・２５
ミトー市観光 ・・・２５
街道風景 ・・・２５
永長古寺 ・・・２６
タイサン植物園 ・・・２７
昼食のレストラン ・・・２７
S62・12・31 ・・・２９
鉄の三角地帯クーチの地下壕 ・・・２９
国道１号線 ・・・２９
地下壕 ・・・２９
ゲリラ戦 ・・・３１
楊兆混氏の想い出 ・・・３３
貿易センター ・・・３３
S63・1・1 ・・・３５
元旦 ・・・３５
休養日 ・・・３６
S63・1・2 ・・・３７
カンボジアへ ・・・３７
サイゴン～シエムリアプ ・・・３７
カンボジアの歴史 ・・・３９
クメール族 ・・・３９
アンコール王国時代 ・・・４０
フランスの支配 ・・・４０
独立運動 ・・・４２
中立政策 ・・・４２
対中・対米関係 ・・・４３
シァヌーク解任 ・・・４４
ロン・ノル政権 ・・・４４
クメール・ルージュ ・・・４５
民主カンボジア ・・・４５
カンボジア人民共和国 ・・・４５
シァヌーク ・・・４６
アンコール遺跡の概要 ・・・４７
アンコール・ワット ・・・４９
アンコール・トム ・・・５０
アンコールの文化 ・・・５０
アンコール遺跡の研究 ・・・５１
アンコール街道 ・・・５２
アンコール・ワット参観 ・・・５４
第一回廊 ・・・５４
第二回廊 ・・・６０
第三回廊と中央祠堂 ・・・６１
回廊を去る ・・・６２
アンコール・ワットと離別 ・・・６３
プノンペンの概要 ・・・６４
プノンペンへ ・・・６５
S63・1・3 ・・・６６
プノンペン市内観光 ・・・６６
旧監獄博物館 ・・・６６
ウナロム寺 ・・・６８
プノム寺 ・・・６８
王宮と銀寺 ・・・６９
国立博物館 ・・・７０
S63・1・4 ・・・７１
孤児院の慰問 ・・・７１
工芸品センター・市場見学 ・・・７３
旅の終わり ・・・７３
あとがき ・・・７５

まえがき

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方の様相をいうのであり、歳老いても青春は続いている積りだ。しかし私達は年齢を重ねるにつれて、自然に時間の価値を一段と鋭く感じるようになってきた。

見知らぬ国から国へと漂白を続け、或は数十年の前に足跡した土地を再訪し、その歴史を学び風物を知り、人々と親しむことは、心の広まる充実感を与えてくれる。

何の風の吹き回しであろうか、ジプシー性なのであろうか。人生の予定外行動のように、人生の価値判断を一切放棄し、異国趣味への魅惑ばかりが募つてくる。若い頃から猖獗の戦陣に生死を托した事が、益々齢の坂を下るにつれて拍車がかかった。戦時国家に身をおいた人達の、地殻変動による逃避の運命かもしれない。

さきにインドの仏教遺跡を巡り、ジャワのボロブドゥル仏教遺跡を巡礼し、アンコール・ワットだけが残る唯一の遺跡となっていた。

しかし嘗って栄華を誇り華飾を極めたアンコール遺跡は、緑林の砂漠の中に長らく埋もれ、睡ろみを続けて荒寥としていた。更に第二次大戦終結以来のインドシナ半島は、何時までも戦雲は暗く天を蔽い、鬼哭啾々、血で血を洗うような殺戮が繰り返され、戦禍は遺跡にも及んだのであった。

慇懃されていたアンコール遺跡は、昨年末、漸く瀕死の淵からよみがえり、終生の念願と待ち焦がれていた人々に開放された。私にとっては将に画竜点睛であり、最後の仕上げを成就した心境である。

旅を生涯とした我が五臓六腑は充血し、夢に見た憧憬の遺跡への参加を申し込んだものの、常に催行人員は満たされず、延びに延びになつて年末年始の此のツアーだけが、期待の夢を実現させてくれたのであった。

現在、アンコール遺跡のあるカンボジアへの便は、ベトナムのサイゴン（現名はホーチミン市だが、私は懐かしい昔の地名で呼ぶことにした）経由しか入国できない。カンボジアもラオスもベトナムの勢力下にあり、ベトナム連邦の一つのような関係に置かれている為である。またサイゴンへの道は、バンコクを経由しなければ入れない不便さがある。

昭和１９年秋、陸軍士官学校附から濤瀾死闘の展開するビルマ戦線に赴任途中、改造爆撃機に搭乗してサイゴンに飛び、今生の別れというか、冥途の土産のような思いで、観光した懐かしい想い出がある。

東洋のパリと称されたサイゴンの美しい町並み、活気の涌溢したチョロンの支那町等は、生きて再び眺めるとは夢想だにしなかつた処だ。戦後の混迷の羅針盤を操りながら、革命の嵐に吹き捲られたサイゴンの街、戦々恐々として死と対面し、慄然として呻吟し続けた市民の断片を知ることも、私の散漫な生活に活をいれてくれるだろう。

然し乍ら、戦中戦後を通じ辛酸を嘗めて辿り着いた開放は、「人民の勝利」だと格調高く叫ばれたが、結局は「武力による制圧」が、即ち、開放という意味に過ぎないのではないだろうか。

ベトナム、カンボジアの一部分を見て歩き、神秘なアンコール遺跡に接したとき、生きるとは何であるか、人間の幸福とは何か、我々の忘れがちな問題が胸の中に浮上して来た。私の生涯を通じて最大の修羅場であったビルマと、気候風土から宗教や民

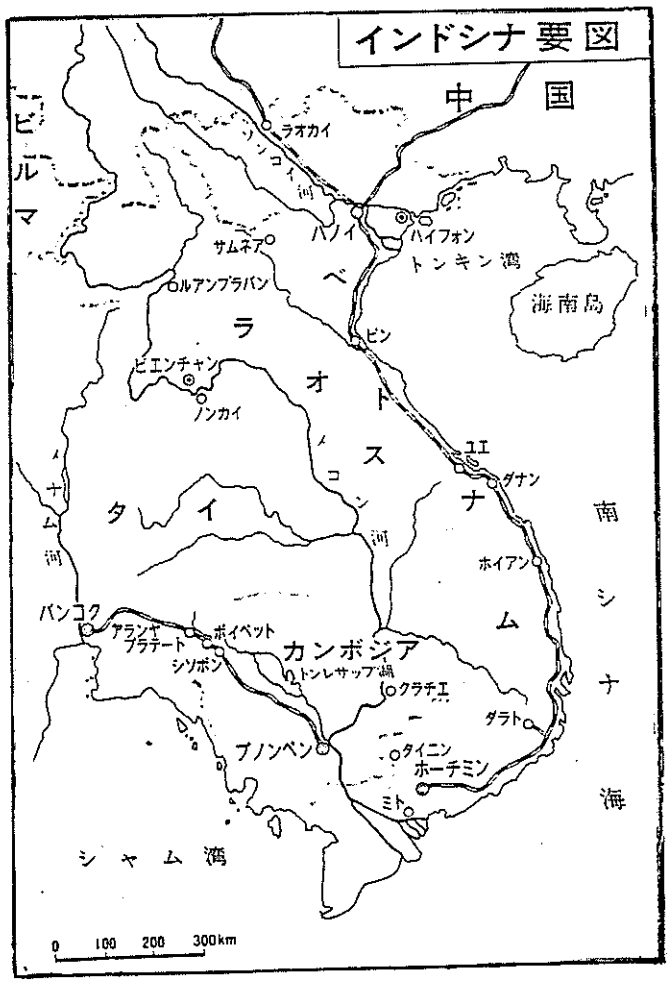
族性が類似することに基因し、発生した現象かも知れない。

このように旅は見聞する内容によって勝負が決まり、格式や地位などは総て考慮外のことである。そして心の中に描いていた空想を、一枚づつ剥がしながら、現実化する旅の快感を今回も亦、満喫できたのであった。即ち、旅に満足できることは、愉快に生きて行けることだと信じている。

私の貧弱な脳の力では到底、アンコール遺跡やインドシナの見聞や心境を描写できないが、アンコール・ワット詣でが叶えられた、嬉しい想い出の印として、またアルバムの説明文を兼ねて、拙文をしたためて残すことにした。

勿論、一斑を見て全豹を知ることはできず、誤謬のある点も承知であり、将来、訂正すべきことは無しとしない積りである。

昭和６３年１月　　加賀市山代温泉神明町７の３　　寺　前　信　次



昭和５２年１２月２７日（日）　晴　成田～バンコク

１７・５０成田発のタイ国際航空ＴＧ７４１便の鵬翼は、既に暗闇となつた西南の大空へと飛翔した。我々のツアーを含めて超満員の旅人達は、私と同様「旅は最大の栄養源」だと思っているように見える。

確かに旅は恍惚の予防になるだろうが、反面、阿片中毒のようになる憂いも、なきにしもあらずと反省した。しかし今回のようなアンコール・ワットの夢のある境地に行く時、すべてを超越して歓喜を覚え、空想を抱いていたのである。予定より３０分遅れの２３・００にバンコク空港に到着した。

バンコクの日本大使館に勤務する甥夫妻は、夜分遅い時刻に拘らず、エアポート・ホテルまで出迎えてくれた。心から感謝の御礼を述べたい。

１２月２８日　晴　バンコク～サイゴン

１２・００　バンコク発のＡＦ１７４便は、灼熱のように照り付ける陽の光を機体一杯に受けて、サイゴンに向かって鵬飛した。

聞くところによると、此の便は週に２便しかなく、ベトナムを含むインドシナ３国の国際性の、非常に低い事が窺われる。

幸いに我々の座席は前部のファストクラス級だったが、中央の位置にある私の席からは、地形を瞰下する事ができず、早速後部のファミリークラスの窓際に移動した。

子供地味た感じを受けるものの、戦場は先ず地形観察から始まるという習性が、未だに身から抜け切れず、私の眼は悲劇のインドシナの地形に凝視・吸引されていた。

区画整理されたタイの田園風景は、次第に雑然とした畦の形状に変化し、各所に拡がる湖沼は鈍く陽光を映し、紺碧の海は静かな海岸線によって、明瞭に陸地と一線を画していた。

タイ～カンボジア～ベトナムの海浜を辿るコースは、白雲に覆われ始めて、下界を俯瞰する事ができなくなったが、丁度その頃、美人揃いのフランス人スチワディスが機内食を運び、私の舌に合った美味しい味付けであった。

約１時間半の飛行時間でサイゴン上空に達すると、再び整理された田園地帯が展開し、視界の中には戦禍の跡は網膜に写って来ない。４４年ぶりに訪れる私を、平和な稲田が出迎え、市街の屋根の豊かな色彩は昔と同然で、釘付けにされた私の視神経は、懐かしさを込み上げるのであった。

遠く軍役に服したころサイゴンに立ち寄ったが、歳月は徒らに過ぎ去り、死生と貧困、そして栄辱とを体験した数奇な我が人生を、懐かしさの余りか瞬間的に回顧した。

搭乗機は着陸態勢から着地した瞬間、ガツンと乗客全員は大きな衝撃を受け、天井から酸素マスクを収納した函が頭上に落下した。過去の数十回の旅行では、このような手荒な無謀操縦を経験したことがない。

軍人出身の操縦士は技術的には優秀だが、着陸だけは軍用機なみに荒っぽいと聞いていたが、まだ戦争の延長線上にあるのだろうか。

空港は勿論、写真撮影は禁止である。無数の軍用輸送機が臨戦態勢を整え、平和に慣れた我々には矢張り不気味で異様な感じだ。対中関係は依然として芳しくないから

であろう。
次ぎの入国手続きや税関通過は徹底し、イスラエルと同じく厳重である。荷物は全部ひっくり返して調べ、何処の空港にも備えられたベルトコンベア式の運搬具もなく、通過に２時間を要した。せっかちな日本人は苛立ち気味だが、インドシナの住民は中国式の没法子（処置なしと諦めている）のようだ。
検査は黄色人種や白人の差別は全くなく、カメラやビデオは特に厳重で、検査終了後の荷造りがまた大変な混雑状態だ。文明国の旅人はトランクを持参しているが、現地の人はそのような文明用具は持たず、固く結んだ紐を解いて、再び荷造りをしなければならない煩雑さだ。眼を向けるのも気の毒な気がして来る。
彼等の内容品を垣間見していると、贅沢品らしい物は全く見当らず、貧弱な衣類と菓子類のような物ばかりであった。
申告用紙は４枚も書かされた。戦後の治安維持の為には或程度の事は必要だが、機械の導入もしない当局も、反省しなければならない。狭い検査場にはクーラはなく、外気の暑さと混雑の熱気で温度は上がり、出迎えの人々は３時間も待ったと嘆いていた。社会主義の非能率性を如実に見せ付けていたのである。
以上の入国風景から見れば、此処に戦争の傷跡が残っていたのであった。政治の根底は、統治する者と統治される者を幸福にすることであり、一日も早く失った笑いを取り戻してほしいものである。
それにしても、生きて再びサイゴンの土を踏むとは夢想だにしたこともなく、人間万事塞翁が馬であり、アンコール・ワットの御利益だと思いながら、長時間の入国検査を我慢したのであった。
漸くバスに乗車してホテルに向かった。車窓から見たところでは市内の交通機関は自転車だが、その量と質は中国に遠く及ばない状態である。バスの進行して行くにつれ、ベトナム戦争当時のニュース画面が、自然に過去の想い出として再生されて来た。１９７５年４月３０日のサイゴン陥落前後の映像は、特に私の脳裏に強烈に残存していた。
大樹の街路樹の並ぶ中に、見覚えのある放映された旧大統領官邸が、左手に見えて来た。弱者が自分の力をわきまえずに大敵に当る、即ち螳螂（かまきり）の斧の戦いかと思われた牙城であり、弱者の執念に打ち破られた金城湯池だ。
微かに記憶の奥に残るカトリック教会の前を通過し、グエンフェール通りの繁華街を眺めながら、ホテルＲＥＸに到着した。しかし私の脳細胞には過去の記憶が未だに蘇らないものの、日・仏の統治下の其の当時の方が、美しい街であったような気がしてならなかった。
ホテルの部屋で休憩後、夕食までの時間を活用して何か昔の面影を掴みたいと、一人でホテル周辺を散策した。東洋のパリーと賞賛された往時に較べ、新生サイゴンは美しい昔の面影の片鱗も残さず、華麗な安南娘の服装も完全に姿を消していた。ただ想い出させてくれたものは、藁で作った安南帽だけである。
ホテルの屋上に植えられた南方特有の珍花が、悠久の月の光を反照して一段と夜の美麗を誇り、万里の波濤を越えて辿り着いた歓喜が、花弁から私の肌に伝わった。
歴史を知る事は其の国を知る事であり、人間を賢明する手段であるという観点から、観光の記事の前に、ベトナム・サイゴンの歴史の概要を記載する。

ベトナムの歴史

ベトナム人がどこから現在のベトナムに移住して来たかという、ベトナム民族の起源に関する問題は、なお未解決問題として残されているようだ。

民族の形成

前６００年から前４００年に始まったと考えられる青銅器時代には、紅河デルタの住民は（ハノイ附近）、本質的にはインドネシア系民族であった。

前１１１年、インドシナ北東部が、漢帝国（前２０２～紀元２２０）の版図に合併されると同時に、中国から征服者としての軍隊が、次いで統治者としての行政官が大量に侵入し、さらに中国本土から亡命する学者、文化人が南下した。こうして前２世紀以降、ほぼ４００年ほどの間に、複雑な民族的要素を融合した形で、独自の民族としてのベトナム民族が形成されたといえる。

しかし漢民族がベトナム民族の同化に成功しなかった理由は、漢帝国の紅河デルタ征服以前に、そこに複雑な要素からなった確乎とした、ベトナム文化が発展していたことを意味している。

１８５８年以前

「伝説と初期の歴史」

ベトナム人の伝説によると、ベトナム民族の歴史は、中国の三皇五帝伝説に登場する炎帝神農氏の孫、帝明に始まる。帝明は中国でもうけた息子、帝宜に中国を治めさせ、南巡して五嶺の地方でめとつた不死の山の精、婪女の女との間に生まれた子に南方の地、赤鬼の国を治めさせて、泾陽王に封じた。

彼は洞庭湖の神竜、洞庭君の娘と結婚したが、その息子の貉竜君は、古代ベトナムを支配した確実な王とみなされており、事実、貉（らく）はベトナム民族の最初の呼び名でもあった。

貉竜君も山の精の嫗姫をめとり、１００個の卵を生ませた。卵からは１００人の男子が生まれたが、竜種（水）の貉竜君と僊種（火）の嫗姫は離別し、嫗姫は５０人の息子を連れて山に帰り、貉竜君は残りの５０人の息子を手元において低地の支配を続け、５０人の息子の長を封じて雄国王として君位を継がせた。

雄国王はベトナム民族の最初の王朝、鴻厖王朝の創設者とみなされ、さらに伝説によると、雄国王のあと１７人の王が王位を継ぎ、各王とも約１５０年間在位したという。鴻厖王朝が支配した国は文郎国（文身をした人の国の意）と呼ばれ、その勢力は紅河デルタから中国南部に及んだと考えられている。

ベトナムの上代史を飾る、このような一連の伝説の大部分は、１２００年以後の漢文史料に整理され、そこには神話という形でベトナム民族の連合、闘争、北から南への、或はまた山岳地帯と南シナ海沿岸の低地への、民族の分離に就いても述べられており、嫗姫と５０人の息子が山地に姿を消したことなどは、紅河デルタにおける最初のベトナム民族の、分離の記録だと考えられている。これは山岳少数民族であるムオン族の祖先を、描いたものだと推定される。

後世の漢文史料「大越史記全書」では、鴻厖王朝の最後もまた、水の精と山の精との戦いにちなんだ、洪水の伝説によって飾られているが、鴻厖王朝の最後の王となった雄瑢王を滅ぼしたのは、水の精の孫、蜀の支配者の安陽王で、文郎国を合併して国号を甌貉国と称した。

甌貉国の成立は「大越史記全書」によると、中国の周時代の前２５８年という事になっているが、この国は前漢の南越王によって前２０８年に滅ぼされた。

番禺（現在の広州）を都と定めた南越の支配者趙佗は、秦の始皇帝が中国南方を平定し、桂林、南海、象の各郡を置いたときに、南海の郡の竜川の令となつたあと、郡尉の地位につき、秦の滅亡後、桂林、象の２郡を併合し、自立して南越の武王と称し、前漢にそむいた。その支配地域の住民は主として、漢民族によつて揚子江の南部から追われた、越人によつて形成されていた。

趙佗が安陽王の甌貉国を併合した結果、南越は紅河デルタから、現在の中部ベトナム北辺までを、支配することになつたが、甌貉国の滅亡によつて、ベトナムの歴史は、伝説の時代から中国の史書に記録される時代へと移った。

南越王趙佗が漢によつて半独立国として認められたのは、漢の高祖の１１年（前１９６）だが、その後、９５年にわたる漢の中央政権との抗争ののち、南越は、前１１１年に武帝に征服された。

南越の滅亡は同時に、その支配のもとにあつた甌貉国などの、ベトナム人の漢への服従を意味した。南越のかっての版図は漢の交趾部九郡となり、漢は交趾部に刺史、各郡に太守を置いて治めさせた。この九つの郡の南端の交趾、九真、日南三郡が、後日、ベトナムを南北に分けた時の北半分である。

「中国の支配」（第一北属期）

漢の武帝の南方征略以後、ベトナム人は約１０００年にわたつて、中国人の支配を受けることになった。この期間を北属期と呼ぶ。

漢は南越を征服してから初めの約１００年間は、この三郡の地方行政にあえて干渉しなかった。紅河デルタでは、漢の交趾部の一部となつた後も、世襲によつて広大な土地と農奴を私有し、統制する豪族が地方権力を握っていたため、漢帝国の南辺に位置するベトナム人の居住地方は、実際には、漢の中央の一種の保護国という性格が強かった。

やがて此の地方に対する中国人の直接支配が強化され、漢の中央から派遣された植民官が増加し、罪人が流されて現地住民との雑居が進むと、紅河デルタには中国文化が伝播し、ベトナム人が漢字を使用する事も広く行われるようになつた。

中国の直接支配を確立するために、権力によって中国風の習慣、儀式、制度を強制し、儒教や道教が漢字文化の一環として持ち込まれ、中国人の衣服、髪の形までが、ベトナム人に押しつけられた。

強制的な同化政策に抵抗する空気は、小暴動を生みながら各地方に醸成されて行ったが、後漢が中原を支配し始めた２５年頃からは、組織的な武力抗争が一層激しくなっていった。

中国人の支配に対するベトナム人の最初の叛乱は、３９年に首長の一人であったティサク（詩索）が、交趾太守の蘇定によって殺された事を契機として、その妻である

チュン・チャク（徵側）と妹チュン・ニ（徵弐）の二人の指導によって引起された。
チュン姉妹は交趾、九真、日南、合浦四郡の、各部族の首長に率いられたベトナム軍を糾合し、南海郡に逃亡した蘇定を追撃して、嶺南六十五城を占領し、自立して王と称した。
しかし３年後、後漢の光武帝は、伏波将軍馬援に３万余の軍を率いさせ、チュン姉妹の勢力を滅ぼし、この結果、紅河デルタの地方貴族は権力を剥奪され、再び異民族の圧政に屈することになつた。この叛乱までを第一北属期という。

「中国の支配」（第二北属期）
第二北属期においても、中国人の厳しい同化政策に対するベトナム人の抵抗は、しばしば武力蜂起を続けたが、やがて後漢の衰亡に伴い、中国の周辺地域に対する権力が弱まっていつた。そして後漢の滅亡後、中国は三国時代に入り、最も南方に位置した呉が、ベトナムの支配に乗り出した。
中国の知識人のベトナムへの移住が増加し、中国の学問は急速に普及していつたが、その反面、中国化したベトナムの上層知識層の間に、民族主義的傾向が次第に強まった。５４２年には、このような階層を代表して、移住中国人の末裔であるリイ・ボンが蜂起し、南越帝として即位すると共に、数年間、独立王国バン・スアン（万春）を建てた。
南越帝は、５４８年に南朝の梁によつて滅ぼされたが、その武将たちの中国に対する叛乱は、隋の文帝が６０１年にベトナムを占領するまで続けられた。隋が交州道行軍を南方に派遣して、ベトナム人が三たび中国人に支配されてから後、９３９年の独立までが第三北属期と呼ばれる。第一と第三との間が第二北属期である。

「中国の支配」（第三北属期）
中国の中央集権が隋から唐に移ると、そのベトナム支配は一挙にきびしくなったが、ベトナム人の民族開放闘争もまた衰えることはなかつた。１０世紀に入って唐帝国の勢力が衰微すると、中国人植民官のもとで、次第に実力を養っていた土着の武人が、自ら節度使と称してデルタの統治に乗り出し、１０００年にわたる中国人の支配から、ベトナム民族を独立させる機運をもたらした。

「初期の独立王朝の時代」
唐帝国の滅亡後、中国は五代十国の分裂時代に入り、ベトナムの北方に接する中国の南方には、南漢が勢力を張り、その北を後梁が支配していた。
南漢のベトナム侵入に対して、ゴ・クエン（呉権）が挙兵して侵入を撃退し、ベトナムの独立を達成した（９３９）。ゴ・クエンは安陽王の居城だった螺城（ハノイ）の遺跡を都と定めたが、１０１０年に李朝が成立するまで、ベトナムでは短命の王朝が交替して、政権は安定しなかった。
ゴ・クエンの統治は６年で終わり、その後ベトナムは約２２年の間、１２人の実力者が互いに武力で争う、１２君の時代を迎えた。この群雄割拠の時代に、ディン・ボ・リン（丁部領）が他の１１使君を次々に破って天下の統一を果たし、９６８年、国号を大瞿越と称し、最初のベトナム独自の年号を太平と定めた。

（丁朝、前黎朝）

大瞿越の丁朝は新たに中国に出現した宋に朝貢し、中国式の政治制度を採り入れて、内治国防の整備に努めたが、ディン・ボ・リンの死後、皇室に内紛が起った。これに乗じた宋が９８０年に侵略を開始たので、十道将軍のレ・ホアン（黎桓）が皇太后から禅譲を受けて、前黎朝を建てた。

レ・ホアンは即位した翌年、南下する宋の大軍を撃退した後、武力によって国威を発揚したが、１００５年に彼の死んだあと、王子たちの間に帝位継承の争いが起り、前黎朝も前の二王朝と同様に短命に終わる原因となった。

前黎朝三代目の皇帝が夭逝したあと、その皇統を継ぐ者がなく、左親衛殿前指揮使のリイ・コン・ウアン（李公蘊）が自立して帝位につき、独立後初めての長期安定政権の李朝（１０１０～１２２５）を建てた。

（李　朝）

李朝の太祖李公蘊以降四世の仁宗までの歴代皇帝は、内治の実績を上げて、ベトナム人による最初の長期王朝の発展に努めた。２世の太宗は国号を大越と改め、宋との親交の策を講じながら、１０４４年にチャンパ（現在のダナン）の征略を行った。

４世の仁宗は、宋の神宗が王安石の策を採用して、ベトナム征討を企てたのを知ると、先にベトナム軍を中国の広西・広東両地方に侵入させ、其の侵略を撃退して宋に和を講ぜしめた。

仁宗は中国の科挙制度や文官制度を確立し、地方地主の勢力を官僚制度の中に吸収していつた。李朝はまた仏教の栄えた時代であり、皇帝は仏教に帰依し、盛んに仏寺の建立を行ったため、唐代に中国から伝来した大乗仏教は、ベトナム人の間に大いに普及した。

このように李朝の大越国は、最初の四代の皇帝の治世に大きく発展したが、仁宗が死ぬと数度にわたり、カンボジアとチャンパの連合軍の攻撃を受けた。また７世の高宗の時代から続発した内乱によつて、李朝は次第に勢力を失い、発狂した８世の恵宗の跡を次女の昭皇が継いでまもなく、外戚の陳氏によつて滅ぼされた。

（陳　朝）

李朝の外戚の陳守度が実権を握ると、その甥のチャン・カインを昭皇と結婚させ、１２２５年に帝位を譲らせて、陳朝が成立し、１４００年まで存続した。

陳朝における民族意識の勃興は、モンゴルによるベトナム侵略を撃退した事によつて、大いに促進された。モンゴルは１２５７年、８４年、８７年に陳朝を攻撃したが、ベトナム人は人民戦争の形態をとつて抵抗し、モンゴルは北に撃退された。

史上最大の強大国に勝利を収めて独立を完うしたことは、ベトナムの民族的自覚を大いに高めた。例えばモンゴルの侵略軍を破った「チャン・フン・ダオ」（陳興道）は、「チュン姉妹」と同様に、最高の民族英雄の一人とされ、今日まで国民崇拝の対象となっている。

民族意識の高揚はベトナム人の南進策を一層促す結果となつた。太宗以来抗争を続けた占城（チャンパ）に対しては、１３０６年に現在のダナン以北の二州を割譲させ、さらに１２年に占城全土を一時藩属させた。

八代皇帝芸宗の頃から王朝の力が衰え始めると、逆にチャム人のベトナム攻撃が激しくなり、７１年には現在のハノイ近辺まで侵入され、その武力に脅かされ続けた。これらの戦争は経済危機と社会混乱を招き、１２代順宗の外戚ホ・クイ・リ（胡季）は、これに乗じて１４００年に帝位を奪い、陳朝は滅んだ。

（属　明　期）

ホ・クイ・リは即位と同時に都をタインホアに定め、陳朝末期の混乱を収束しようとしたが、滅ぼされた陳朝は帝位奪還のために中国の明に援助を求めた。

帝国主義的領土拡張政策をとつていた明の永楽帝は、陳朝の要請を受けると、１４０７年、大軍を発してベトナムを攻めタインホアを占領した。ホ・クイ・リ父子は捕らえられ、南京に連行されて殺され、胡朝はわずか７年で滅亡した。

明は陳朝を復興さすこともなく、２０年にゆたつて直接支配し、この時期を属明期と呼ぶ。中国人による苛酷な搾取と同化政策が復活したため、ベトナム人は再び独立のための、武力開放闘争を行わなければならなかつた。

「拡張・分割・再統一」

１５世紀初めまでのベトナム人の歴史は、ベトナム人を中国化させようという試みが、結局ベトナム人の民族意識を強めるだけであり、中国文化によつて開花すればするほど、この民族が中国の支配を取り除こうという決意を固めさせた。

１４１８年、明の支配に反抗して起兵した、紅河デルタの南方タインホアの富豪レ・ロイ（黎利）は、蜂起した民衆を指導して、強力な民族抵抗運動を開始した。彼は約１０年間にわたつて明軍と戦い、ベトナムから撤退させて独立を回復した。

レ・ロイは２８年に、タンロンをトンキン（東京）と呼んで都に定め、黎朝の初代の皇帝として即位した。黎朝は１７世紀以後、実権を失ったがベトナムにおける第三の長期王朝として１７８７年まで続いた。

（黎朝前半期）

太祖レ・ロイは独立を回復した後、国号を大越と称した。黎朝前半期の英主といわれる聖宗は、明制にならった新制度を定め、官僚機構を整備し、中でも「黎朝刑律」は、当時の東南アジアで最も進んだ法典と云われている。

しかし人口の増加と、紅河デルタの農耕地の開拓が限界に来たため、領土拡張政策としてのベトナム人の南進の歴史が、より一層明瞭な形で形成されていった。聖宗の指導のもとに、土地を持たない人民がダナンから南の地に移され、チャンパは徐々に土地をベトナムに奪われていった。

現在のサイゴン附近は１７００年以前にベトナム人のものとなり、その他のメコンデルタの地方も、その後６０年間にベトナムの版図に加えられた。

（二度の分裂）

黎朝のベトナムは二度の分裂の歴史を持っている。聖宗の代に国力が頂点に達したが、そのご急速に権力が衰え、其の中で次第に実権を握ったマク・ダン・ズン（莫登庸）が帝位を奪い、黎朝は１５２７年に一旦、滅んでしまつた。

黎朝のグエン・キム（阮淦）らは、３３年に荘宗を擁立してマク氏と対抗し、ベトナムは二つの勢力に分かれて争ったが、黎朝の皇帝がハノイや紅河デルタ北部の、大部分を再征服できたのは、約５０年にわたるマク氏との内戦の後であつた。

さらにマク氏との抗争中、黎朝の朝廷では、ハノイの統治者チン（鄭）氏と、ユエを中心としたグエン（阮）氏との対立が始まり、ベトナムは再び分裂状態に陥った。黎朝の皇帝はマク氏の勢力が平定された頃から、名目上の支配者となり、中央の権力のすべては、鄭一族に握られていた。

ハノイとユエに、チン氏とグエン氏による二つの政府が存在し、ベトナムの再統一は、１７７２年から１８０２年にかけて起ったタイソン（西山）党の革命と、それによる政治的混乱のあと、初めて出現した。

（タイソン党の乱）

タイソン党の乱は、タイソンに蜂起したグエン（阮）３兄弟によって指導され、革命の目標は、ハノイのチン氏、ユエのグエン氏の双方に向けられた。タイソン軍は最初チン氏と結び、広南王国の王であるグエン氏一族を滅ぼした後、北上して、安南王国の王であるチン氏の攻撃に向かった。

しかしタイソン軍が北に対する戦争を遂行している間に、旧広南王国のグエン一族の中で、一人生き残ったグエン・フク・アイン（阮福映）は、メコンデルタに再び支配権を確立する事をねらい、８３年にはフランス人宣教師の助力を得て、ルイ１６世にフランスの援助を要請していた。

８９年、グエン・フク・アインは、フランスの軍人たちの援助を得て、サイゴンおよびメコンデルタ地方を占領することに成功し、以後１４年の間に次第に北上して、タイソン党の軍を撃破し、遂に全土の支配権を掌中にした。

グエン・フク・アインは、１８０２年ユエで即位し、国号を越南（ベトナム）帝国ととなえ、年号をザロン（嘉隆）と定め、ベトナム最後の王朝である阮（グエン）朝を樹立した。彼はその年号によりザロン帝として知られている。

「植民地前夜」

ベトナムは１９世紀後半フランスによつて征服されるが、それ以前の世祖及びその子孫の統治は、李朝の皇帝たちによつて１１世紀に確立された国家の組織や、その基本的な性格に、特に新しいものをもたらした訳ではない。中国の制度を模範にして、儒教的文化に支えられた中央集権の国家を維持する事は、李朝や阮朝の特色である。

ベトナムの諸王朝が採用した経済政策もまた、皇帝や官僚が権力を維持するのに好都合に立てられていた。中国とフランスによる植民地支配の中間の、およそ９００年の独立期間を通じて、ベトナムの経済は専ら農業に依存し、国内外の交易は組織的に促進されていなかつた。

資産を貯えた商人階級ですら、学識によつて任用された官僚の権威を脅かす事はできなかったし、大地主の勢力の伸長も、土地の再分配などによつて押さえられ、理論的には皇帝が、すべての土地を所有する事になった。

中国風の統治を理想とした歴代王朝の統治は、東南アジア諸国の行政よりも進歩していたが、官僚主義による欠点も指摘されるような状態であった。

「ヨーロッパ勢力の浸透」

ベトナム人とヨーロッパとの接触は、１５１６年、ポルトガルの冒険家たちの渡来によつて始まった。２７年にドミニコ会宣教師が、３５年に軍人のアントニオが、１６世紀後半にポルトガル宣教師が渡来し、商館や教会が設立された。

フランス宣教師たちは、キリスト教の伝道と交易を説く事に従事した。オランダが１６３７年に、イギリスが７２年に、フランスが８０年にハノイに設けた商館は、チン・グエン両勢力の戦争で、ともに成功せずに閉鎖された。１７００年以後は、ホイアン港において、ポルトガルとの貿易のみが続けられた。

極東におけるポルトガルの衰退と、オランダ、イギリスの撤退はフランスを勇気づけたが、ベトナムはキリスト教によつて、伝統的な道徳の権威を傷つけられる事を恐れて、宣教師を迫害し始めると、フランスはベトナムを極東侵略の拠点とするには、武力干渉しかないと確信した。

フランスがベトナム侵略の端緒をつかんだのは、グエン・フク・アイン（阮福映）がアドラン司教を通じて、軍事援助をルイ１６世に要請した時である。この要請に応じて攻守同盟条約が締結したが、現実的には遠征軍の派遣は不可能となつた。

このためアンドラ司教は私費を投じ、フランス人将校をつれてベトナムに帰り、阮朝の成立に貢献した。ザロン帝はフランス人の恩に感謝し、ベトナムに残留を許して厚遇したが、キリスト教の伝道には好意を示さなかった。

その子のミンマン帝は極端な排他主義者として登場し、キリスト教の布教を禁じ、宣教師を迫害した。１８３３年から３８年の間に、７人の宣教師と、多数のベトナム人のキリスト教徒が処刑されると、フランスは武力によつて植民地主義侵略を行う事を決定するに到った。

ミンマン帝の後継者の憲祖の統治下では、更に宣教師の迫害が激しくなった為、フランスはこれを口実にして、４７年、ダナン港を攻撃し、侵略を開始した。

植民地主義と民族開放運動

「フランスの進出」

フランス海軍はアロー号事変で、清朝と戦端を開いたイギリスと連合して、中国を侵略した後、スペイン海軍と連合鑑隊を編成して、１８５８年９月１日、ダナン港を攻撃し、附近一帯を占領した。

首都ユエの占領も企てたが、河川の遡航の不可能と、フランス軍にコレラによる死者が続出したため、いったんダナンから退去し、翌年南シナ海を南下してサイゴン川をさかのぼり、１８５９年２月１７日、サイゴン一帯を占領した。

清朝はアロー号事件で締結した天津条約にも拘らず、英仏連合軍を攻撃したため、サイゴンに仏軍守備隊を残したまま、中国に向かった。サイゴン守備隊は阮朝軍の包囲を受けて孤立したが、仏軍は中国から戻ってこれを救出した。

仏軍はサイゴン附近の三省を占領し、更にメコンデルタに向けて占領地域を拡張した。このため６２年６月、阮朝のトゥ・ドック帝（嗣徳）は遂にフランスの武力に屈し、東三省とプロコンドル島を植民地として割譲し、ダナンなど三港を開港したうえ、多額の賠償金を支払う事を条件とする講和条約、いわゆる第一サイゴン条約を締結し、６３年４月にこの条約を批准した。

フランスは更にカンボジアを保護領とすると同時に、さらに西三省を占領した。阮朝はこれに対し全く無力であったため、ベトナムの南３分の１は仏領植民地として奪われた。

１８７３年、フランシス・ガルニエが、中国の雲南省に通ずる通商路を開くため、紅河を遡航しょうとして、阮朝の厳重な抗議を受けると、仏のコーチシナ総督はハノイの攻撃を命じて占領させた。

総督は阮朝を脅迫して、７４年に第二サイゴン条約を締結し、コーチシナ六省を正式に割譲する事を取り決め、北部と中部ベトナムを支配する安南の独立は承認した。これは南部以外のベトナムも征服しようとする仏の計画が、一時的に挫折した事を意味していたが、それは、仏本国が７１年にプロシアから受けた敗北が、殆ど回復していなかったからである。

「仏領インドシナ連邦の成立」

１０年後、急速な経済発展により、再び欧州列強の植民地拡大競争に参加できたフランスは、阮朝の第二サイゴン条約の侵犯に抗議して、１８８３５月、突如ハノイを占領し、大軍を紅河デルタに派遣した。一方、仏艦隊は王都ユエを砲撃して占領した。

阮朝第五代皇帝のヒエップ・ホア（協和）帝は、フランスの侵略に屈服し、８３年８月２５日、トンキンとアンナンを仏の保護領とする第一ユエ条約に、調印せざるをえなかつた。それは全ベトナムに対する仏の直接支配を確立する、仏の行動の第一段階の完了を意味した。

仏はまた翌１８８４年、第二ユエ条約によつて、ベトナムを北部、中部、南部に三分割して統治することを確認した。さらに清仏戦争（１８８４～８５）の結果、結ばれた清仏天津条約によつて、仏は清朝からベトナムに対する宗主権を奪い、８７年には、６３年以来保護領とされていたカンボジアを合わせ、さらに１９００年にはラオス（１８９３年に保護領となる）及び広州湾を編入した。

ユエ条約締結後の１５年間、仏は確乎とした植民地経営の方向を見出せなかつたが、１８９７年、阮朝を実際の権力を剥奪したまま存続させ、独裁的中央集権体制を強化した。ここにインドシナにおける仏の支配は確乎たるものとなった。

「民族開放運動」

ベトナム人の反植民地運動はフランスの支配が確立すると共に始まった。１８６０年代の抵抗の初期には、阮朝下級官僚や読書人階級は仏に協力する事を拒み、農民を組織したゲリラを指導して仏軍を攻撃し、８５年には皇帝の檄に応じて勤王抗仏の武力闘争が起った。

２０世紀初頭には、維新会を組織して独立運動に乗り出したファン・ボイ・チャウ（潘佩珠）は、日本の明治維新や立憲君主制を高く評価し、日露戦争の日本の勝利に刺激された。潘佩珠は日本に独立運動の援助を要請する目的で、１９０５年にベトナムを脱出して日本に渡り、３００名に及ぶ青年を呼び寄せた。日本滞在中、孫文らの中国革命同盟会の志士とも接触して、次第に共和思想に変わっていった。

一方国内に残った維新会の志士たちは、潘佩珠の政治運動を宣伝し、１９０８年には反税闘争を組織したが、インドシナ総督府に弾圧されて、多数の犠牲者が出た。

日本とフランスとの間に日仏協約が結ばれ、１９１０年、在日ベトナム革命家たちは、フランスの要求によって国外追放されたが、翌年中国の辛亥革命が成功すると、潘佩珠らは直ちに広州に入り、ベトナムの独立運動を続けた。

中国各地で運動を続けていた潘佩珠は２５年、フランスの官憲に逮捕され、ハノイに連行されて死刑を宣告された。しかし此の判決に反対する民衆の大規模なデモが組織された為、インドシナ総督は死刑を免除し、４０年の死亡するまでユエに幽閉した。

第一次世界大戦中の抗仏蜂起の失敗を契機に、戦後は徹底的弾圧を蒙り、組織は全く混乱した。

１９２７年に設立したベトナム国民党は、グエン・タイ・ホック（阮太学）の指導による、組織的なテロ集団であった。彼等は仏軍に雇われたベトナム兵を扇動して、３０年２月９日、イエンバイの仏軍兵営を襲撃したが、翌日仏軍によつて鎮圧され、幹部は全員処刑された。また抗仏運動の容疑者は生命を奪われ、或は政治犯として牢獄に繋がれた。この結果、国民党は壊滅したのである。

しかし、イエンバイ事件と前後して、香港ではインドシナ共産党が成立し、グエン・アイ・クォック（阮愛国）の名で、コミンテルンから派遣されていたホー・チ・ミン（胡志明）の指導のもとに、多くの青年が訓練されていた。

インドシナ共産党は３０年５月、中部ベトナムに拡がっていた飢餓状態を利用して、民衆を蜂起させたが、仏軍は未曾有の弾圧を加え、この運動を壊滅させた。

第二次世界大戦の勃発と共に、ベトナムにおける総ての政治的自由は抑圧されたが、既にインドネシア共産党は地下に潜入し、民族開放運動に最も影響力を持つ政党に成長していたのである。

「第二次世界大戦と独立」

第二次世界大戦中、インドシナは仏と日本との二重支配のもとに置かれていた。１９４０年月２２日、日本と仏との間に、フランス領インドシナ軍事協定が調印され、日本軍がインドシナに進駐し、ベトナムの飛行場を使用することが認められた。この協定は、インドシナを東南アジアにおける総ての日本軍の、最も重要な基地とする事を意味したのである。

仏総督府は協定に従って日本軍に協力したが、インドシナ住民は仏の植民地主義と日本の帝国主義による、二重の搾取に塗炭の苦しみを味わった。１９７５年、太平洋戦争が連合軍に有利に展開し、日本の敗色が濃くなると、日本軍は仏軍の反撃を警戒して、クーデターによつて其の武装を解除し、ユエにベトナム人による日本の傀儡政権を樹立させた。

阮朝十三代皇帝バオ・ダイ（保大）帝は、日本の保護を背景に、ベトナムの独立と、かってフランスとの間に締結した総ての不平等条約の破棄を宣言した。

それより先、４１年５月に中国国境を越えて潜入したホー・チ・ミンは、共産党を中心にしたベトナム独立同盟（略称ベトミン）を結成し、日本軍と仏官憲に対する抵抗運動を展開していた。

４５年８月、日本の敗戦が近ずくと、ベトミンを指導していたインドシナ共産党は、全国に人民総蜂起の指令を発し、８月１５日に、完全独立を宣言しようとした阮朝政府を倒して権力を奪取し、所謂、８月革命を成功させた。

８月２２日、阮朝皇帝バオ・ダイは退位して阮朝は滅び、９月２日、ホー・チ・ミンはハノイでベトナムの独立宣言を行い、ここにベトナム民主共和国が成立した。

「フランスの再侵略」

日本の敗戦の結果、インドシナの再侵略を企てたフランスは、初めベトナム民主共和国の独立を認めず、１９４５年９月、サイゴンに兵員を上陸させ、周辺のベトミン武装勢力を鎮圧した。しかしコーチシナ（南部）から中部ベトナムに及ぶ全域で、開放勢力のゲリラによる抵抗が続けられた。

４６年３月６日、鎮圧の不可能を悟った仏は、ホー・チ・ミン政府との間に、ベトナム民主共和国を仏連合国内の独立国と認める予備協定を結んだ。しかしパリでの本協定会議の直前の６月１日、仏はコーチシナをベトナム民主共和国から分離して、コーチシナ臨時共和国政府の樹立を宣言したため、独立協定は進展しなかった。

仏は次第にベトナム民主共和国を承認しない政策をとり、４６年８月以降、仏は攻撃に転じ、１２月にはハノイのベトナム軍の武装解除と、主要官庁の建物の明渡しを要求した。そこでホー・チ・ミンは徹底抗戦を呼び掛け、全面交戦に入った。

「第一次ベトナム戦争とジュネーブ会議」

交戦後３週間で仏軍は北、中部ベトナムの主要都市と道路を支配下においた。これに対しベトミンは正規軍を山岳地帯に撤退させ、４年間にわたるゲリラ戦を展開した後、次第に攻勢に転じた。

１９４９年、中国共産党が内戦に勝つと、５０年９月から１０月にかけて、仏軍は中国国境沿いの全地点でベトナム軍に撃退された。

５２年の朝鮮戦争終結後、急増した米の軍事援助も空しく、遂に５４年５月７日、仏軍は「ディエンビエンフー」で決定的な敗北を喫し、ベトナム再侵略を放棄した。

インドシナにおける休戦を取り決めるため、１９５４年７月２１日に締結をみたジュネーブ協定は、全地域からの総ての外国軍隊の撤退を規定し、休戦後２年間、北緯１７度線でベトナムを一時的に分割し、北をベトナム民主共和国が、南をサイゴンのバオ・ダイ政権が統治し、２年後に全土統一選挙を行う事を決めていた。

しかし５５年１０月、フランスに代わりベトナム支配に乗り出した米国は、ゴ・ジン・ジェムを首班とするベトナム共和国を樹立し、臨時休戦境界であつた北緯１７度線による、南北分割を固定化しようとした。

「アメリカの介入と第二次ベトナム戦争」

南ではゴ・ジン・ジェム政権に対する反政府闘争が顕著になり、１９６０年１２月、南ベトナム開放民族戦線（ベトコンと呼ばれた）が結成されて内線が激化し、第二次ベトナム戦争が始まった。

ゴ政権は米の援助が加速度的に増大したが、仏教徒の反政府闘争に対する弾圧に失敗し、６３年１１月１日の軍部のクーデターによつて第一共和制は倒れた。次ぎの軍事政権も、彼の独裁政治と本質的に変わらず、開放戦線の闘争は依然として有利に展開し、米軍の実質的援助による干渉によっても、南政権の安泰は疑われた。

このため、ジョンソン米大統領は１９６５年２月７日、北から南への武器と兵力の

投入を封ずるため、１７度線北方のドンホイ市爆撃をもつて北爆を開始した。さらに３月８日、３５００人の海兵隊をダナンに上陸させ、ベトナム戦争のアメリカ化が公然化した。

南ベトナムにおける米軍は次第に増員され、６５年７月までに７万５千に達し、最大規模は５４万の兵力を投入し、７５５万トンの爆弾（第二次大戦中の爆弾投下量の２、７３倍）を投下した。その結果、北及びベトコンの死傷者２２７万人、民間人死傷者４４０万人、南ベトナム政府軍死傷者５９万人、米軍死傷者３６万人に及んだ。

以上のようなこの戦争は、甚大なベトナム人の生命と財産を奪い、広大な地域の自然を荒廃させたが、米軍は北ベトナムとベトコンの戦意を弱める事はできず、６８年２月に行われたテト（旧正月）攻勢でも明白となつた。

「和　平　へ」

ベトナムにおける軍事的勝利が不可能であり、世界各国からきびしい批判の集中する中で、戦争を継続することの愚を悟ったワシントン政府は、１９６８年北ベトナムに対する爆撃を部分的に停止し、パリで北ベトナムと和平会議を持つ事に決定した。

６８年１１月、北ベトナムに対する爆撃が停止された後、アメリカ、南、北ベトナム、南ベトナム開放民族戦線（ベトコン）の四者間の会議となつた。其の間、開放戦線側は６９年６月１０日、南ベトナム臨時革命政府を発足させ、一方の米軍は６９年初頭に発足したニクソン政権のもとに、徐々に撤退を開始した。

ときには戦線がカンボジア、ラオスなどにまで拡大したが、和平交渉は忍耐強く続けられた（レ・ドク・ト北ベトナム代表団特別顧問と米大統領特別補佐官キッシンジャによる秘密交渉）。漸く７３年１月２７日、四者間に和平経協定が正式に調印され、米軍はベトナム地域から全面的に撤退し、ベトナムの将来は民族自決の原則に従って、ベトナム人みずからが決めることになった。

しかし協定発行後も南ベトナムにおいては、ベトナム共和国政府と、開放戦線を中心にした南臨時革命政府との軍事競争は終わらず、南ベトナムの首都サイゴンは、１９７５年４月３０日に陥落した。

一方、カンボジアを制圧したポル・ポト（クメール・ルージュ指導者）は、７７年末、対ベトナム断行を発表して両国の対立が表面化した。カンボジア内に親ベトナム派の救国民族統一戦線（ヘン・サムリン派）が生まれると、７８年１２月２５日、ベトナム人民軍は救国戦線を支援するためカンボジアに進攻し、現在に至っている。

１９７８年１１月３日、ベトナム社会主義共和国とソ連との間に、ソ越友好協力条約が締結され、其の第六条に有事の際の相互協力が定められている。米中両国との関係が険悪であると共に、ソ連の東南アジア戦略上の問題が絡まれているようだ。

１９８０年１２月１９日、ベトナム社会主義共和国憲法が公布された。前文には、「中国膨張主義侵略者」と対決し、「ベトナム、ラオス、カンボジア三国人民の戦闘的団結」を守ると述べ、本文では、「プロレタリアート独裁国家」であること、ベトナム共産党が指導する「集団主権」であることを基本的理念としていると述べている。

此れに対し中国はベトナムに対する援助を打切り、ベトナムのカンボジア進攻の懲罰として、７９年２月１７日、中国軍はベトナム北部に侵入したが、ベトナム人民軍の強硬な抵抗に遭い、同年３月１６日、撤退した。（以上、ベトナム歴史の概要）

サイゴンの概要

サイゴン川を南シナ海から約９７㎞遡ったデルタ地帯にある河港で、メコン・デルタ経済圏の中心である。人口は約５００万、面積は２９万㎢、ベトナム鉱工業の２５％を占め、気候は温暖かつ湿潤で典型的な熱帯モンスーン気候である

北部ベトナムに興ったベトナム民族は、人口増加に対処して、インドシナ東岸沿いに領土を拡張し始めたのは、今から１０世紀も前のことで、即ち「南進」であった。そして地場先住民族のチャム族を滅ぼし、１６世紀には南ベトナムに達している。

当時、豊饒なメコン・デルタ一帯は、未だカンボジアのクメール族の領土であった。ベトナム人がカンボジアの副王から此の土地を巻き上げたのは、今から約３００年前（１６９８）のことである。

附近はまだ未開拓地が多かったが、サイゴンは既に地方商業の中心地として栄え、黎朝は此の地を南ベトナムの基地として占領し、良港サイゴンを支配下に収めた。１７８９年には、阮朝の創始者の阮福映がフランス人将校ピュイマネルに委嘱して、八角形の西欧式要塞（現在のカトリック大聖堂附近）を建設した。こうしてサイゴンは、近代におけるベトナム南部の中心となり、メコン・デルタ一帯を其の穀倉として発展したのである。

サイゴンという地名は、クメール人が「プレイコル」（カボックの茂る森）と呼んでいたものを、ベトナム語に訳したものと言われている。カンボジアのポル・ポト軍が、サイゴンを奪回するのだと意気込んでいたのも、一面は理解できるようだ。カンボジアのクメール族にとつてベトナムは、何世紀にもわたる強大な侵略者であり、今もカンボジア人の意識は変わっていないと言う。

一方、１７世紀前半には中国で明、清の政権が交代し、ベトナムの黎朝を頼って、南ベトナムへ移住してくる明朝の遺臣が多かった。サイゴンの西にあるショロンは此のような中国人によって、１７７８年に建設された華僑の町である。

しかしベトナム南部の中心地であるサイゴンの規模は未だ小さく、１９世紀末にいたつても、その人口は1万３０００余に過ぎなかった。

フランスとの関係は、１８世紀に仏人宣教師がサイゴンに派遣された時に始まる。仏はインドシナ半島の基地として、新開のメコン・デルタの中心であり、良港の条件に恵まれる事に注目し、１８５９年、艦隊を送って占領した。其の結果、サイゴンはコーチシナの一部として払の統治下に入り、１８６２年にその首都となった。

さらに１９世紀末、阮朝を滅ぼしてベトナム全土を植民地とした仏は、統治の中心をハノイにおいたが、サイゴンは経済の中心として、フランス風の都市建設が進められることになつた。

１９３２年にサイゴン・ショロン県となり、５６年にはサイゴン県に改称され、５４年7月、ベトナムを事実上二つの共和国に分断したジュネーブ協定によって、南ベトナムの首都となり、植民地時代の街路の名称もベトナム風に改められた。

１９７３年1月、停戦は漸く実現して戦火は収まり、ベトナム社会主義共和国となって「ホーチミン市」と改称されたが、現在でも市民は殆どサイゴンと昔の通りの名称を使っている。

１２月２９日（火）晴　市内観光

ショロン

サイゴンの最初の観光は、サイゴン経済の心臓である「ショロン」であつた。我々の宿泊した市の中心部から、西南約５㎞にある中国人の街である。映画館や飲食店が立ち並び、レストランやホテルがあった往時の歓楽街の様相が、私の脳裏の中に、微かながら彷彿として浮かんでいた。

バスはラッシュ時の、洪水のような自転車の大波の中を、サイゴン市場や駅を眺めて西南に進んだ。自動車の少ない路面上を、単車に跨った若者は英雄気取りで追い越し、朝の陽のぎらつく中に露天商は店を張り、駅前広場は大賑わいであった。

混雑する街路の中に、一際目立ったものは「星と軍人」を画いた看板と、ロータリに掲げた星印しの国旗であった。暴虎馮河の対米戦争が終結して１３年が経過したが、不倶戴天の中国とは依然として敵視を続け、カンボジアとも余燼がくすぶり、軍国思想の高揚に必要なのであろう。

出発して２０分、ショロン地区に入ると高層アパートが群れをなし、汚穢した映画館や百貨店、それに酒場なども見えて来た。背の伸び過ぎた街路樹だけが昔日の面影をとどめ、サイゴンには珍しい交差点の信号に遭遇した。サイゴン中心部の広い街路と異なり、狭い往来の雑踏は活気を盛り上げ、文化センターや高層建築などの建築ラッシュは、復興の鎚音を響かせていた。

漢字の目立つショロンの街は、嘗ては１００万もの中国人が住み、サイゴンの名所の一つであったが、現在は中越関係の悪化と各種の圧迫から、３０万人にまで急減してしまった。

突如として１９７８年春、大勢の兵士と学生を動員してショロンを包囲し、無届の隠匿物資や退蔵金を根こそぎ没収した。また統一後の二度目の通貨改革に依って、旧紙幣の価値がゼロに等しくなったことは、華僑にとっては大打撃であった。

ショロンの悲劇は、此のようなベトナム華僑の弾圧政策と、華僑の排斥政策の騎虎の勢いの中で始まった。とりわけ１９７９年早春の中越戦争は、華僑の追放政策まで発展した。

商活動の権を奪われた華僑達に残された道は、他の一般のベトナム人と同様に、地方に出て農作業に従事するか（下放）、この国に見切りを付けて新天地に出直す意外に、方法がなくなったのであった。

代々「商」をもって人生として来た華僑にとっては、ジャングルの開拓作業は無理なことで、ベトナムの都市住民よりも辛い作業である。見切りをつけた華僑には、出国料と引替えに、ベトナム政府自ら脱出の許可を与えた（一人１千～３千ドル）。ベトナム難民の中に、多くの華僑の存在する事が首肯けるようだ。

中国人の最初の本格的な渡来は前記した通りに、１６７８年、明の遺臣が５０隻の船に乗り、３０００人を引き連れてやって来た。当時の黎朝では是れをもてあまし、カンボジアに対する備えとして、現在のミトー、ピエンホアの二ケ所に入植させ、更に１７０８年、広東の鄭氏一族がメコン・デルタに大量移住している。

ショロンの「ショ」（或はチョ）は「市場」、「ロン」は「大きい」という意味で、

我々一行のショロン観光は、車窓から眺めるだけに過ぎなかった。ベトナム国営旅行社のサイゴン・ツーリストとしては、反ソ・親中国的な日本人に対しては、好んで案内する処ではないようである。

線香寺

フランスの中学校の建物がショロンの懐かしい目印であったが、其処を通り過ぎて中国式の古めかしい寺院に案内された。台北の龍山寺を小型にしたような此の寺は、旅行社のガイドブックに線香寺と記載されていた。

寺の山門の屋根瓦は、中国古寺によく見掛ける彫刻が美事に施され、正面に黄金色の船と赤いランタンが吊るされていた。海上から渡来した人達が信者かも知れない。

朱塗りの柱に「暮鼓晨鐘」と金文字で書かれいるのは、朝は鐘を打ち、夕暮には太鼓を叩くのであろうか、本堂の内部に鐘も太鼓も吊るされていた。

ご内陣の正面には真鍮製の大きな線香を立てる器があり、それから線香寺と命名したのであれば、名称の由来は貧弱である。具足類は他の寺院と少しも変わらず、線香寺と書いた文字は寺の何処にも見当らなかつた。サイゴン・ツーリストの通訳はコースを案内するだけで、寺の由来の説明もしない。観光は開放された早々とはいえ、勉強不足も甚だしい限りである。

この寺の建立は約２５０年前というから、清朝の乾隆帝の初期の時代である。その頃ベトナム遠征が行われたが、何らかの関係が存在するか否かは不明だ。この時代は清朝最大の隆盛期で、１世紀半に５倍という爆発的に人口が増加し、中国文明の発展した輝かしい時代であった。

山門の両側に建つ朱塗りの柱に、白地に黒で「天誕聖神云々」及び「后為賢母云々」と書かれているのは、乾隆帝との結び付きがあるようにも考えられる。即ち清朝最盛期の乾隆帝を称えて「天誕聖神云々」と書き、其の皇帝を生んだ太后（母）を称えて、「后為賢母云々」と賛辞した文字のようにも考えられた。

ショロンには関帝廟や媽祖廟があると百科辞典に載っているが、此の寺には関羽の像がないから関帝廟ではない。若しかすると媽祖廟かも知れない。「媽」（ボと発音）とは「母」の意味で、ご内陣の朱塗りの柱に黄金の文字で「貴女作神仙云々」と書かれているから、神仙即ち乾隆帝を生んだ太后（母）を祀る寺ではないかと、勝手に考えていた。また御本尊は確かに尼仏の優しい顔形をしていたから、尚更であった。

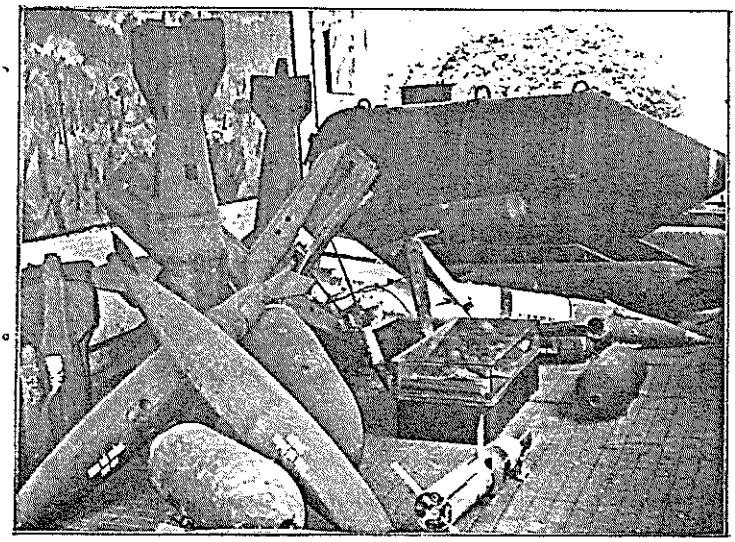
帰国後、市の図書館で調査したところ、ベトナム南部で最も古い（約２４０年以上）ベトナム・スタイルの寺の名称として、「ジアクラム寺」と記載した寺があつたが、此の寺のベトナムの名称かも知れない。

戦争博物館

寺院の拝観を終えて、バスは生け垣のある所に停車した。中に入ると直ぐ右側に、米軍のＭ４８型戦車や、１７５ミリ砲を搭載した大型戦車が展示されていた。今次ベトナム戦争で捕獲したアメリカ軍の兵器類を一堂に集積し、米国や南ベトナム政府を告発している展示会場である。

学校の校舎のような建物の手前に、簡単な造りのギロチンがあり、鉄の部分は錆付いていた。これらから、凄絶な悲劇の呻きが聞こえてくるような感じが伝わり、将に

兵は死地である。即ち戦いは命を賭けるのであるから、人間を鬼畜のようにするものだ。
このギロチンは、ゴ・ジン・ジェム時代に、政治犯を処刑するため、フランスから取り寄せたものだと云わているが、真実は知らない。



館内に入ると直ぐ目に止まるものは、１トン爆弾を始めとした十数種類の爆弾や化学兵器である。（右は爆弾と科学兵器用タンク）

勿論、我々が戦場に戦った４０数年前には、見られなかった型の爆弾ばかりで、他には枯葉剤を散布したと思われる大きなタンク（ドラム缶１０本位か）であった。

館内の個室には鉄棒に足かせや鎖が繋がれ、幽明相隔つ政治犯の死生契闊の様相が、窺い知ることができる。中には四周の石の壁に、「身体在獄中、精神在獄外、欲成大事業、精神更要大」と漢字で胸中を刻み、その下に小さい横文字でも彫刻され、署名は横文字で彫ってあった。

中国国内で徹底的に毛沢東思想で洗脳された共産党員の強固な意志を示し、轍鮒の急に際して「力、山を抜き、気、世を蓋う」、畏るべき精神力である。

それと共に、ベトナム戦争における中国の支援は、底知れぬものがあったようだ。此の唇歯輔車の関係が氷炭相容れない関係に陥るとは、誰が予想したであろうか。然し乍ら、前記したベトナムの歴史は、その答えを明瞭に解明していると思う。

個室の棟を過ぎると、枯葉剤による被害状況が克明に写真で訴えられ、つくづくと戦争の愚かさと、化学兵器の怖さを思い知らされた。私が中国戦線において使用した化学兵器の責任感が、五臓六腑から攻めたてて来る思いであった。

館内にはこの他、南ベトナム政府が政治犯を収容して拷問したという、コンソン島の「トラの檻」の写真等も掲載されていた。

戦争は残酷以外の何ものでもなく、絶対に美化するものではない。戦争が終結して平和が訪れた現在、人間は何を得たかとベトナム人は思っているのではないか。貧困に重税と借金、それに戦傷者と未亡人が氾濫するばかりで、塗炭の苦しみの表現には多弁を弄す必要はないだろう。

歴史博物館

高い石垣で囲まれた政治犯収容棟の無気味さから開放されると、外は熱帯の日差しは強く、緑の大樹で覆われた大通りは、溢れるばかりの平和と静寂な光景であった。

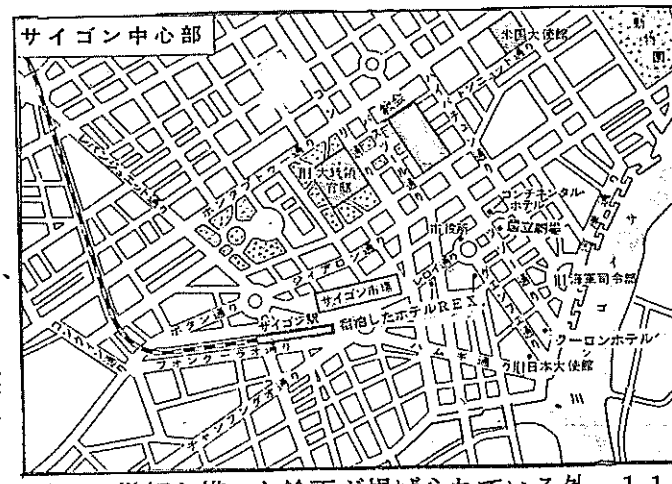
旧アメリカ大使館の前を通り、バスは市の北端にある広大な動植物園の正門を入り、直ぐ左手にある中国風の歴史博物館の前で停った。

正面中央の楼は八角形の三層となっていて、両側は翼を拡げたように石造りの建物

が延びている。

館内は四つに分けられ、４～５千年前の石器や、紀元前の青銅器などを展示した原始時代の部屋がある。

次ぎに千年以上も中国の支配下にあつた建国時代の部屋には、中国製の古い陶磁器や装飾品、楽器と武具が陳列されていた。又ここにも拷問に使用した、膝の上に積み重ねる重し石が紐で吊るされていた。



歴史を物語る中国との、数々の戦役の様相を描いた絵画が掲げられている外、１１世紀にハノイに近いバクニンで作られた、千手観音（木製）が安置され、その喜色満面の美しさは人々の眼を引き付けていた。

続いて、紀元前２世紀の建国と云われる、フーナム（扶南・カンボジア）の遺跡から出土した品から、独立封建時代のもの、少数民族の生活用品などが展示されている。中には日本の田舎で使っていたものと全く同じものがあり、興味深いものだ。

異色と思われたものでは、インドの「ラーマーヤナ」物語を、大きな銅板に描写した彫刻である。昔、サイゴン一帯のメコン・デルタはカンボジア領であり、カンボジアを通じてインド文化が伝播して来たものであろう。

博物館の前には新しい二層の孔子廟が建立され、大勢の子供達が参詣していた。中国系の住民の多いサイゴンは、中国の思想、文化の影響を大きく受けた証拠であり、我が国と良く似ているようである。

日本人は物真似の上手な民族と云われているが、中国文化圏に育ちながら、歴史の過程で何時の間にか、日本固有の文化を作りあげた。然し乍ら、ベトナム文化は完全に中国文化というか、中国文化の真似事、焼き直しの感じがする。これは南国特有の事かも知れず、このような感想を抱いて館を去った。

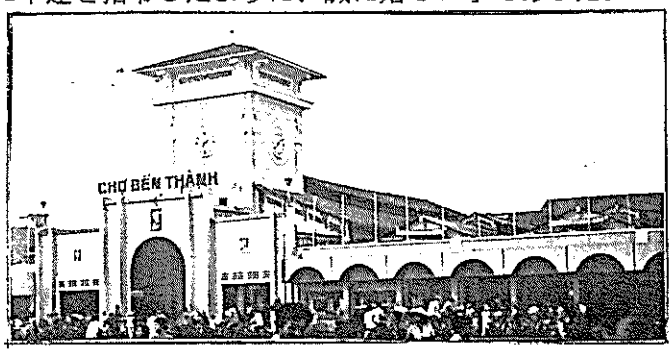
バシリカ教会（記憶が蘇る）

歴史博物館を出た我々一行は昼食のためにホテルに帰る途中、切手の購入希望者が多く、添乗員は市庁舎の北側に当る広場、即ちカトリック教のバシリカ教会の前で停車した。教会の横にある郵便局に案内するためであった。（上の地図参照）

高く聳える黄色の教会の前に立ち、眼を広場周辺に流した一瞬、４４年前の記憶が完全に蘇って来た。往時も此のように此処に立って眺めたのであった。半信半疑の中を、暗中模索して翻弄されていた私の胸宇は、暗雲を吹き飛ばすように軒々揚々、若者が闊歩するように広場を一巡した。

懐かしさの込み上げて来る豁然開朗の心境は、筆舌では表現できない心地だ。ただ懐かしい一語に尽きる。隔靴掻痒としていた私の手足は自然に動き始め、広場の周囲に並ぶ露天商や屋外食堂、それに加えて一般市民にまでに笑みを浮かべて歩いた。連鎖反応がそうさせた其の姿は、笑止千万だったかも知れない。

私の波乱と数奇に満ちた人生劇場は、流血極まる中国やビルマ戦線が主であったが、サイゴンは祖国を鹿島立ちして、白骨街道へと旅路を急ぐ一時、今生の別れを感傷的に味わった地であった。九死に一生を得て生き長らえ、こうして再び此の地を踏みしめたことは、歴史の回転が私に幸運を指令したように、誠に嬉しい事であった。



ペンタン市場と サイゴン駅

日本の「はるさめ」に似たサイゴン料理に食欲は進まずその上、例のパサバサ飯は、私の弱い胃腸は寄せ付けず、難行苦行の食事であった。

食後、記憶の蘇りは、去勢されていた者が復活したしたような感じを与え、必然的のように街頭に飛び出させた。

行く手をベトナム人の商店街の続く繁華街にとった。ホテルから一直線に進んで行くと、右側に時計塔のある黄色い建物があり、左はバスターミナルであった。地図を拡げて位置を確認すると、サイゴン中央市場であるペンタン市場と、旧サイゴン駅である。（２０頁地図参照・上写真はペンタン市場）

陸士附からビルマ戦線に赴任する同僚（戦死）とタクシに乗り、市内各所の観光を楽しんだものの、足で歩いた処でなければ印象は薄く、市場や駅に我が脳細胞は反応を示さない。時間もあり、彼等の商店街を一瞥したところでは、予想していたような荒れ果てた暗黒の感じはなく、悲嘆にくれた残酷無情の街ではないようだ。

度重なる戦乱を身をもって体験したうえ、南方民族特有の呑気な性格が、傷跡の復興を速くしているのであろうか。兵隊狩りで青年が殆ど見られなかったサイゴンは、戦後の今では若者の町に一変してしまっていた。

活気に満ち溢れたサイゴンの一断片を知ることが出来たが、中国服に似ている優美華麗な、安南服を着た娘の姿は見られず、往時のような優雅な風情のない光景に寂しさを感じた。傾国の美女は何処に隠れたのであろうか。青春時代が懐かしい。

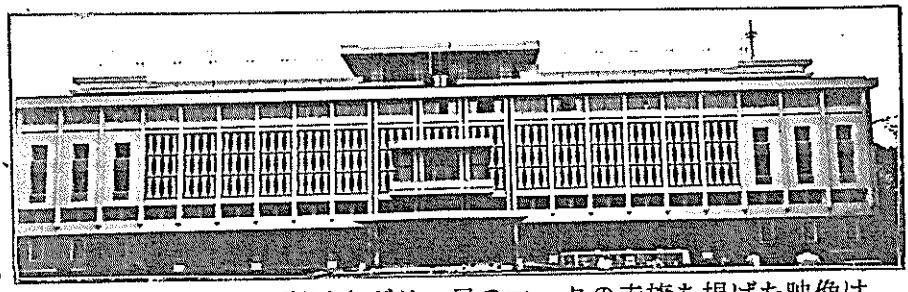
旧大統領官邸

ベトナム戦争当時から開放されるまでの間、我が国のテレビ画面を賑わしていた建物で、一般に良く知られている官邸だ。歴史を繙いてみると、総ての権力は腐敗の道を辿るようで、此の建造物も其の例に漏れず、歴史を繰り返したのであった。即ち、権力に永遠ということは、あり得ない事なのである。

１８６８年にフランスは此処に総督府を建て、第二次世界大戦後の仏の再侵略から、１９５４年の仏に協力したバオ・ダイ政権は、ここで政権を樹立した。１９５５年の１０月、バオ・ダイを国外に追放して政権を奪取したゴ・ジン・ジェムも、ここで南ベトナムの大統領に就任し、我々には彼の名前は馴染となっていた。

歴史は南北ベトナムに分割したが、英雄は並び立たずというか、アメリカ軍の投入にも拘らず不成功に終わり、１９７５年４月３０日、流血と破壊に終止符が打たれ、市民の歓声と拍手で迎えられた北ベトナム軍（ベトコンを含む）が、此の権力の府を

開放したのであった。



当日の午前１１時３０分、当時、独立宮殿と云われた旧大統領官邸に、突入した開放軍の兵士が屋上に駈け上がり、星のマークの赤旗を掲げた映像は、未だに私の脳中深く、克明に刻まれている。今現在、その建物の中に立つことは、私の変転の人生上、誠に合縁奇縁と云うしかない。（上は旧大統領官邸）

報復と復讐という流血の連続であった此の官邸の設計は、ローマ人だと此処の女性案内人が説明した。そして開放後は共産党の執務室となり、現在は使用されておらず、南ベトナム政府の腐敗ぶりを告発するために、博物館として一般に公開去れていると云う。

近代的な建物の玄関を入ると、先ず薄暗い感じの大会議室があり、約５０人分ほどの椅子が並べてある。会議室に面した廊下には民芸品が展示され、其の一つに象の足の部分を乾燥させ、屑入れにして使用しているのは珍しいものだ。

大統領執務室、大統領家族の室、大統領の教会、副大統領執務室、食堂、各寝室、閲見の間、大小会議室、応接間等を案内された。しかし各国の大統領や首相官邸を知らない私にとっては、豪華か贅沢かを判断することは出来ない。出発が総督府だとすると、日本が建てた朝鮮、台湾総督府と比較して、贅を尽くしたとは云えない。

女性案内人から、二階に昇る此の階段は、爆弾が投下された階段だと説明された。空軍司令官グエン・カオ・キを支持する空軍将校が、ゴ・ジン・ジェムの退陣を要求し、官邸に爆弾を投下した一幕は、明らかに記憶の中に残っていた。

先日放映された米国のテレビ画面に、特徴の髭の生えた彼の姿が映っていたが、海外に逃避行できない一般民衆は、彼等に対し何のような感情を持っているだろうか。

三階はレストランやビリヤード室、映画館、ダンスホール等となっており、屋上にはヘリポートが設備されていた。屋上から１２ヘクタールの広大な敷地を見渡すと、一般市民、特に北ベトナム人にとっては大統領や側近の生活が、隔世の感を抱かせたのかも知れない。

フランスの侵略から利権獲得の牙城に始まる歴史は、広い庭園の芝生をはじめ樹木は知り尽くし、今日の底抜けに澄み切った青空に向かって、其の栄枯盛衰を語るような感じであった。一日も速く陰惨な戦争に終止符を打ち、国民生活安定の国造りに邁進してほしいものである。

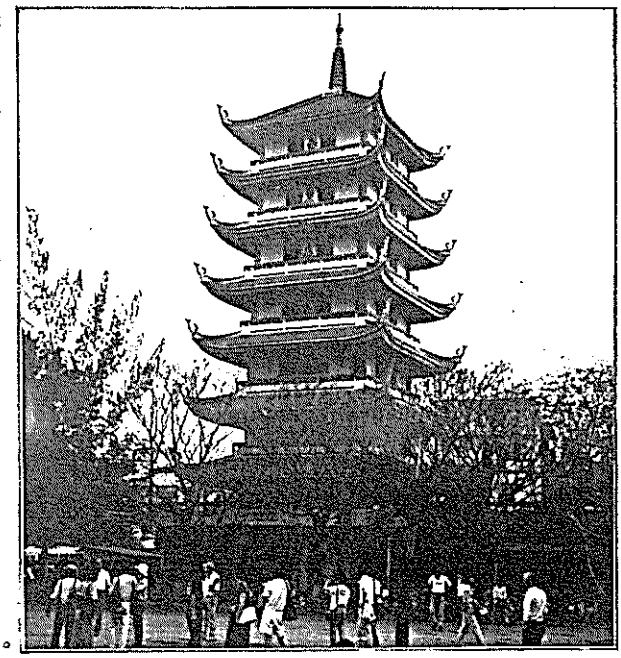
永厳寺（ヴィンギェム）

人生は偶然性の連続だと思いつつ、国敗れて官邸を残した独立宮殿とも別れ、南ベトナム最大の仏教寺院、永厳寺の境内に入った。永厳和尚の名にちなんで永厳と名付けた此の寺は、旧暦の１日と１５日の祭日には、多くの善男善女が参拝すると云うことである

大寺院らしく境内は広大で、二層の本堂は屋根に赤瓦を頂き、昇殿のために三つの

階段が設けられている。それだけ祭日には参詣人で賑わうのであろう。

１９６４年の建立というから、未だ新しい建物だ。ゴ・ジン・ジェム政権の仏教徒弾圧に抗議して行われたデモなども、此の永厳寺で実施されたのであろうか。或は当時、世界を震撼させた焼身自殺の場となつたのであろうか。



正視することの出来ない悲惨な状況を、心を痛めながら無言で見つめていた其の時の映像が、激しく私の胸の中に去来していた。

本堂に向かって左側に、ベトナムでは見慣れない七重の塔が、灼き付く天空に向って聳え建ち、睥睨とした其の威容は遠くにまで輝いている。

本堂に向かって右側には鐘楼がある。京都で鋳造され、横浜市鶴見区にある曹洞宗大本山総持寺から寄贈された、日本式の梵鐘「平和の鐘」が吊るされていた。この鐘は今回のベトナム戦争の犠牲者のみならず、第二次世界大戦で亡くなった日本の英霊も、併せて供養する旨の銘が刻まれていた。（上の写真は七重の塔）

本堂の正面には「万徳慈尊」と掲額され、奥のご内陣には金色の仏像一体が祀られ、他に釈迦仏などの三体も安置し、天井は曼陀羅を描いた絢爛豪華な格天井である。

山門の横にある当寺の売店に、獣の牙に合掌した仏像を彫刻した首飾りが吊るされていた。無風状態に慣れ過ぎた我々に対し、行住坐臥の間も慰霊に励めと暗示しているようで、銃弾ならぬ平和の守りとして買い求めたのである。

漆器工場と商売の実相

仏様の福々しい顔は、サイゴン市民の痛ましい過去の精神的荒廃を和らげ、苦渋から安泰へと導かれるものと信じながら、バスの中で「忍耐とは希望を持つことの技術である」と、誰かの述べた格言を思い出していた。希望は愛国心の根源だと、サイゴンの人達に訴えたい心境である。

次ぎの観光として漆器工場に案内された。ビルマを始めとして、太陽が火の粉を撒き散らすような熱帯にも、漆器が生産されるのである。中国は勿論のこと、酷寒のソ連でも然り、漆器は人間の智恵として全世界的なもののようだ。

汚い漆器の作業場を一巡して展示即売場に案内されたが、中国文明の影響を強く受けたベトナム漆器は、殆ど中国のものと変わらない。勿論、日本の漆器の伝来は中国だが、今では日本特有のものとして、完全に独立したものを作り上げている。私の住む石川県の輪島漆器にしても、現在多くの中国人留学生が招聘されているほど発展し、技術的に数段の差があるようだ。

それにしても日本の漆器といえば高価なイメージだが、円高の性かベトナム漆器は

廉価であり、一行は財布の紐を弛めて買いあさり、群集心理は募るばかりであった。ただ日本のような高度な技術を要する沈金蒔絵の類はなく、中国式の貝を鏤めたものばかりで、中国の出店のような感じであった。

工場を去って夕食までの一時、ホテル前のグェンフェ通り（２０頁地図）を散策して、物価の状況を調べてみた。政府直轄の工場や売店と、一般市民の店の値段とを比較すると、約３倍の開きがある事が判明した。漆器工場もホテルの売店も断然高い。

サイゴンは開放された当初、社会主義経済体制をとったが失敗に帰し、自由市場体制に逆戻りしたものの、同じ商品に是れ程もまでも差があるとは、常識的に考えられないことである。

ベトナム政府は我々観光客に対しては、政府直轄店ではドルによる購買を許可し、一般市民の店舗での購入は、ドン（ベトナム通貨）を使用すべしとの強い通達が出ている。然し乍ら、政府の両替と市中のヤミの両替では、矢張り３倍の開きがあり、我々は３倍もの高値で買わされている。

其の上、出国に際しては、入国時に申告したドルの使用状況を徹底的に調査し、違反者は処罰するとの達旨もあり、厳しい軍政が敷かれているような感じだ。「君子は危きに近寄らず」と心に決めたものの、人間は欲の塊であり、市中でのドルを使いたい心理は押さえ難しであった。

サイゴン市民の政府に対する不信感は、通貨であるドンに対して現われていた。至って数の少ない外国人観光客が歩行していると、必ず数人のベトナム人が近寄って話しかけ、ドンをドルに交換してくれと催促し、札束を見せながら執拗に迫ってくるのであった。

此のことから、ベトナム難民がドル紙幣を束にして持っていた事も首肯かれ、ドルに対する願望の強烈さが窺われる。その反面、政府はドルのヤミ両替に目を光らしていたが、日本の円は全く通用せず、国際通貨は矢張り米ドルであった。

民族芸能の鑑賞

ホテルでの夕食後、同ホテルの会場に於てベトナム・ショーが催され、観客は我々とイタリアのツアーのみであった。

開幕の前にサイゴン・ツーリストの通訳と話し合ったが、ベトナムを訪れる観光客の筆頭は日本人で、我が国ではそれほど宣伝していないに拘らず、断然他を引き離していると云うことだ。

日本の旅行社の添乗員の話では、ベトナム国営旅行社と提携する事が困難であり、仲々認可が下りないようだ。我々旅行者からすれば、他の如何なる外国よりも数段高額な旅費であり、伸び悩むのではないかと思われてならない。

私が今般参加したツアーは、ベトナムに魅力を感じて参加したのではなく、アンコール・ワットの見学が最大の目的であり、憧憬の的であったからだ。そのアンコール・ワットの所在するカンボジアは、現在ベトナムの支配下に属し、其の観光も一切ベトナムの手に握られている。

いよいよショーが始まった。往時、街の至る所で眺められた懐かしい民族衣装と再会し、その質素で華麗な感じは誠に優雅である。街に氾濫していた彼女達のあの姿と、フランス文化との調和のとれた風情は、東洋のパリーと称した所以であろう。

白、赤、青、黄、紫など、一色の色彩である民族衣装は、朝鮮民族の衣装に似ているものの、歌や踊りの素質が全くない私には退屈の一語であつた。ただ、ショーの一員の奏でる一弦琴（中国の胡弓に類似した楽器）だけは、観客の眼と耳を釘付けにした見事な名人芸であった。

彼はまた演出家だ。我々日本人を迎えて「咲いた咲いた・・・・・」の日本の歌を琴で奏でたのである。経済大国の威力はベトナムにも影響を及ぼし、ショーの紹介や説明までも最初から日本語で始まり、誠に気分の良いサービスぶりである。

音楽に興味の薄い私にしては珍しく、ショーが終了した途端、幔幕の降りた舞台を訪れて彼に握手を求めた。喜色満々の顔をした好感の持てる彼は、木魚の形をした楽器を叩くポーズをとり、早速、カメラを構えて記念撮影を撮ったのであった。

１２月３０日（水）曇りのち晴

ミトー市観光

ミトーはティジャン省（人口約１２０万）の省都で、人口は約１２万人。サイゴンから国道４号線を西南へ７５kmのメコン・デルタにある。（右図参照）

カンボジアからベトナムに入ってくるメコン川は、九つの支流（クーロン）に分かれるが、ミトーは其の一番東側のクワダイ川に面している。

この川には四つの島があり、船でメコン川を遊覧する観光コースは、島の一つのタイサン島（長さ９km、幅１km、人口５０００人）を見学するのである。

この島では米の収穫はないが果実が豊富で、ココナツ、マンゴ、パパイヤ、リュウガン、オレンジ、バナナなどが実を付けている。

ミトー市街はメコン・デルタでとれる産物の集散地であり、マーケットなどの並ぶ商店街も活気を呈している。

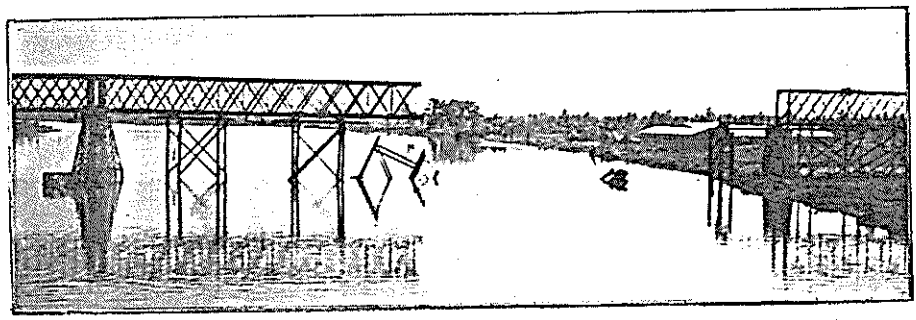
街道風景

我々を乗せたバスはサイゴンの市街を離れ、田園の続く街道を西南に走った。薄靄の中を銀色に染まった朝日が昇り、心の広がる悠久な風景を眺めている時、十数年間も戦いの場となった沿道に、無感覚ではいられない。

錆ついたオンボロ・バスは超満員の人を満載して走り、僅かのタバコやパイナップル、日用雑貨などを並べ、当てもない客を待つている人達の何と多いことか。飽食暖衣の日本人から見れば、失礼ながら、彼等の生活は地上最低に近い感じさえする。

劣悪な経済状態の中に於ても、時には中古のオートバイを暴走させ、格好良く得意然としている姿も見られた。そこでサイゴン・ツーリストの通訳に、労働者の平均賃金を尋ねると、２０ドルｕｓと答え、夫婦子供二人の生活費は１万ドン（２５ドル）だということであつた。

眼に映ってくる光景の中に、フランスの統治の名残であろうか、フランス・パン



が塵埃をかぶって露天に並び、家鴨の水遊びする長閑な田園の光景も見えていた。

稲作は３ケ月もすれば刈り取りが可能となり、努力次第では３耗作も出来るというから、人海戦術で田を耕す光景あり、田植え早々の田圃あり、成育期を迎えた青田、取り入れ前の黄金色の稲田など、色とりどりの豊かな色彩を展開していた。

果てしなく広がる水田と点在するヤシの茂みは、自然の素直な響きを発しているが、我々のような死闘を体験した者にとっては、ニュース画面を賑わした凄惨な街道光景を、忘却することはできない。戦々恐々として天秤棒を担いぎ、懸命に逃避する無残な容貌を想起すると、遊山気分で通過する我々は、一人の人間として相済まぬ心地になつてくる。

突然、左側から網膜に写って来た映像は、破壊された真っ黒い鉄橋であった（上の写真）。米軍機の爆破した鉄橋は戦争の資料として、修理もせず、撤去もしないで、観光資源となっていた。名所旧跡の少ないサイゴンでは、明日に訪れる地下壕の見学と共に、ミトーを選定した魂胆が、この辺りに存在したのかも知れない。

然し乍ら、戦争の傷跡を見せることよりも、もっと大切な事があることを忘れないでほしい。「開放」とは読んで字の如く「解き放つ」ことだ。即ち、閉ざされた悪の状態を、自由な「善」の状態にすることである。経済的に暮らしを良くしなければ、開放ではないと力説したいのである。

街道に整然と並んだキリスト教の墓地が見えて来た。また、鍛冶屋、野外食堂の店、中国式の古本屋、その他の商店も見えて来た。知らず知らずのうちにミトーの街に着いたのである。

永長古寺

小さな商店（ミトーでは大商店だろう）で休憩後、街はずれにある永長古寺へと進んだ。万象の流転して行くなかで、至高の大慈悲がこの田舎町に鎮座して、戦禍を逃れて健在したことは何よりであった。

煉瓦で造られた二層の山門の屋根瓦は、線香寺と同様に細かい彫刻が施され、山門をくぐって行くと「永長寺」があり、其の後方に「永長古寺」がある。何れもヤシの林の中に優美な姿を現わす、古色蒼然とした白亜の殿宇である。

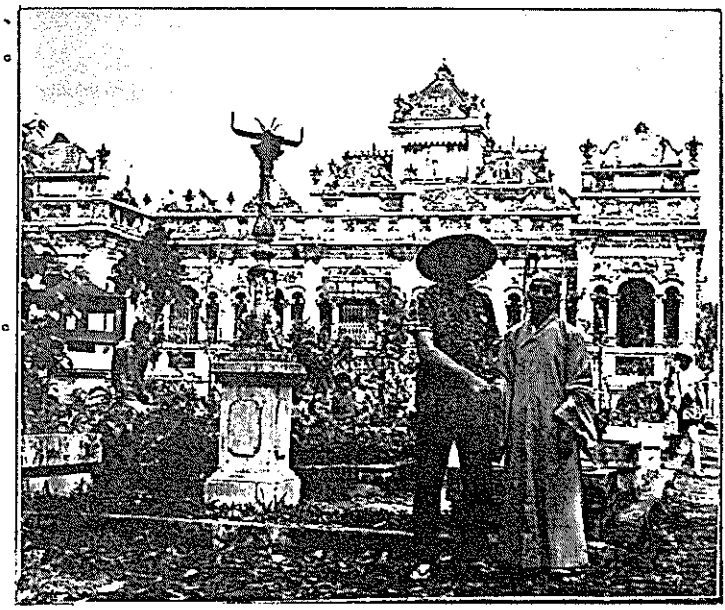
１８４８年に建立された此の寺は由緒ある寺院の風格をそなえ、自然に襟を正すような雰囲気に曳かれていった。２ケ月前に坊主になったという僧が、笑みを浮かべて愛想よく出迎えてくれたが、彼には心を開いて語り合うような近親感が湧き、信者は自然に敬慕するのではないだろうか。

永長寺の本尊は釈迦仏であり、その両脇には馬やカバなどに乗った仏像が並び、永

長古寺の本尊は頭巾を覆い、黒衣をまとった像であった。恐らく古寺の開山上人ではないだろうか。

その像の下の壇には、王様に反対して左遷させられたと云う、僧侶の写真が祀られ、白亜の伽藍は由緒ある古城の感がしたのである。

参拝した後、一見十年の知己のように思われた僧と記念の写真を撮り、万人の渇仰の的になられることを期待しながら、握手をして別れたのであった。（右は握手をする僧侶と小生）



タイサン植物園

汪洋とした大河の流れの中を、一行の乗船した頑丈な木造船は、ミトー市の上流へと遡航した。岸辺には洋風建築も見かけたが、市から離れるにつれて、水上生活をするニッパヤシの家屋に一変し、往来する木造船は輸送の大動脈であった。

窓のある低い船倉に、腰を曲げながら我慢すること約３０分、タイサン島にある植物園の桟橋に着岸した。ツーリストの看板を掲げた門を抜け、細い畦道を歩いて行くと、ニッパヤシのレストランが建っていた。

テーブルの上に盛られた果物の中で、初対面のウォーター・リンゴは珍しい果物であったが、美味しさは日本の林檎に遠く及ばず、味見しながら休憩に入つた。

農園のウォーター・リンゴの樹は、小さな赤い実を鈴なりにつけ、地面に届かんばかりにたわみ、下の縦横に掘られた水溝は、ワニが出没するような感じであった。

暫くの見学時間だった此の孤島も、戦争の混乱に巻き込まれ、青々とした緑が枯葉剤で全滅した、苦い経験もあったらしい。現在の此の平和の姿は、李白の「天地は万物の逆旅（旅篭）にして、光陰は百代（永遠）の過客（旅人）なり」という、詩のような情が感ぜられて来た。

小一時間の休憩の後、赤地に黄星を付けたベトナム国旗を掲げ、ヤシの実を積んだ船に乗船して帰路に着いた。船倉ではヤシ水とコプラのサービスがあり、久振りに味ってみたものの、下剤を飲むような感じだ。

船倉を出て船上から眺める大河の流れは、止まることなく流れて、本の水は遠くに過ぎ去り、世の人達とみな同じ現象である。メコンの流水は生者必滅、会者定離を、物静かに教えているようであった。

昼食のレストラン

数隻の鉄船が繋留されている桟橋で下船し、路傍にヤシやバナナにタピオカの生え

た、舗装のないガタガタ道を進行した。南国には春秋がなく、雨期と乾期に分かれ、ベトナムの今は駘蕩の春のように花が咲き乱れ、最も爽やかな季節だ。その中で、赤牛の耕す畦道に立つた安南帽の姿は、実に自然的な農村の風景であり、人生も自然の一部だと眼に映って来た。

昼食のレストランはミトー市の郊外に在り、爛漫と咲く花に囲まれた公園の中にあった。エビにカニ料理、それに鯛に似た川魚など、私の好きな料理に漸くにしてありつけた。環境も風光も料理も総てが良く、今夜は此の片田舎に泊まりたい気持で一杯であった。

神様は田舎を作り、人間は都会を作った。そして食生活までも変化させてしまった。汚染されたサイゴンの街よりも、健康的な此の田舎レストランの方が、断然私に向いていた。満ち溢れる自然を眺めて食事をとることが、人間の心情を自然に結び付けるもので、食生活の第一条件ではないだろうか。

ホテルに帰還したものの陽は未だ高く、時間は有効に利用したいと思いながら、今日は国立劇場前からドンコイ通りを歩いた。サイゴンの銀座街に相応しい華僑の店が軒を連ね、突き当たりにサイゴン川が流れていた。其の西の角にあるホテルがクーロン・ホテルである。（２０頁地図参照）

河畔の公園を歩いて大通りを右に折れると、市役所の通りであるグエンフェ通りに出た。広い通りの中央に一定規格の商店が並び、大通りの両側も商店街であった。

当時のフランスの人達は、パリーのシャンジェリゼーのような広い通りの屋外で、バンドの演奏を聞きながら食事をとっていた。其の場所は何処であったかと、立ち止まって記憶の糸を手繰ってみると、恐らく此の通りに間違いないようだ。

そして又、４４年前に宿泊したホテルの前には、大河が緩やかに流れ、極暑に耐え切れずに河畔を散策したことを思い出すと、其のホテルはクーロン・ホテルに間違いない。（下は懐かしいクーロン・ホテル）

１２月３１日（木）晴　大晦日

鉄の三角地帯　クーチの地下壕（２５頁地図参照）

国道１号線

夜中に猛烈な二回の下痢に見舞れ、体力の消耗が甚だしい。原因は判然としていた。即ち、昨日飲んだヤシ水とコプラである。戦時中にも、これで下痢をした苦い経験がある。ヤシ水やコプラは石鹸の原料であり、私のような胃腸の弱い者には下剤を飲用したのと同じく、覿面であった。

朝食はパンを要求して、ツアーの中の葦刈典夫先生から薬を頂戴した。有難く御礼を申し上げると共に、幸福は何よりも健康の中にありと力説しておきたい。

本日の観光は国道１号線（サイゴン～プノンペン）を西に走ること約７０㎞、クーチ地区にある地下壕の見学であった。現在でも２５０ｍのトンネルが保存されており、インドシナ悲劇の断面と輪郭を知る上ににおいても、最高の想い出となるだろうと、期待しながら出発した。

乗車したバスは南国の強い陽を浴びながら大平原を西に進むと、何処も同じく、僅かなタバコやフランスパンを並べて、小商いをする光景が眼に映ってくる。我々には考えられない零細な経済である。一方、計画的に稲の成育期を違えて、いろいろな色彩を帯びた田園風景は、日本では見ることの出来ない情景であり、大穀倉地帯の貫禄は充分だ。

通訳の話では、自転車の値段は７０万ドン、オートバイは２００万ドンだという。１ケ月の生活費（親子４人）が１万ドンだとすると、気の遠くなるような高価な物で、殆ど錆だらけの自転車にしかお目にかかれないのは当然だ。

戦争が終わったと云うものの、猛烈なインフレの嵐に吹き曝らされている現状から、明日をも知れぬ境遇を経て来た彼等が、血のにじむような思いで平和を希求する実感と、口先だけの平和を唱える平和ボケ主義者とでは、平和に対する観念には雲泥の差があるだろう。

猖獗地帯と化した１号線の逃避行が、如何に混乱と凄惨を極めたか、身をもって戦闘を体験した私などには、白昼に悪夢を見ているように想起され、貧しい彼等の姿は、我々に冷汗三斗の思いを浴びさせるようであった。

変化して行く国道線沿いにクリークが見えていた。其処には砂糖キビが元気よく繁茂して、無心に草を食む水牛の大きな角は、「平和は仮面をかぶった戦争にして、忘るべからず」と、教示しているのだと考えると、自然は実に味のあるものである。

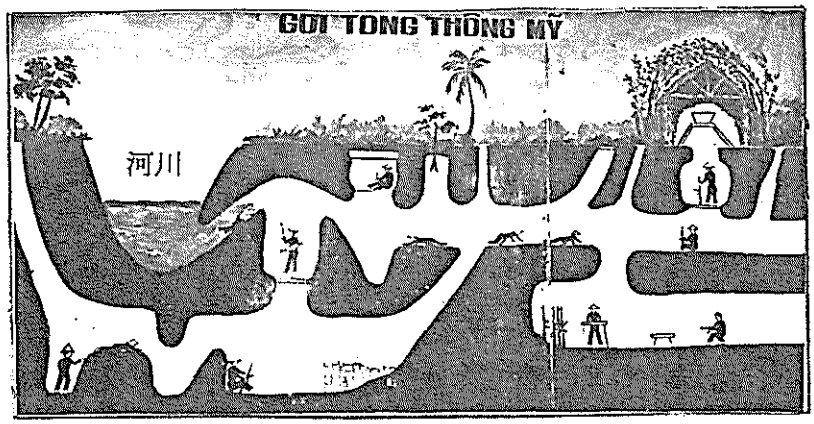
地下壕

国道１号線と別れ、疎林に通じた赤土の道を進んでバスは停車した。クーチ県の地下壕のある現場である。直径１５～２０㎝程度の高く背の伸びた緑林の中に、一軒の独立家屋が建ち、説明会場となっていた。

説明を担当する中年女性は、眼の奥に深い悲しみを漂わせ、恐怖の束縛から開放されたような顔をして、クーチ県の地図を指しながら、坦々と説明を開始した。

クーチ県は戦争直後は８万人の人口に過ぎなかったが、現在では約２０万人にまで

に発展している。
また戦争中は此処の村の人口１万６千人のうち、１千人が死亡し、ゲリラ地区の１拠点であった。



クーチ県は植民地時代から、フランスのゴム園が主体であったが、米軍の爆撃によって壊滅状態となり、１０００以上の家屋が完全に破壊されてしまった。

１９４８年から地下壕を掘り始めて蜿蜒２５０kmにも及び、サイゴンの西方３５kmまでも延びている。壕全部が完成するまでには２０年の歳月を要したが、化学兵器の発達した米軍基地の地下にまで通じ、全県に跨って連繋していると云う。ベトナムの歴史の通り、実に粘り強い闘争心である。

説明会場となつている正面には、上記のような各種の写真や地図が掲載されていた。数段に掘り巡らしたトンネルは、地上の建築物に通じていることは勿論のこと、上の写真のように河川にも連略して隠蔽され、蜘蛛のように縦横無尽である。

地下壕は指揮官の指令室、兵員の兵舎、貯蔵庫、井戸、炊事場等の各設備が整備され、通気孔は無数に設けられている。壕の末端は必ず河川に通じ、出入口の擬装と水の補給に利用しているが、素晴らしい闘魂に舌を巻くのであった。

ベトナム戦争の泥沼化の中で、どれほど米軍機が跳梁しても、此の村の犠牲が少なかった原因は、お粗末ながらも、早期に地下濠掘りに着手したからである。

盤根錯節のように繋がるトンネルから、不意に這い出て敵の虚を衝くゲリラ戦には、装備の絶対優勢な米軍でさえも、風声鶴唳というか、風の声や鶴の鳴き声にも、びくびくする心理状態に陥ったと想像されるのである。

ベトナム戦争当時のニュースを想い浮かべてみると、南ベトナム政府軍や米軍の肝入りで設けた戦略村が、其の地下にゲリラの陣地が張り巡らしていたとすれば、情報は一方的であり、不意急襲を甘んじて受けたのは当然の結果である。

一般的にベトコンのゲリラ戦は、前の夜に道路を切断し、フルスピードで走行して来た自動車が、立ち往生するところを狙撃する方法や、自動車が外側にハンドルをきる所を予想して地雷を敷設する方法、それに陥し穴戦術だと考えていた。

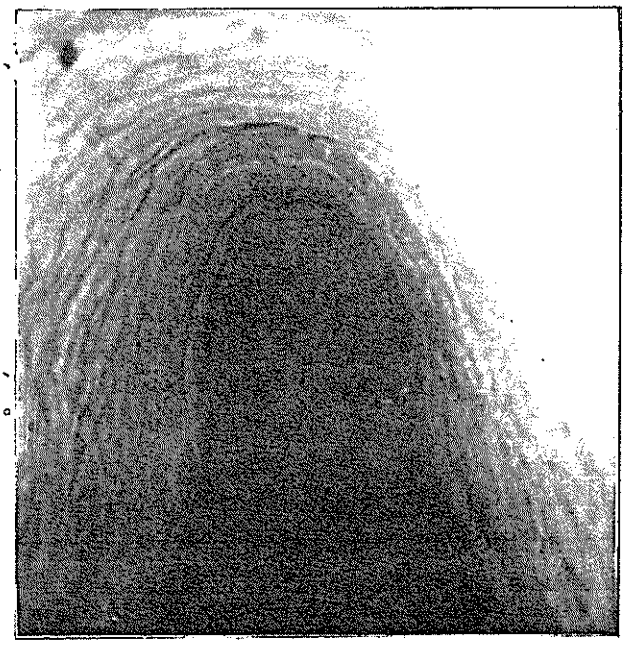
然し乍ら、私の認識不足は甚だしく、彼等はあのような地下設備を拠点にして、積極的に敵の弱点を衝く攻撃型ゲリラ戦を、早くから敢行していたのである。その上ベトコン達は住民には絶対に危害を加えず、住民に信頼され、相互の信頼、協力から情報の収集や陣地の秘匿が出来たのである。

一通りの壕に就いての説明が終わり、論より証拠とばかり１００ｍほど離れた現地に案内され、彼女は壕の入口を指差した。男一人がどうにか入れる入口は、縦穴式の古墳を木の板で蓋をしたように、周囲に調和して良く偽装されていた。これでは道路を通過して行く敵の部隊も、林の中にある隠蔽した入口の発見は困難である。

辛うじて私の体が入れる縦穴に、最先に入ってみたものの階段はなく、縦穴の両側に足を掛ける窪みがあるだけだ。地表から２ｍほどの下から横穴に連略し、５ｍほど進むと屈折し、此の様式が繰り返されて延々と連絡されている。

地下壕には勿論、電燈はなく、持参してきた懐中電燈を照らしながら進むと、我々を迎えてくれたものは、生命力抜群のゴキブリだけであった。彼等は見たことも無い照明に怖じける事もなく来襲し、一瞬、我々の方がたじろぐのであつた。

高さ１ｍほどの壕内では背伸びさえもできず、幅も人が通れる程度で余裕はなく、赤ん坊のように匍匐しなければならず、まるで初年兵だ。



（上は壕の一部、突き当たりから左に屈折）

膝頭を擦り剥きながら、懐中電燈を頼りに匍匐前進すること約５０ｍ、漸くにして出口の縦穴にぶつかり、汗びっしょりの体を支え挙げて、再び陽の輝く人間世界に帰還した。

ツアーの一般の人達は初めての体験だろうが、私達のような死闘戦場を潜り抜けて来た者にとっては、大なり小なりの壕内生活は経験済である。本日、トンネルの中を腰を折り曲げ、膝を痛めて匍匐してきた感想はと聞かれると、「歯牙に懸くにも足らず」、と答えなければならない。即ち心理的に、敵の圧力からくる死の恐怖感がないからである。

勿論、戦場に於て我々の構築した壕を含んだ陣地は、敵の優勢な火力から身を守り、我が火力を最大限に発揮する事が第一条件であった。そのために構造的にも優れており、ゲリラ戦の地下壕とは全く性質を異にしていた。然し乍ら、ゲリラ戦の軽視が誤りの根本であり、無智蒙昧と言わなければならない。

ゲリラ戦

ゲリラとは、スペイン語で小戦争を意味し、不正規兵や便衣隊などによる遊撃戦のことを言うのである。

ゲリラの起源は、１８０５年、トラ・ファルガーの海戦でフランスは全艦隊を失ったが、ナポレオンは１８０７年にポルトガルに侵入し、翌年スペインにも進駐した。その時、首都のマドリード市民は反フランス暴動を起し、全スペインの独立戦争の狼煙をあげた。抵抗する国民はイベリア半島全土に於てゲリラを組織し、かってない国民的高揚を占め、ナポレオンの没落まで抵抗を続けたのであった。

過去の戦史を繙いてみると、近代装備の軍隊はゲリラに弱いと云う結論である。即ち、優勢な戦力を発揮できない所で挑戦する小戦法が、ゲリラ戦である。

米軍は５０数万の兵力を投入し、陸海空の絶対優勢な火力を有しながら、劣悪な装備の北ベトナム軍とベトコンに敗退した。ナポレオンは「戦争は補給なり」と唱えたが、米軍は補給線を攪乱・遮断され、重装備の威大な戦力を発揮することが出来なかったのである。

長い補給線の守備を固めれば莫大な兵力が必要となり、第一線の兵力が減少して、至る所が弱く強い所が無い状態に陥る。ここがゲリラの狙う弱点である。

私も中国戦線に於てゲリラ戦に遭遇した経験があり、ビルマ戦線では米軍や英印軍に対し、ゲリラ戦法を以て成功した例がある。貧弱な経験だが、近代軍と雖も主力軍と遊撃軍とは、唇歯輔車の関係にすべきではないだろうか。

今日はクーチの地下壕を見学して、ベトコン達の精神力の驚くべき強靭性に舌を巻き、ベトナム民族をはじめ東洋民族の強さと、幽鬼の群のように翻弄する戦法に拝跪したのであった。

中国に「身を漆し炭を呑む」という故事がある。自分の身を誤魔化すために身体に漆を塗ると、かぶれて癩病患者のようになり、炭を呑むと声がつぶれて唖のようになるという。即ち中国では春秋時代の昔から、このようなゲリラやテロの戦術が、研究されていたのである。

ベトナム軍のゲリラの教師として、当時、手を結んでいた毛沢東の影響力が、甚大であった事は事実である。東洋に於ては毛沢東はゲリラの権威として称賛され、長征から身に付けた信念ともいうべき戦法であった。

彼は、自己保存とは敵を消滅させることであり、大海での水泳術だと称していた。彼の主張した戦法が日本軍を悩まし、内戦を勝利に導いたのである。そして彼の唱えたゲリラ戦の必要条件は次ぎの通りである。

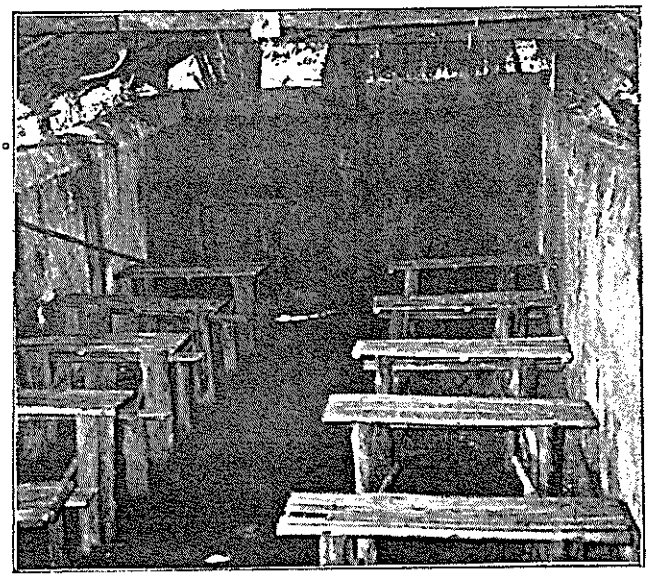
① 人民の支援を得ること。（信頼から人民戦線の形成）
② 広大な領土（自足自給と農民の支援による補給の確保）
③ 確実な根拠地域（見学したクーチ村の拠点）
④ 優れた指導力（実戦的指導力、即ちスト、謀略的破壊、民衆暴動、放火、テロ等の幹部教育と実習）
⑤ 軍事、政治、経済、文化等の総合戦力の向上（特に知識人の吸収参加）

鉄砲を不要にするには鉄砲を手に取らなければならない、と力説した彼は、「都市は農村から包囲する」とも唱えた。そして彼の言葉の通りに、サイゴンは農村からのゲリラに包囲されて陥落してしまつた。クーチは何よりも雄弁な証拠である。

トンネルの見学が終わり、次ぎはゲリラに破壊された米軍戦車の見学であった。地下壕の真上で、戦車の死角に入ったところを奇襲され、擱坐炎上した残骸が訪置されていた。将に鎧袖一触というのであろうか、毛沢東の指導の通りに忠実であり、愛国心に燃えていた結果である。

今朝からの腹の具合は依然として悪く、一足先にバスに戻る途中に、大樹の蔭にニッパヤシの小屋が建っていた。覗いてみると地下壕に通じており、現在は学校として使用され、戦時には会議所としても利用したようだ。上記した④の指導力養成の学習は、欠かさずに実施されていたのである。（次頁は学校の写真、机の向うが連絡壕）

楊兆混氏の想い出



約一時間にわたるクーチ村の見学を終え、帰路の時間が近ずいた。その時、私の友人である楊兆混氏のことが、一瞬、脳裏に閃いた。

彼は終戦時にサイゴンの東亜日報の記者として活躍していたが、反仏戦争に巻き込まれ、強制的にベトミンに参加させられ、約2年の間この1号線沿いのゲリラ戦に参加した。

その後は香港に移住し、語学力を活かして同時通訳を業とし、屡々訪日していた。拙宅にも2回ばかり来訪し、東京、大阪では度々お逢いするなど、親しい関係になつていたが、残念ながら一昨年、逝去されてしまった。

私が香港の彼の家を訪れて語り合った時、彼が疲労、飢餓、渇と暑さを克服して、ゲリラ戦に駆り出された事や、死よりも辛い哀切を感じながら、仏軍陣地を夜襲した体験談を聞かされた。

私が「両忘」と題して吾が戦闘記を上梓したのに刺激されたか、彼はゲリラ戦記を出版したい希望を述べ、私に協力を依頼して書き綴ったメモを渡した。帰国してメモを取捨選択していると、仏人のプランテーションの名称が何十回となく記載され、クーチ村の名前も暗記するほど書かれていた。

その彼の霊が私を目覚めさせたのか、クーチは俺の古戦場だと叫んでいるような心理に陥り、彼の書いた戦記が次々と浮かんで来た。

道路の両側にある高い樹木にロープを張り、その中央に小型爆弾を偽装して吊るし、ロープの一端は離れた所の木に括り付けて待機する。そして敵の自動車が通過する時にロープを切り落とし、爆弾を破裂させるゲリラ戦法が得意だったようだ。

或は仏軍の守備隊の鉄条網を切断して夜襲を敢行し、敵の大量の食料を持ち帰った大戦果なども、此のクーチ地区での戦闘であった。その他、当時の戦法は、中国の三国志やベトナム史などから、ヒントを得たように記憶している。

私が此のようにクーチ村を訪れたことを知ると、活動的な彼は直ぐに飛んで来た筈だ。しかし彼は鬼籍に入り黄泉の客となってしまった。偶然にしては稀有である大晦日の今日の回顧は、彼が導いたように思えてならず、楊さんの御冥福を心からお祈りしたのであった。

貿易センター

鉄の三角地帯より帰館して昼食の休憩の後、午後2時から貿易センターの見学となった。バスはグエンフェ通りを通過して右折し、サイゴン川に沿って進行すると、河畔の公園の前に建つ洋式建築の玄関で停車した。

ベトナム随一の貿易センターと期待して見学すると、建物に比較して内容は貧弱である。漸く戦火が収まったからか、外貨を獲得するような物はなく、現在のベトナムの国力を如実に表わしていた。

昨日案内された漆器工場の製品が多く展示されていたものの、他にツアーの人たちの食指の動かすような品は少なく、物珍しい物としては少数民族の蛮刀や竹・葦の編物であつた。それにしても価格は驚くほどの廉価を考えると、国際経済は如何なっているのかと、素人の私ながら同情心を感じるのである。

センター前のサイゴン川河畔で遊ぶ子供達は、違和感もなく無邪気に私にまつわり、写真を撮ってくれと催促しているようで、一期一会と記念の写真を撮って喜ばせた。明日は正月だが新しくシャツ一枚も求められない彼等に、寂莫の感を抱いて別れ、川の岸辺を暫し散策していた。

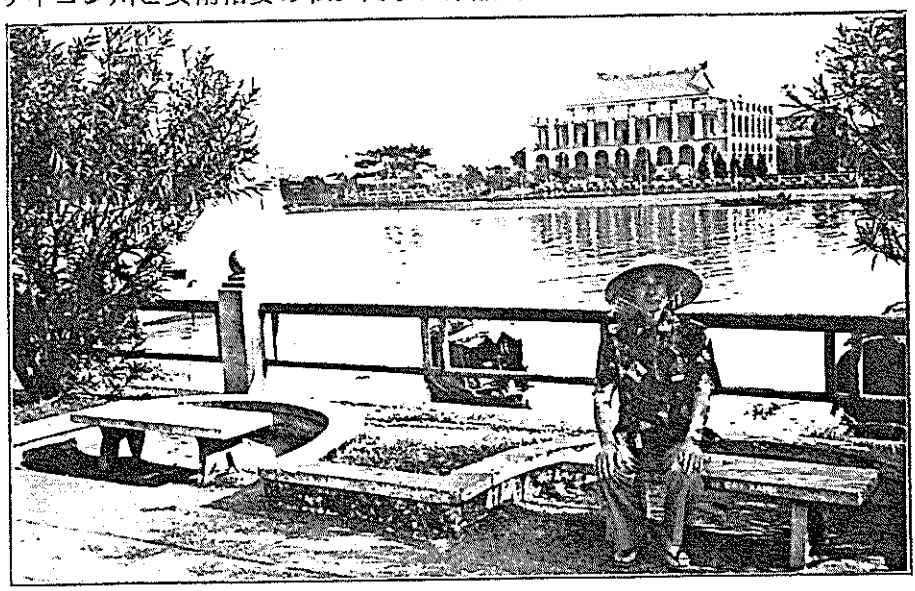
サイゴン入りをして早や四日を過ぎたが、市民のカメラを手にして写している光景に、出会ったことがない。貧しいと思われる中国の田舎都市でさえも、ブームのように写真機が氾濫している事を考えると、ベトナムの貧困の程度を窺い知ることができるのであった。

かんかん照りの陽ざしの中に、サイゴン川は長閑な色彩を帯びて照り返し、遠くの水面には大型船舶がのんびりと繋留され、こちらの岸では女性が商売に懸命だ。ベトナムでは女性の方が気性が激しく、男まさりの商売をしているが、サイゴンの復興は女性の力に俟つほかはないだろう。

貿易センターを去ってクーロン・ホテルで解散となり、露天商の通りを歩いてみた。明日の正月を家庭で迎える準備か、殆どの商店は店を閉め、美を売る花屋だけは商売繁盛の状況であった。流石に洋の東西、南北を問わず、美しいものは喜ばれ、美しいものは和であり親しみである証拠だ。そして祝福も美であり和である。

夕食後、大晦日の舞踏会がホテルに於て催されたが、依然として下痢の状態は快調に復さず、アンコール・ワットに備えて華胥の夢を見るべく、草々に床に就いた。

（下はサイゴン川と安南帽姿の私。向うは乗船場と船舶）



1988年1月1日（金）晴

元　　旦

初日の出

午前５時に起床してサイゴン川に昇る初日の出を拝み、新年の気分を味わいたいと部屋を出た。

ロビーで寝ていたボーイは目を擦りながら、酔眼朦朧としてドアを開け、元旦を祝う習慣のない彼は、不思議な顔をして眺めていた。

静まりかえった夜明け前の暗闇に、点々と灯が見えていた。それは七輪（コンロ）に火をおこし、商売の準備に急ぐ露天商の女将たちである。街路の中で煌々と明かりの漏れている店舗は、一人舞台の花屋だけで、正月に花を飾り、花を贈る習慣はサイゴンにもあるようだ。

既にサイゴンに滞在すること五日目を迎えたが、哀れな難民の姿は眼に写らず、経済的に稍々立ち直ったと感じていた。然し乍ら繁華街の大通りの軒下に、可哀想な境遇の難民の姿が見えたのである。三々五々、彼方此方にごろごろと転がり、根なし草になった戦争の傷跡が、闇の中に展開していた。

サイゴン川の河畔に拡がる公園に着いたが、黎明には未だ早く、静寂の夜明け前であった。ふと一方に眼を向けると、親子５人家族の難民が、一枚のゴザと一枚の毛布にくるまって、寒さを凌いでいたのである。

父を亡くして小さな子供を抱えた母の姿は、正視できるものではない。戦争が生んだ犠牲が今もなお尾をひき、死よりも悲惨な情景である。出来ることなら歴史の回転を速くさせ、難民救済の成果に期待を掛けながら、初日の出を待った。

６時を過ぎた頃から、対岸の東の空は白み始めた。昭和６３年の黎明である。一方の公園広場では、中国系住民であろうか大極拳を始め、何処からとなく集まって来た子供達が、朝の静寂を破って戯れ出したのである。

向う岸のヤシの林を通した薄明の空は赤みを帯び出し、刻々と大きく拡がる中に、雲は其の形を変えて行く。

真っ赤な陽は東の熱帯樹林をパノラマのように映し、絵に描いたような曙光は見る見るうちに上昇した。

昇る旭日に向かって私の神経は、自然のうちに二礼二拍一礼を命じ、無心の状態で昭和６３年の元旦を迎えたのである。（上はサイゴン川の初日の出）

陽光は煌々として水面に反射し、森羅万象は年頭の活動を開始した。先ほどの親子５人も簡単な寝具をたたみ、当てがあるのか何処かへ去ってしまった。本当に元旦から背筋が凍るような思い出になってしまった。

昼間は当局の監視の目が厳しい性であろうか、難民や浮浪児の姿は見ることは出来ない。しかしながら、今朝は１０歳位の男の子が５、６人、輪をつくってトランプを配り、各々少額の紙幣を手にして賭け出した。多分、家もない難民の子供達が集り、

このような事をして暮らしているのであろう。或は浮浪児かも知れない。一体、難民の数は如何ほどに達するのだろうか。我が国の対策も大いに考えなければならない。

日本の子供達は欲しい物は手に入れられるが、あの子供達は希望というものを持っているだろうか。此の事を私の孫達にも知らせたいと、子供等の賭けトランプ遊びにカメラを構えたところ、自転車に乗った青年が「ノー」と言いながら制止した。

彼は警官ではなく、党員であろうか。それとも学校の教師か、一般の人だろうか。そのことは誰でもよい。自国の恥部を写されたくない事は当然であり、彼の行動を賞賛し、我が非を悟ったのであった。

日本の子供達は、「肥えていく豚は幸運ではない」という格言を忘れてはならず、ベトナムの党員諸君も、「苛政は虎よりも猛し」と自覚してほしいものだ。

我々を案内するサイゴン・ツーリストの通訳は、８年前に北から南に流れて来た、所謂、難民の一人だと自己紹介していたが、矢張り彼の顔にも難民らしい暗い影が漂っていた。一日も早くベトナムに、明るさを取り戻すことを祈りたい。

旭日は刻々と変化しながら上昇して行く。私のカメラは辰年の朝日に向かってシャッターを切っていた。其の写した写真は言葉を持たないが、しかし、目を奪うほど美しいものが、常に美しいものとは限らない。そして、善いものは何時でも美しいものだと教えていたのである。

休養日

概ね社会主義の国の旅行は計画通りには進まず、計画は計画に過ぎないようだ。今回のツアーも例外ではなく、１月１日は休養日に変更となり、アンコール・ワット詣では明日に延期となって、無意味な一日を送ることになった。

毎日５、６㎞を歩く習性となっている私は、体が自然に要求して再びホテルを出た。昨日訪れた貿易センターへと足を運んでみると、正月は休館らしく閉門されており、引き返してドンコイ通りの繁華街に向かったが、半数以上は店を閉めていた。

驚いたことは、金品をねだる所謂、執拗な乞食に出会ったことである。今日は特別だ。閉店と往来する人の極端に少ない正月は、彼等にとっては「貰い」が少ないからであろう。一方では癩患者のような者が道端に坐り、汚い姿で物乞いをしている光景は、６０年前の日本を再現した格好であった。

金は堆肥と同じく、散布しないと役に立たないと言われるが、これだけ大勢の攻撃では処置なしだ。三十六計の兵法に過ぎる上策はなかったのである。

夕食は１５㎞離れた水上レストランに於て、川魚専門の料理だという触込みであり、体調も回復して大いに期待して臨んだ。公園のような川岸にあるレストランは、香港のような船上ではないが、夜は汚穢は見えず、天空には満月が煌々として水面を照らし、川の流れは涼風を運んでいた。

悠長なサイゴン川を遡航する船の灯は、雄弁に我々を歓迎しているようで、ヤシの木の黒い影は一段と優美に聳え、全身に涼味を浴びての鮮魚料理は風情もよく、想い出にのこる快食であった。

９時にホテルに帰館して、逢うは別れの始まりの通り、サイゴンの最後の夜を迎えた。懐かしいサイゴン、生きて再び踏みしめたサイゴン、嘗ての戦友に再会したような思い出であった。それが結論である。

1月2日（土）晴　カンボジアへ

サイゴン〜シエムリアプ

今回の旅行の圧巻であるアンコール・ワットに血潮が踊り、昨夜の睡魔は、容易に私を眠りの淵に入れてくれなかった。

早朝の４時３０分のモーニング・コールに眼を覚まし、５時に朝食を済ませ、トランクなどの大きい荷物をホテルに残置した。住み馴れたホテルに離別を告げ、６時の出発となった。闇黒の早朝の外気は涼気満々として、壮快な気分である。

未だ閑散とした空港街道をスピードをあげて快進すると、元旦に見た難民や浮浪者がライトに照らし出され、今も尚、呻吟している数知れぬ人の姿が、サイゴン最後の光景となってしまった。何時まで革命の嵐が苛酷な運命を強いるのであろうか。

車中ではサイゴン・ツーリストから、贈り物として扇子が配られた。無地の粗悪なもので国力を窺い知る事ができ、ベトナムを説明するための、日本への格好な御土産品となった。

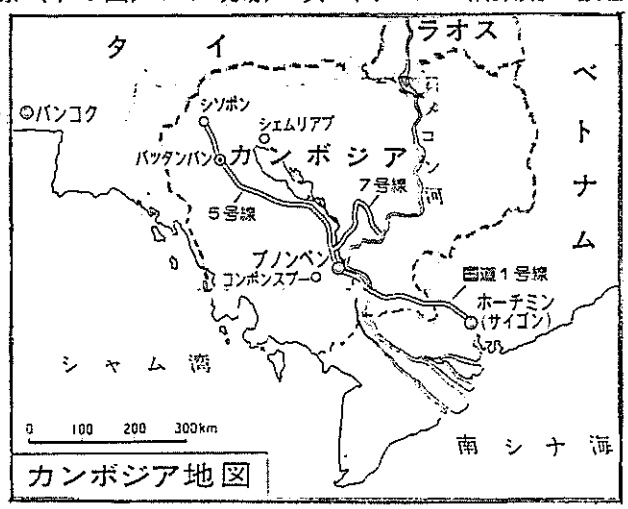
朝焼けの陽射しがヤシの木の間から飛行場に差し込み、永久に別れを告げるサイゴンへの哀愁は、次第に高揚してきた。殺伐とした空港には二機のチャーター機が待機して、一機はハノイ行である。

先に申告した持込みドルと、領収書との金額が一致しない場合には、処罰するという空恐ろしい通告だったが、添乗員の尽力で狂気的なチエックも見送られ、安堵の胸を撫で下ろして税関を通過し、７時１５分にカンボジアへと飛び立った。

搭乗したチャーター機は３０人乗りの小型機だが、戦火の燻る地への危機感はなく、運命は神のみぞ知るのである。飛行場の柵の外側には２０機ばかりの戦闘機が待機し、ニッパヤシの格納庫が整然として並び、戦時色一色の感じが漂っていた。

紺碧の空には朝靄が水平に延び、何ひとつ遮るものもない機窓から、平坦なデルターが瞰下され、心を洗うような鮮やかな景観だ。此の交趾支那の穀倉地帯に魅せられた、フランスの魂胆が理解できるようである。

真っ直ぐに延びている国道一号線（下の図）は、明瞭に映し出されて枯葉剤の被害もなく、黄色い滑らかな水の流れは穏やかに蛇行し、小舟も浮ぶ悠々閑々としたメコン流域の景観は、近々まで明日も知れぬ境遇だったとは想像もつかない。



カンボジア地図

飛行すること３０分を過ぎると湖沼が次第に数を増し、雨期の洪水を調節する地形は豊富な水量をたたえ、メコン本流とトンレサップ川の合流点に、プノンペンの街が見えて来た。

餓死と狂死の超暴力的な革命の断行は、プノンペン市民を農村に

下放させ、疲労と栄養失調は枯木が倒れるように息を引き取らせた。其の犠牲が三百万人とも云われる悲劇の首都は、幾多の悲痛と断腸の思いを忘れて美しく映えていた。

遥か西方の大平原の彼方に山影が微かに姿を現わし、その山裾に沿ったトンレサップ川に、小島が続いて点在し始めた。カンボジアの聖なる湖水のトンレサップ湖が、いよいよ近ずいて来たのである。

時計の針が８時を指す頃、茫洋とした大湖が眼下一面に拡がり、周囲をジャングルに囲まれた湖は碧海のように延々と続き、銀色に輝く花曇りような景観を、機窓を通して堪能していた。

トンレサップの湖上を飛行する搭乗機は、高度を下げて８時２０分、満腔の期待の夢を乗せてシエムリアプ空港に着陸した。数多の殺戮の凶器を飛ばした空港には、今尚、軍用輸送機の残骸をとどめ、何回忌かの正月を迎えていた。一行は携行荷物を機内に残置し、身軽な格好でカンボジアの土を踏んだのである。

先ずプノンペン・ツーリスト通訳の挨拶を受け、空港に近いグランド・ホテルに案内された。空港周辺にあった数件のホテルは、悉くポル・ポト軍の手によって破壊され、電気もないまま放置されて宿泊は不可能な状態だ。勿論、グランド・ホテルも食堂だけの営業である。このような冷徹無比の戦禍は、九牛の一毛に過ぎないのではないだろうか。悲しいことがカンボジアの第一印象となってしまった。

胸を膨ませてアンコール・ワットの見学に向かう前に、カンボジア並びにアンコール遺跡の概要を綴くことにする。

(上はシエムリアプ空港近くのグランド・ホテル)

カンボジアの歴史

カンボジアには国の歴史を書いた文献、古文書類は残されていない。通常の場合は、考古学的な資料としての古墳を探るのだが、元来が火葬の此の国では之も望めず、神話、伝説や碑文に頼るしかないようだ。

Ⅰ、クメール族（扶　南）

クメール族最初の王国は１世紀に建国された。国名は扶南（フーナン）という中国名でしか知られていないが、この名はクメール語の「プノム」（山の意）に由来するものと考えられる。

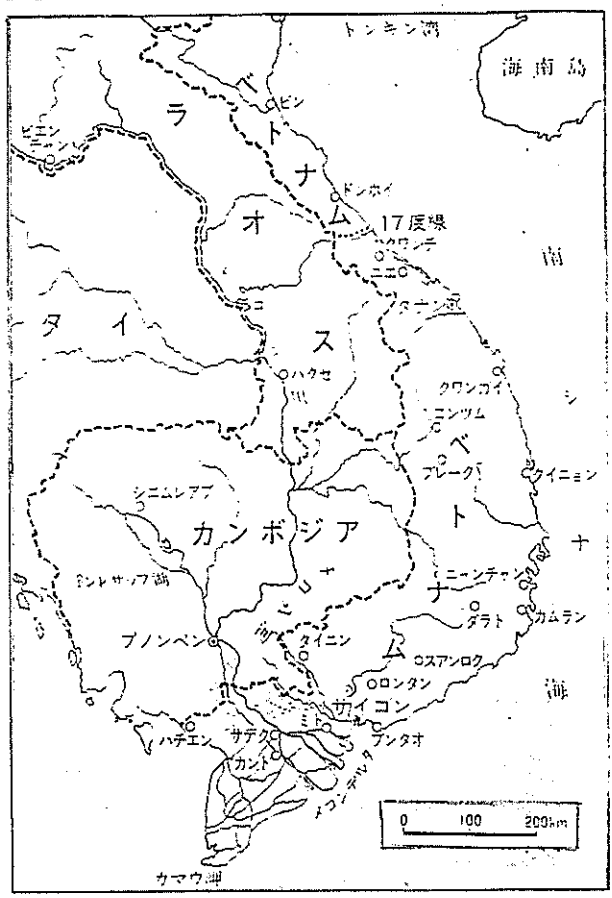
この建国は伝説によると、インドからの多数の移住民の一人であるバラモン僧が、土酋の娘と結婚したことに始まるとされている。インド人の移住民たちはマラッカ海峡を経るか、またはクラ地峡を横断し、或はジャワ及びスマトラを経由うしてインド文明を伝え、紀元１０００年頃までに、東南アジアに「インド化された」国々を形成した。

１世紀から６世紀まで存続した扶南には、その後のクメールの王国のさまざまな特質が、既に現われていた。

扶南はメコンデルタに敷かれた、発達した灌漑網を基盤として繁栄し、中国やインドとの通商も盛んであった。王国はインド的体制にならって組織され、首都ビヤダプラ（バ・プノム）の聖なる山にいる神王が、東は現在のベトナム南部から、西方のマレー半島、北方はコラート高原まで拡がっていた諸属国を治めた。

扶南は絶えずインドと接触していたため、芸術をよくし、学問を身に付け、行政や芸術的表現の能力も優れた、教養の高い官僚エリートが輩出した。しかしクメール農民の社会構造や、生活様式、信仰には基本的な変化はなかった。

その後、王室内部に争いが起こり、６世紀後半に扶南は没落した。これに代わってメコン中流域のプム・バサックに、真臘（チェンラ）王国が勢力を持つようになった。



カンボジア地図

Ⅱ、アンコール王国時代

この王国のジャヤバルマン２世（在位８０２～８５０）がアンコールに都を築き、以後歴代諸王は、此の地に多くの壮大な建造物を残した。此の地域に君臨したクメール王国の権勢は、現在の有名な遺跡アンコール・ワットを建てたスーリヤバルマン２世（在位１１１３～４５）の治世にその頂点に達した。

王の軍の足跡は、西はタイ、南はバンドン湾、北はトンキンの紅河デルタ外辺に至る広範な地域に及んだ。クメールの国力は、発達した灌漑網による水稲耕作と、神王が統轄する、きめの細かい官僚制度による国民支配に基ずいていた。そしてこの強大な国は、東方のベトナムの大越（ダイベト）帝国とチャンパ（ベトナム南部）、西方のチャオプラヤ川（メナム）流域のモン族の諸国を脅かした。

スーリヤバルマン２世後の歴代の王は統治の能力を欠き、国情が安定せず、近隣の国々からの攻撃に対して、防御もできない状態となった。さらに仏教の浸透により、国教であるヒンズー教の階層制度が崩壊し始め、国難は倍加した。

その後ジャヤバルマン７世（在位１１８１～１２２０頃）が出て、王国の領土は過去の何の王よりも大規模に拡張した。しかし、１３世紀にかけて王国は急速に衰退した。

先ずタイ族が西部にあったクメール王国領の諸王の権力を奪い、次いでチャム族がタイ占領軍を駆逐した。その後１３６９、８８、１４３１年のタイによるアンコール攻略によって、クメール王国の没落が早まった。

王家が弱体化していたところへタイ軍の圧力が強まり、首都防衛は不可能となったうえ、繁栄の基盤であった灌漑網も破壊された為、１４３１年にアンコールは放棄され、３４年に首都は遂にプノンペン地方に移された。

１６世紀までに、領土の西部と北部はタイに奪われ、東部はメコンデルタへのベトナム人移住者たちに圧迫され、カンボジアは極度に衰微し、領土はかっての王国のひとかけら程になつてしまつた。（クメールの国家は、外国からはカンボジアと呼ばれていた。民族名がクメール）

数百年もの間、カンボジア王は、タイのアユタヤ王朝から、カンボジアに対する宗主権を認めるよう強いられた。他方、ベトナム人の圧迫も強まり、１８世紀末には、強大な二つの隣国（タイとベトナム）が、カンボジアを属領にしようとして争った。

こういう状況の中で、カンボジアは両国に貢納し、それらの緩衝国といつた形で、不安定ながらも独立を維持した。１８４０年に民族蜂起があり、ベトナムへの併合は阻止されたものの、やがて再び二国の共同統治を受けた。

Ⅲ、フランスの支配

１６世紀末にポルトガルとスペインに制圧されそうになつた時期を除くと、１９世紀中頃まで、カンボジアにはヨーロッパの影響は及ばなかった。

フランスは、１８６２年にベトナム南部（コーチシナ）を支配するようになると、カンボジアに対し宗主権を持つと主張するタイを無視し、その宗主権を行使しようとした。そして翌６３年、カンボジアのノロドム１世（在位１８５９～１９０４）に、フランス保護領となることを強制した。

タイは、１７９４年以来領有していたカンボジア西部のバッタムバン、シエムレアプ

（この西部二州は現在はカンボジア領）両州を、そのまま保有することが認められたから、１８６７年にフランスがカンボジアを保護領とすることを承認した。

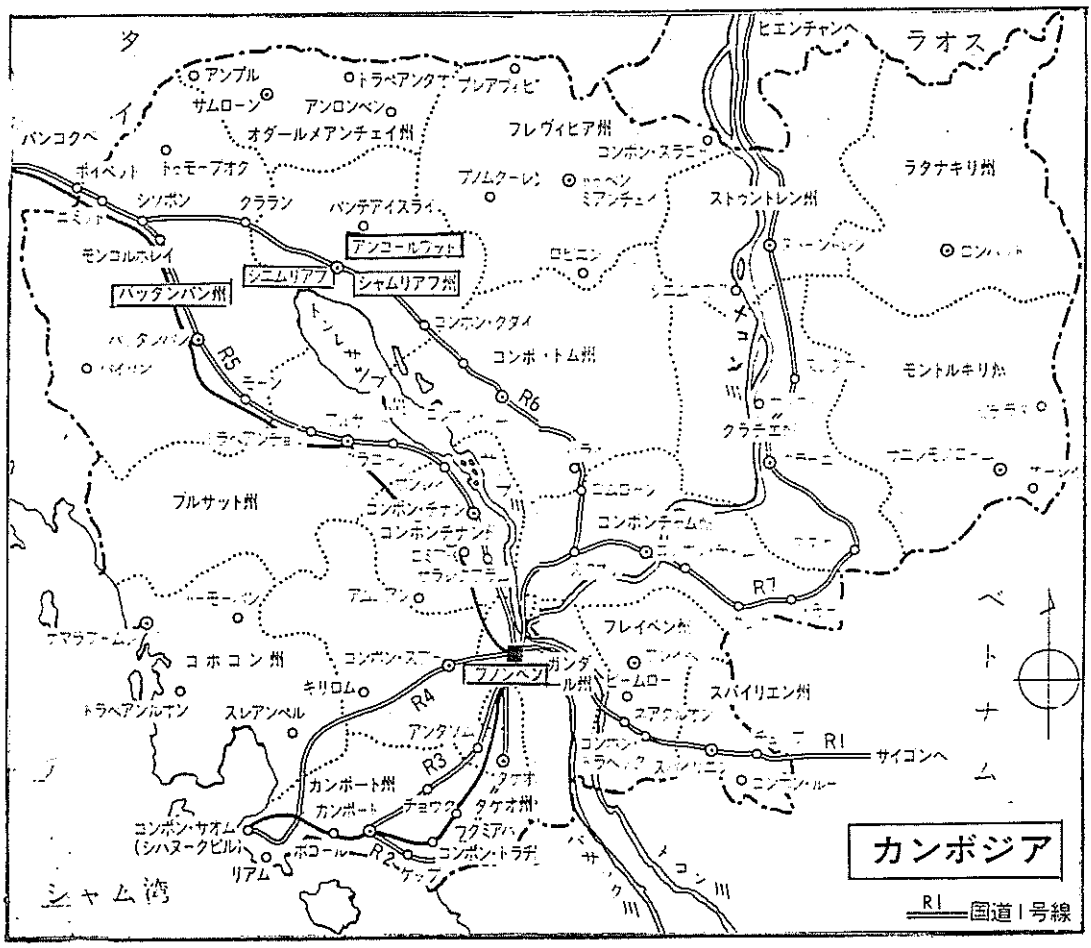
フランスは王位継承問題にも介入して、これを政治的に利用し、徐々にカンボジアの内政までも支配するようになつた。この間、１８６６年と８５年には、王権侵害に抗議したカンボジア国民が叛乱を起し、これを鎮圧しなければならなかった。

カンボジアは６６年、現在のプノンペンに首都を移し、８７年には、フランスのインドシナ総督の統治下におかれるようになつた。１９０４年にノロドム王が没すると、フランスは王子をさしおいて、王弟のシソワットを即位させた。その後、１９２７年に、その子モニボンが王位を継いだ。

タイが領有していた西部地域をめぐって、フランスとカンボジアが其の領有権を主張したが、１９０７年に、タイがバッタムバン及びシエムリアブを譲って問題は解決した。

この地方は、１９４１年に日本からタイに与えられたが、第二次世界大戦終結後の４６年に、再びカンボジアに返還された。

（下の地図を参照）



Ⅳ　独立運動

１９４５年、フランスにとつて、今後ともカンボジアを保護領としておくべきか、果たして其れが可能であるかと云う問題が生じて来た。フランスや日本の支配下にあつても、カンボジアの君主制は維持され、貴族も王と実権を分かちあっていたのである。

やがて憲法制定が認められ、１９４７年５月６日、立憲君主制となつた。其の背後には、此の国のナショナリズムを共産主義に向かわせるよりも、古い歴史を持つ王制と、ノロドム・シアヌーク個人に集中させようという狙いがあった。（シアヌークは、１９４１年、祖父モニボン王の死により即位した）

前述の１８６６年と８５年の蜂起でも、明らかになったカンボジアの民族主義は、しばらくの間カンボジアの一大勢力をなしていた。カンボジア貴族層は、フランスに対し曖昧な態度をとり、タイ、フランス、日本の間の利害の衝突を巧みに利用した。

第二次世界大戦直後、クメール・イサラク（自由クメール）党が結成された。当初この党は、共産主義者とは何の連携もなかつた。民主主義や王権主義を掲げて立上り、王の面目をつぶしたり、革命に走ったりする事なく、フランスに圧力を加え抵抗した。

カンボジアは、民族主義者の圧力を後ろ盾として、ベトナム情勢への対処に苦慮していたフランスに対し、有利な立場を確保することができた。

１９４９年、ベトナムが、フランス連合内の一国としての独立を承認されると、カンボジアも直ちに行動を起し、同年１１月８日、同様の地位を獲得した。

其の直後の５０年には、ベトナムが伝統的にカンボジアに加えてきた圧力は、新しい形を取り始めた。

ベトナムのベトミン（ベトナム独立同盟会）の強力な支援で、カンボジア国内に幾つかの共産主義の小グループが生まれた。これらのグループはまた、クメール・イサラク分子や、ラオス国内の同様なグループと提携して、フランス放逐と同時に、国内革命を狙う統一戦線を組織した。

カンボジア国内のベトナム人が蜂起したことから、当時、フランス軍とベトミンとの間に行われていたゲリラ戦が、カンボジアに波及した。この事態は国際的な反響を呼んで、１９５４年にはジュネーブ会議が開かれ、其の結果ベトミンとフランスは、双方ともカンボジア撤退に同意した。

５４年９月８日に締結された東南アジア集団防衛条約によつて、カンボジアは其の保護対象地域に指定された。

Ⅴ、中立政策

１９５５年３月、ノロドム・シアヌークは退位して、父ノロドム・スラマリットに王位を譲り、在位中、内外の情勢の複雑な変動を通じて身に付けた外交、内政の手腕をもつて、サンクム（人民社会主義共同体）を率い総選挙に臨んだ。其の結果、他党の候補者は総て落選し、サンクムの候補者のみが当選して、彼は５５年９月、首相に就任した。

以後、１５年間にわたって、彼はカンボジアの内政と外交を一手に掌握し、それを推進した。その政策の支柱は、内政面では啓蒙的な君主を中心に、国民的統一を図るという王制社会主義であり、外交面では中立政策の採用であった。

中立政策の特色は、いかなる国とも同盟を結ばないこと、永世中立ではなく、情勢に応じて弾力的な立場をとること、東西陣営の何れにも属さないことは勿論、中立国グループ、所謂、第三勢力への加入も拒否した事などであった。

ノロドム・スラマリット王は１９６０年４月３日に没したが、シアヌークは復位せず、国家主席の地位に就いた。同年第一次五か年計画に着手し、アメリカ、ソ連、中国、フランス、日本から援助を受けた。

６１年以後、隣国のタイ及び南ベトナムとの関係は、国境紛争によって悪化した。カンボジアは中立の保障と領土保全を期待して、５４年のジュネーブ会議参加国による会議の再会を提唱したが、不成功に終わった。

６３年シアヌークは、アメリカのＣＩＡが、カンボジア国内の暴動を煽動していると非難し、同年末からアメリカの経済、軍事、文化面での援助を一切拒否した。

６４年から６７年にかけて、対フランス、対中国関係は改善されたが、ベトナム戦争によって国境附近に被害を被った事から、アメリカや南ベトナムに対し、深刻な反感が増大した。

６５年５月アメリカと国交を断絶し、同年１１月にアメリカは、ベトナム戦争をカンボジアに拡大する必要が起るかも知れないと警告した。

Ⅵ、対中・対米関係

その後、１９６７年頃までのカンボジア外交は、西側のフランス、東側の中国を軸にした中立政策を展開していたが、対外活動は必ずしも活発ではなく、孤立的な中立の時代であった。

この間、カンボジアはベトナム戦争の激化から、戦火が自国に波及するのを避けるため、５７年の法律に基づく中立から一歩進めて、自国の中立に対する国際的保障を獲得しようと努力し、「現国境線に基づく領土保全の承認」を諸外国から取付けることに成功した。

当時のカンボジアは、自国国境の承認を重視する外交の基本原則を立て、現在の国境を承認するならば、如何なる国とも国交を結ぶという立場をとっていた。それと同時に、国家相互間の内政不干渉、平和共存の原則も強く主張していた。

然し乍ら１９６７年、対中国関係に於て後者の原則に触れる事件が起った。カンボジアと中国の関係は、対アメリカ関係が悪化するにつれて緊密化し、特に６４年、６５年は最高潮に達した。

６６年から中国に於ては文化大革命が進行し、カンボジアも其の影響を受け、６７年には、親中国的立場のサンクム左派の指導下とみられる「赤いクメール」などの、親共産分子の反政府活動が活発となり、華僑や労働者の一部が紅衛兵活動を行った。

カンボジア政府は、これらの動きは両国間の平和５原則に違反し、中国のカンボジアに対する内政干渉だとみなした。このため、親密だったカンボジアの対中国関係は冷却化し、カンボジアは次第に断行中のアメリカへの態度を柔軟化する事になつた。

カンボジアは、１９６３年末のアメリカ援助拒否以来、西側のフランス、日本など、東側のソ連、中国などの援助を期待し、国際的経済機構にも参加せず、「自力更生」を基本として、経済面でも孤立主義を取ってきた。

国内的には貿易、銀行、保険などの国営化を実施した。しかし６３年頃は、農産物

の豊作に恵まれ、比較的順調であったカンボジア経済も、やがて各方面に資金不足という事態が生じ、その後の天候不順による凶作が続いた事も重なり、次第に悪化し始めた。

農産物が多量に食糧不足のベトナムに闇輸出されたことや、当初、アメリカ援助に代わると期待された外国の援助や投資が、現実には殆ど行われなかった事が、財政悪化に拍車をかけた。

カンボジア政府や議会には、こうした財政危機を解決するために、国営化政策を改め、西側陣営諸国、特にアメリカに援助を期待する意外には無いという、右寄りな路線が台頭した。

こうした路線に立ったのが、ロン・ノル将軍らの軍部及びシソワット・シリク・マタク殿下や、サンクム右派系を始めとする政治家たちであった。このような情勢の中で１９６９年６月、当時のニクソン政権は、カンボジアの主張する「現国境線に基づく領土保全の承認」に漸く踏み切り、対米関係は回復をみた。

この頃、ベトナム戦争も北爆停止、パリ和平会談の開始など収束期を迎え、カンボジアの外交は、従来の孤立的中立から積極的中立に転換することになつた。同年８月の第二次ロン・ノル内閣成立後は、通貨の切り下げが行われ、貿易、銀行の一部が民営となった。

Ⅶ、シアヌーク主席解任

１９７０年３月１８日、ロン・ノル首相ら親米右派勢力によるシアヌーク国家主席の解任、追放というクーデターが発生した。

此の政変の直後、カンボジアの東端部をベトナム戦争の聖域として利用し、ここに自由に侵入、駐留してきたベトナム開放勢力（北ベトナム軍、南ベトナム民族開放戦線軍）に対し、政策の対立が生じた。

カンボジア人によるベトナム開放軍反対デモ（３月８日）や、北ベトナム大使館焼打ち事件（同１１日）が起ると、ロン・ノル将軍ら右派は、カンボジア一般国民が強く抱いているベトナム人への反感や恐怖感を背景に、聖域からのベトナム勢力の追い出しを主張した。そして、之に対するたシアヌーク国家主席の態度が弱腰だとして、当時、外遊中だった同主席を解任した。

このクーデター発生の根底には、その他にも幾つかの社会的、経済的要因があった。即ち、従来のシアヌーク主席の国内における独善的な政治や、縁故を重んずる宮廷政治に対する青年、インテリ層の不信である。また、前述のようなシアヌーク主席の経済的国営化政策に対し、自由化政策を主張する右派勢力からの攻撃でもあった。

Ⅷ、ロン・ノル政権

この政変以後、ロン・ノル政権はアメリカの支援を柱とし、国交回復した南ベトナムのグエン・バン・チュー政権や、タイのタノム政権との間に反共枢軸を成立させた。

一方、これと対抗するシアヌークは、中国の支持を背景として、北京を舞台にカンボジア民族統一戦線を結成し、王国民族連合政府を樹立した。さらに北ベトナムを始め、南ベトナム民族開放戦線やラオス愛国戦線（パテト・ラオ）など、インドシナ各国の開放勢力との連携のもとに、ロン・ノル政権との間に武力闘争が展開された。

こうして、十数年にわたって平和と安定を享受してきたカンボジアも戦場と化し、完全にベトナム戦争に巻き込まれてしまつた。

ロン・ノル政権は政変後、前国民会議議長のチェン・ヘン氏を新国家主席とし、新政権の内外政策は従来通りであると声明した。更に１９７０年１０月９日、共和国宣言によつて、カンボジアは同日以降、国名を「クメール共和国」と改め、王制から共和制に移行した。

Ⅸ、クメール・ルージュ（赤いクメール）

１９４５年１０月、カンボジアに復帰を果たしたフランスに対し、各種の反仏抵抗組織がゲリラ戦を展開したが、その口火を切ったのは、クメール・イサラク（自由カンボジア）であった。次いでベトミンの指導を受けたクメール抵抗派も活発な闘争を開始した。

６０年代に入るとカンボジア共産党、サンクム派（シアヌークが組織）左派を中心とする左翼運動が起ったが、これらの革命的運動組織が、「クメール・ルージュ」（赤いクメール）と総称されるようになつた。

クメール・ルージュの中心はポル・ポトを指導者とするアンカ（革命組織の意）で、１９７５年４月、ロン・ノル親米右派政権を倒し、民主カンボジア政府を樹立した。

Ⅹ、民主カンボジア

１９７６年１月、カンボジア王国民族連合政府を改称し、ポル・ポト首相、キュー・サンファン国家幹部会議長を中心として発足し、通称ポル・ポト政権と呼ばれる。

民主カンボジアは「貧富の差、搾取、被搾取の存在しない、幸福・平等・正義及び真の民主主義が支配する社会」をスローガンとし、急速な国家再建運動を展開した。

政策実行の過程で、都市住民を強制的に農村に移住させ、反体制分子や知識階層に対して徹底的な弾圧を加え、二百～三百万人も虐殺、餓死させたと云われている。

国際世論の批判を浴びた民主カンボジアは、７８年、カンボジア救国民族統一戦線（ヘン・サムリン派）の猛攻を受け、プノンペンからタイ国境に脱出した。其の結果、ヘン・サムリン政権と民主カンボジアの二つの政権が併立する事になつた。

民主カンボジアは８２年、シアヌーク、ソン・サンらが反ベトナム民主カンボジア連合政府をつくり、ヘン・サムリン政権と対立しているが、敗色が濃いようだ。

Ⅺ、カンボジア人民共和国

カンボジア救国民族統一戦線を政権の母体とする親ソ親ベトナム国家で、ヘン・サムリン政権とも呼ばれている。７９年１月７日、プノンペンを攻略したベトナム軍の支援を受け、翌８日に人民革命評議会を設置、９日カンボジア人民共和国を樹立、直ちにソ連、ベトナムの承認を得た。

国家評議会（ヘン・サムリン議長）を共和国の代表機関とし、閣僚評議会（フン・セン議長＝首相兼外相）を行政府としている。国連に於ては代表権は承認されていないが、カンボジアに於ける実効的支配を確立し、ソ連圏国家を中心とする３１ケ国および２民族開放戦線が承認し、１２ケ国がプノンペンに大使を派遣している。

シアヌーク

ノロドム・シアヌークはカンボジアの王族で、長くカンボジア王国の国家元首として中立主義を堅持し、１９７０年３月に親米・右派勢力（ロン・ノル将軍派）によるクーデターで元首の地位を追われた。その後、北京に於いてカンボジア民族統一戦線を基盤にカンボジア王国民族連合政府を樹立し、祖国の開放を呼び掛けた。

１９２２年１０月３１日に生まれた氏は、サイゴンに遊学中の４１年４月、１９歳で王位に就いた。カンボジア王国では王の男系子孫が王位を継ぐ事になっていたが、ノロドム家と、シソワット家の間に王位継承をめぐる対立があり、ノロドム王の曾孫であり、またシソワット王の孫にあたる、両家の血を引くシアヌークが王位につく事になつたのである。

１９４１年５月９日、タイ・仏印平和条約の名のもとに、日本の手によつ西部地区をタイに割譲させられた。４５年３月９日、日本軍によるクーデターの後、３月１９日にカンボジアの独立宣言が発せられた。

日本軍の降伏後、シアヌークはフランスとの折衝を続け、４９年１１月８日、「フランス連合内の独立」を認められたが、国内の左右両派からの批判が強かった。５３年１月には、国会を解散して王の独裁を固めた。

その後、シアヌークは欧米を回った際、独立要求の爆弾談話を発表し、１９５３年７月には中立主義を声明、１１月９日に「完全独立」を達成、翌５４年７月のジュネーブ協定で之が保障された。５５年３月３日、彼は王位を父に譲って自ら政治の第一線に乗り出し、既成政党に代わる人民社会主義共同体（サンクム）を結成、同年９月の選挙で圧倒的な勝利を収めた。

彼の唱えた「中立と社会主義」は、「仏教的倫理の社会主義的表現」とも言うべきもので、中立主義は小国の生き残る為の必要性からきたものであつた。

１９６０年４月、父王の死後、シアヌークは王位に就かず、再び中立主義を国民投票に問い、憲法を一部改正して新たに国家元首の地位に就き、全権力を掌握した。

その後、サンクム内の左右両派の対立が激化し、シアヌークは両派の均衡の上に独裁的地位を確保していたが、ベトナム、ラオスに戦争が拡大し、米国を背景にしたロン・ノルら親米・右派勢力がクーデターを起し、外遊中の彼は元首の地位を追放され、サンクムも解散させられた。

パリからモスクワ経由で北京に到着した彼は、「同胞に告げる書」を発表、１９７０年５月３日、カンボジア民族統一戦線と王国連合政府を樹立した。此の政府には、かってサンクム内の左派としてシアヌークに弾圧された、キュー・サム・ファン国防相らも、カンボジアの現地で参加した。

その後、彼はインドシナにおける抗米統一戦線内の重要な役割を担う事になり、７３年１月、ベトナム平和協定成立後、ハノイを訪問してベトナム人民の勝利を称えると同時に、「王国連合政府がカンボジア唯一の正当政府」との共同声明を発表した。

それ以来の経過は前頁に記述した通りで、ベトナムの侵攻に反対する三派連合（ポル・ポト派、シアヌーク派のクメール・ムリナカ、ソン・サン元首相派のクメール・セリカ）は、ヘン・サムリン政権及びベトナム軍との間に内戦が続いている。

アンコール遺跡の概要

カンボジアのシエムリアプ州（４１頁地図参照）にある古代クメール王国の首都の遺跡である。アンコールは、およそ９００年から１４３１年まで、古代クメール王国の首都として栄え、９００年から１２２０年にかけて、ここに美術史上アンコール様式と呼ばれる、数多くの石造建築物が造られた。

一般にクメールの建築は、殆どが寺院や神殿である。アンコール時代には、次ぎのような各種の寺院がそれぞれ建立された。即ち、王国のシンボルであるリンガ（男根）を祀ったシバ神の寺院、アンコール・ワット（大きな寺院の意）に代表されるようなビシュヌ神の神殿、仏陀と王と一体化して祀ったジャヤバルマン７世時代の寺院などである。

これらの寺院は、インドの宗教から遊離し、非常に貴族的な性格を持つようになつたが、それは「神格化された王の祖先に対する崇拝」と、「神と一体になった王に対する崇拝」（デバラージャ）という、二つの祭儀を目的としたからであつた。

「神格化された王の祖先に対する崇拝」は、古くから東南アジアや東アジアに見られる一般的な祖先崇拝と同じである。寺院に祀られるビシュヌやシバなどのヒンズー教の神々、仏陀、観音菩薩、般若波羅密菩薩などの諸仏は、その姿と名前を借りた特定の王や王の親族と一体化したものである。したがって其れらの神像や仏像の名は、神仏の名と実在した者の名を結び付けたものだあつた。

デバラージャの祭儀はジャヤバルマン２世（在位８０２～８５０）が初めて定めた。８２５年頃、アンコールの東北にあるプノム・クーレン（次頁地図参照）の山頂で行われた儀式によって、クメールの王は宇宙の君主とみなされ、その王権は、シバ神の象徴としてのリンガ（男根）によって示された。

デバラージャという神政的崇拝に基ずいて、世界の中心であり、シバ神の居所である宇宙の山（須弥山＝シュミセン）に模した寺院が、都の中心に建てられた。この寺院の形式は、塔を中心にしたピラミッド型をなし、壮大な山岳風に構成されている。

アンコール王朝の創始者ジャヤバルマン２世時代の遺跡は、その大部分はプノム・クーレンにある（次頁地図参照）。同王朝三代目の王であるインドラバルマン（在位８７７～８８９）は、アンコール南東のロルオス（次頁地図）の地に、ハリハララヤの都を造り、寺院を建立したが、アンコール建築様式の基礎は、此処でつくられた。

最初に、インドラタターカと名付けられた人口の灌漑用貯水池を築き、次いで、８７９年、王の祖先を祀るため、６基の煉瓦造りの塔のあるプレア・コー（次頁地図）の寺院を、最後に８８１年には、デバラージャの儀式に捧げるピラミッド型寺院バコン（次頁地図）を建立した。

アンコールの地に初めて都を建設したのは、インドラバルマンの子バショバルマン（栄光に守られた王、８８９～９００）であり、その都城は、ヤショダラプラ（栄光の都）と呼ばれた。

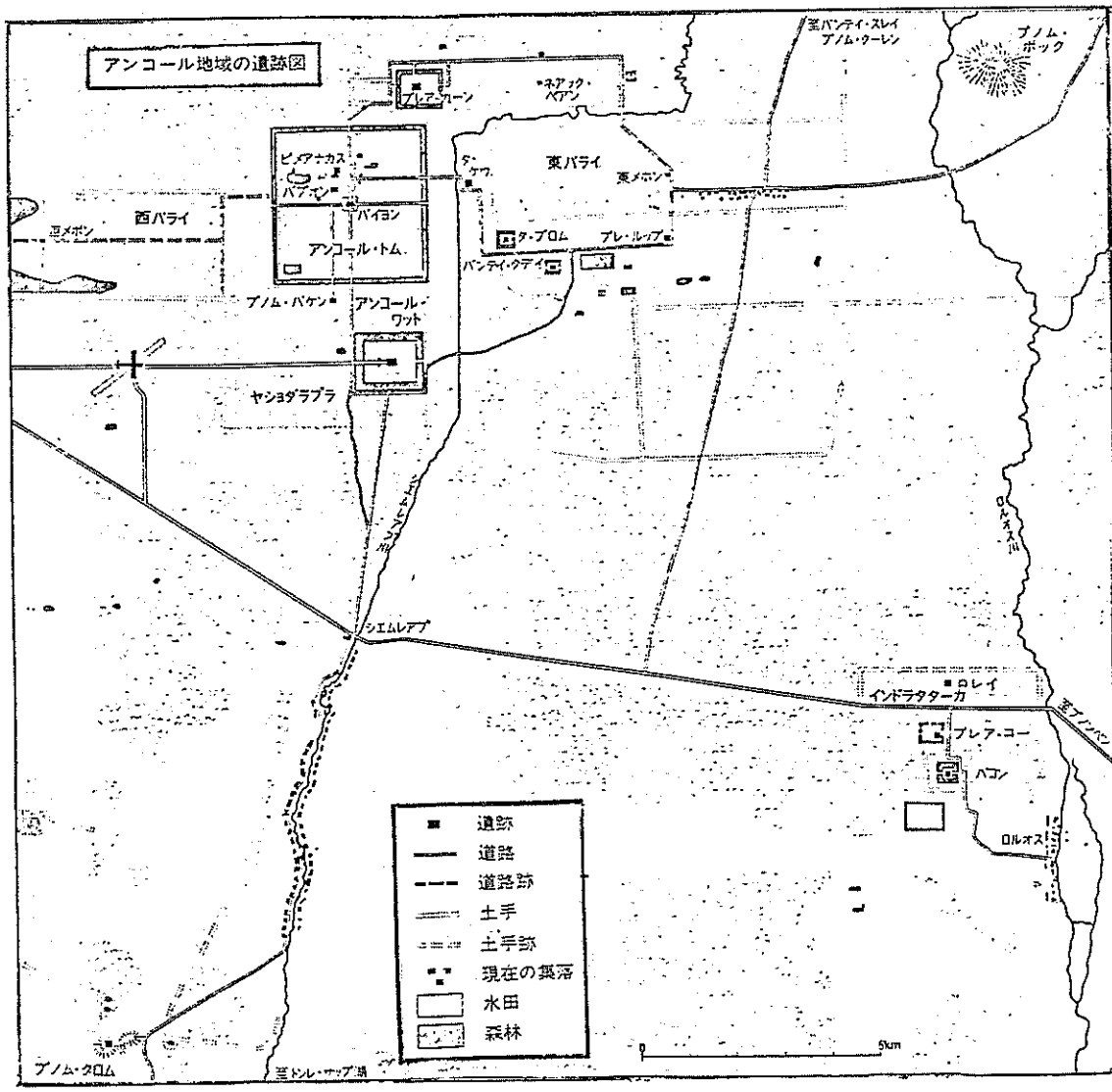
アンコールの都は、このヤショダラプラを第一次として、四次にわたつて地域的に重なり合って建設されたもので、現在残っている都城は第四次アンコール、即ち、アンコール・トム（大きな都）である。

ヤショバルマン王は、まず王国内に数多くの僧院を建て、８９３年には、父インドラバルマンの築いた貯水池の中央の島に、父の業績を称えるためロレイ（上の地図）の寺院を建て、その後、先王の地ハリハララヤを離れて、アンコールの地を新しい都として選んだが、それは紀元９００年以前のことであった。

ヤショダラプラ（上の地図）を巡らす方形の城壁は、一辺約４km、南と西には幅の広い掘りがある。都城の北東には、長さ７km、幅２kmの東バライ（上の地図）と呼ばれる巨大な貯水池が築かれた。

都の中心にあるプノム・バケン（上の地図）の丘の上には、５層のピラミッドが築かれ、最上段には五つの神殿が五点形（さいころの五の目のように、正方形の四隅と中央に一点ずつ配列した形）に配され、中央の神殿にはリンガ（男根）が祀られた。

各層には、全部で６０の塔が並び、更にピラミッドをめぐって４４の煉瓦の塔が建ち、全体で一つの小宇宙を構成するものであった。



その後、都はジャヤバルマン４世によつて、アンコールの北東１００㎞のコー・ケルに移され、ヤショダラプラは一時放棄されたが、約２０年の後、ラジェンドラバルマン王（在位９４４～９６８）が、再びアンコールに首都を建設し、二つのピラミッド型寺院を建立した。

９５２年、貯水池の中心に、煉瓦の塔のある東メボン（前頁地図）を設置し、９６１年にはラテライト（紅土）と煉瓦で出来た寺院プレ・ルップ（前頁地図）を建てた。

第二次アンコール王都は、スーリヤバルマン１世（在位１００２～５０）によつて建設された。その中心に建立されたピメアナカス（前頁地図）の寺院は、ラテライトを３層に積み上げて築いたもので、最上層に、初めて回廊が設けられた。また未完成のままに終わった巨大なピラミッド型寺院タ・ケウ（前頁地図）は、１０００年頃に築かれた。

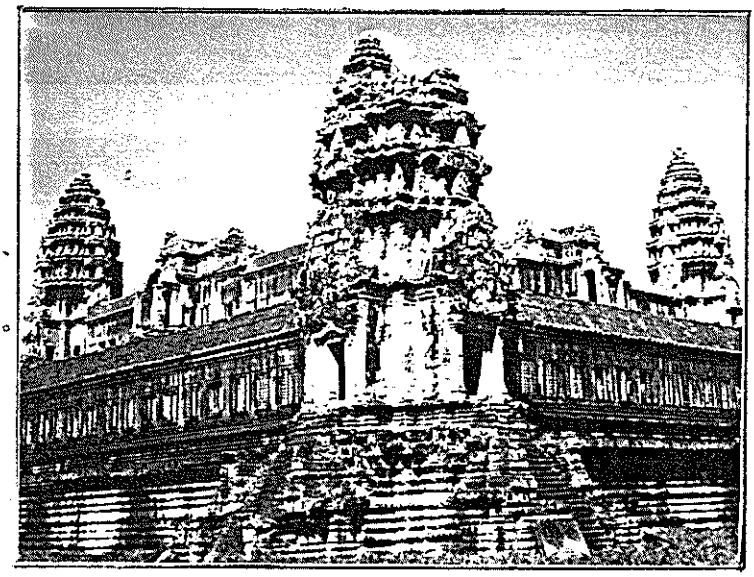
バプオン（前頁地図）の寺院を建造したウダヤディチャバルマン２世（在位１０５０～６６）の事業は、ヤショバルマンのそれに匹敵する。この建造物は、第三次アンコール王都の中心寺院として建立された。堂々たる３層のピラミッドである。回廊には小さなパネルにインド神話の浮彫が施されている。王は更に西側に、大きな貯水池の西バライ（前頁地図）を造り、その中心に築いた島に神殿を建てたが、その遺跡は殆ど存在しない。

アンコール・ワット

クメール古典建築の完成した形は、アンコール・ワットにみられる。スーリヤバルマン２世（在位１１１３～４５）によつて建立されたビシュヌ神を祀る此の寺院は、東西１５００ｍ、南北１３００ｍ、幅１９０ｍの掘によつて囲まれ、アンコールの諸遺跡のうちでは最も広大で、しかも良く保存されている。

掘を渡り、外側を越えると、ナーガ（様式化された多頭の蛇、蛇神）の欄干で縁どられた参道が、神殿に通じている。

寺院の中央部は外側から順に、第一、第二、第三の回廊によつて三重に囲まれている。一番高い中央神殿の尖塔は、その周囲の第三回廊の四隅に立つ尖塔に囲まれて聳え、これらが一体となつて巨大な五点形のピラミッドをなしている。



（右は第二回廊と第三回廊の四隅に立つ尖塔）

これらの尖塔は、特徴のある砲弾形をしていて、宇宙の山の五つの頂上を表わすものとされている。

寺院は、繊細な溢れるばかりの彫刻で飾られている。数多くのアプサラ（天女）のレリーフ（浮彫）が微笑し、第一回廊の壁面にはインドの民族

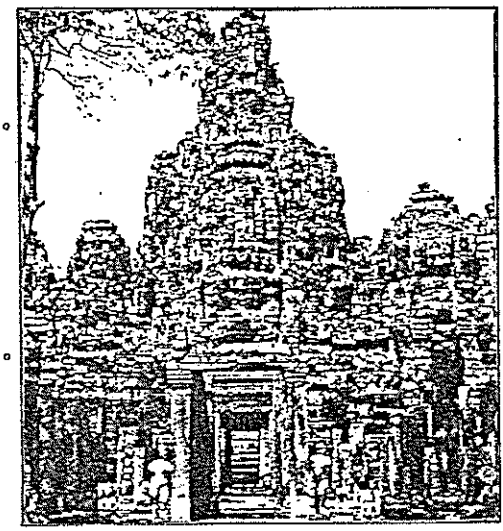
的二大叙事詩である「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」、「バラモンの天地創造神話」、「スーリヤバルマン二世の功績を称える歴史物語」の大きな浮彫が連続している。

ジャヤバルマン七世（在位１１８１～１２２０頃）の治世には大乗仏教が国教となり、その時代に造られた建造物の数も多かったが、同時に既存のものの改造も行われたのである。

アンコール・トム

アンコール・トム（大都の意）は一辺が３kmの方形で、高さ８ｍのラテライトの城壁と、幅１００ｍの掘で囲まれた、ジャヤバルマン七世の王都で、第四次のアンコールの都城である。（４８頁の地図参照）

中心には、複雑な構造をもつバイヨン（４８頁地図）の寺院が建立された。この寺院は、聳え立つ岩山のような巨大な外観をもち、５０の塔の四面には、微笑をたたえた観世音の２００の顔が彫られ、仏陀と一体となつた王の威力を四方に示している。



回廊の壁に施された浮彫には、当時の人々の日常生活や、歴史的事件が描き出してある。アンコール・トムの城壁には、バイヨンに達する南門、西門、北門、死者の門、王宮に通ずる勝利の門が設けられている。

１３世紀の半ば頃からタイ族が南下し始めると、アンコールはタイの攻撃に曝される事になり、１５世紀の前半には遂に放棄された。その後、１６世紀後半には、一時的に、アンコール近辺に都を戻した事があったが、１４世紀以来、木造のパゴダの他は何も建てられなかつた。（右はバイヨンの四面塔）

アンコールの文化

アンコールの文化は、インドから伝来した、ヒンズー的、仏教的文化の強い影響のもとに発展したが、単なるインド文化の亜流ではない。むしろ外来文化が、在来の土壌の中で自ら変化し、自生化したという性格をもっている。

その基本には、湿潤なモンスーン地帯に長い間、水稲農耕を営んできた東南アジア民族固有の文化が、横たわっていることを見落とすことは出来ない。

神なる王、つまりデパラージャという観念に基ずいて、聖山の頂きで行われる王とシバ神との霊的な交わりによつて、王は初めて「山の王」となり、王座に就く。

このため、古代クメール人の都は、小高い山や、人工の聖山であるピラミッド型寺院を中心に設計され、聖山は国土建設の中核となつた。

そのことは、須弥山（シュミセン、宇宙の山）を頂くインドの古代的な宇宙観によつて説明されるが、同時に、聖山の中腹より流れ出る水が、山麓の水田平野を潤して豊饒をもたらす為に、大地の神の活力を山の頂きに認めたからであつた。

シバ神信仰と王権とを象徴するリンガは、その上になお、国土とリンガが建てられた土地の象徴でもあった。また其の背景には、豊作をもたらす大地の力を崇拝する、

地母神信仰があつた。

一方、ピラミッド型寺院を取り巻く掘や王都に付随して、必ず建造された大きな人工の貯水池は、古代インド的宇宙観による海を表わすものであった。それと同時に、掘は周囲の水田平野をうるおす用水源であり、貯水池からは、自然の勾配を利用した灌漑のための水利網が、各地に張り巡らされ、さらに洪水を防ぎ、水上交通を発達させた。

アンコールの王たちにとつて最も重要な課題は、王都の周囲に拡がる広大な水田の灌漑事業を、如何に円滑に進めるかにあつた。神と人との間を仲立ちする地上の神として、全国の土地の所有者であつた国王は、稲作の豊饒をもたらす地母神の司祭者という性格と、灌漑水利を管理する為の中央集権的な支配者という役割とを、担っていたのである。

アンコール遺跡の研究

当時のカンボジアを、中国人は前記した通り「真臘」と呼んでいた。元朝の使節の随員であつた「周達観」は、１２９６年から翌９７年にかけてアンコールに滞在し、その見聞を詳細に記述した。この書物が「真臘風土記」である。アンコールの都の盛んな此の時期の記録として、史料価値がきわめて高い。

アンコール放棄後も、アンコール・ワットは仏教の聖地として知られ、此処を訪れる日本人も少なくなかった。徳川三代将軍家光は、長崎の通辞、島野兼了を遣わし、アンコール・ワットの絵図を作成させたが、現在その模写は、水戸の彰考館に祇園精舎の図として残っている。

アンコール・ワットの柱や壁には、墨で書かれた当時の日本人の筆跡が残っている。それらは合計１４例を数えるが、多くは短文である。そのうち二ケ所に見られる肥前の住人、森本右近大夫一房の筆跡によるものは、纏まった文章をなしている。

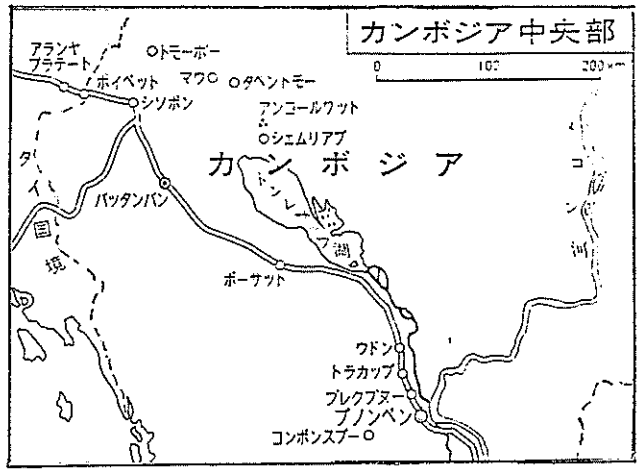
アンコール遺跡の研究は、１９世紀後半から始まった。アンコール・ワット以外の建造物は、鬱蒼とした樹林の中に忘れ去られていた。再び其の記憶を呼び覚ましたのは、１８６０年、タイを経て訪れたフランス人の博物学者アンリ・ムオーの業績であつた。

その後、１９０７年、フランスの介入により、タイ国がカンボジアの西部諸省を返還してから、フランス極東学院により、本格的な考古学的研究が開始された。カンボジアの独立後もフランスは、カンボジアとの文化協定に基き、調査、研究、保存、修復作業を継続した。

１９７０年春、アンコール遺跡群を含む地域は、ベトナム戦争のカンボジアへの拡大に伴って戦場となり、特にポル・ポト派による破壊は言語に絶した。このため、プノンペン国立博物館はユネスコの協力を得て、遺跡や其の他の遺物を戦火から守り、安全に保管する運動を行って来た。

我々がアンコール・ワットの見学に訪れた時も、インドの復旧修理隊が作業していた。しかし、膨大な面積と甚大な破壊のために、遅々として進まない状態であり、アンコール・ワット以外のアンコール遺跡群には、修理の手が伸びていないのではないだろうか。

アンコール街道



シエムリアプ空港近くのグランド・ホテルから、アンコール・ワットへと進行して行くるバスの中で、プノンペン・ツーリストの英語通訳は、此処からアンコール・ワットまでは７㎞、プノンペンまでは３００㎞だと説明した。

現在、プノンペン街道は橋梁が破壊されたままで、自動車の通行はできず、飛行便では所要時間は４０分ということであつた。全国至る所に戦火の影が残され、満身創夷の国である。「過去は忘れるのだ」と歴史の抹殺を目標に掲げ、１９７７年６月から始まったポル・ポト派の大虐殺行為は、文明に対する憎悪だと言わなければならない。

砂漠の土壌に似た一面に大樹が繁茂し、樹陰の中を簡易舗装の道路が一直線に、アンコール・ワットに通じている。水溜りの水を馬欠でかい出して、魚を捕っている原始的な光景や、人海戦術によって灌漑用水を造る作業風景が、眼に写って来た。英語通訳は、この附近一帯ではワニが捕れ、一匹２０ドルもすると説明したが、彼等にしては大変な金額である。昼食に美味いワニの肉を期待して北へと進んだ。

道路の両側に続いている湖沼には、我々の目を保養さすように紫蓮の花が浮び、殺風景な大樹の街道に優雅な風情を与えていた。これを「解語の花」と云うのであろうか。ものを云わない花が、ものを云うようであった。

唐の都の長安で玄宗皇帝は、駘蕩の春の一日、太液湖を訪れ、「池を蔽う蓮の丸葉のさわやかな緑や、朝露をうけた蓮の花は、まるで夢幻のように美しかった。このとき皇帝は傍らの楊貴妃を指さしながら、池の蓮の美しさも、この言葉を解する花、即ち解語の花（楊貴妃を指す）には及ぶまい」と、云ったという故事を思い出した。

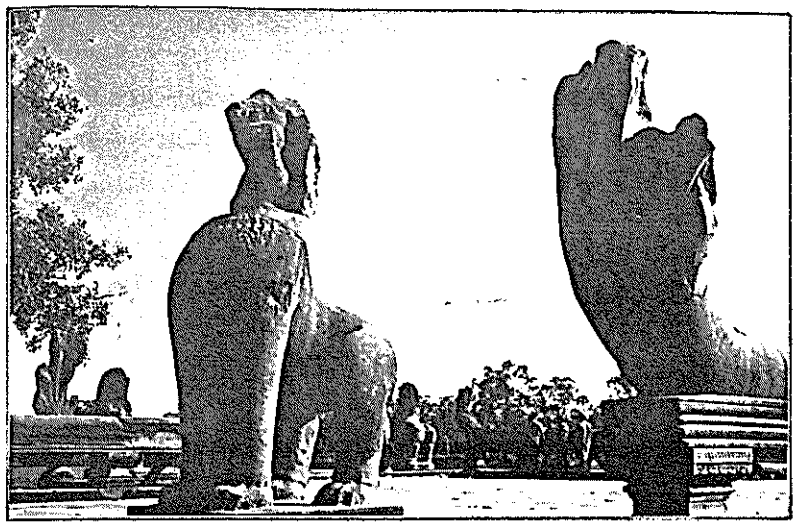
７０ケ所もの遺跡が存在するという、鬱蒼としたアンコール街道を進んで行くと、右手に破壊された大学があり、日本人の医師が居たという病院も、残酷な彼等の魔手にかかって哀れな姿を残し、樹林に群れをなして棲息する猿は、笑顔でバナナを受け取るなどと、通訳は盛んに説明を続けた。

車に揺られながら１０分を過ぎると空間が拡がり、獣類の石像に囲まれた森の中に、赤い屋根の寺院が微かに見えていた。再び森から開放されると視界は展望され、華麗な蓮の花を一面に浮かべた湖沼が、帯状に延びていた。

荒れ放題に淀んだ沼の向うに忽然として、ヒンズー寺院の灰色の塔が小さく網膜に映った。澄んだ天空に絵で見ていたように尖塔が聳え、アンコール・ワットの南門の威容だと、直ぐ私の脳神経は閃いた。

静寂の中に感動の鼓動は高まり、車は沼を四分の一周して西門へと走った。朝の眩ゆい陽を背にした祇園精舎は、巨然として唇気楼のように湖上に拡がり、将に、静境の中の飛龍在天という威風である。

西門に通じている石造りの参道の前でバスは停止し、憧憬の的であった神秘な世界の前に、欣然として立った。この参道の入口附近は広場となつており、内乱の前まではホテルがあつたと云われているが、今は完全に破壊されて跡方もなく、二軒ばかりの民家があるだけであつた。

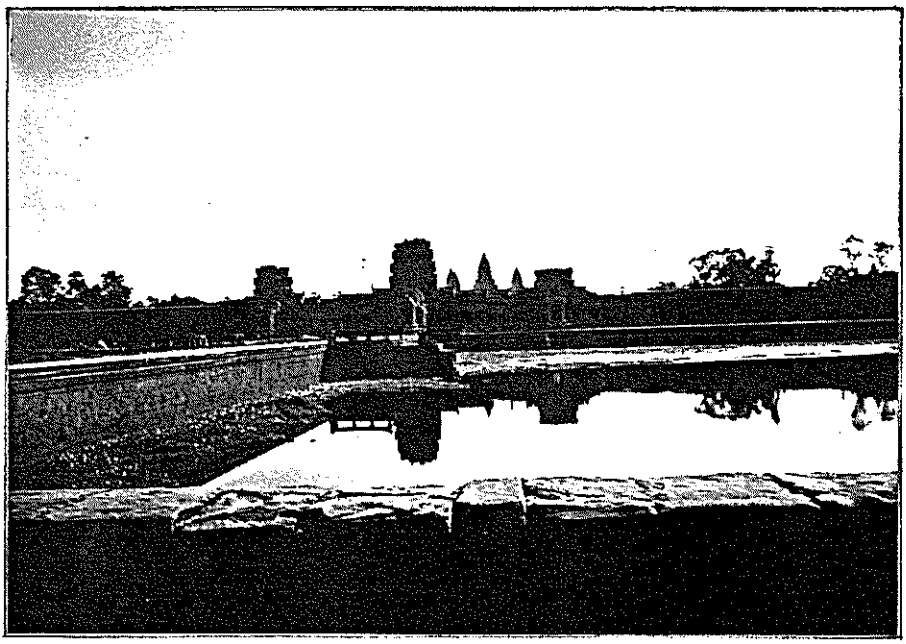


スーリヤバルマン２世～７世たちの生命不滅の象徴として、此の地上に遺した大伽藍は、広々とした掘り沼の水面に倒立して影を映していた。（下の写真）

参道の入口には守護神であろうか（上の写真の左側）、巨大な石の獣像が睥睨するように建ち、石の欄干の至る所にナーガ（蛇神で男性を表わす。上の写真の右側で、いづれも破壊されている）が、威力を誇示するように建っていた。

西門まで４００ｍも延びている参道は、巨大な敷き石で積み上げられて、水面より３ｍほども高く、ナーガと相い俟って雄大な壮観を呈していた。

（下の写真は、西の参道から眺望したアンコール・ワットの全景。左側は石の参道。右は掘り沼である）



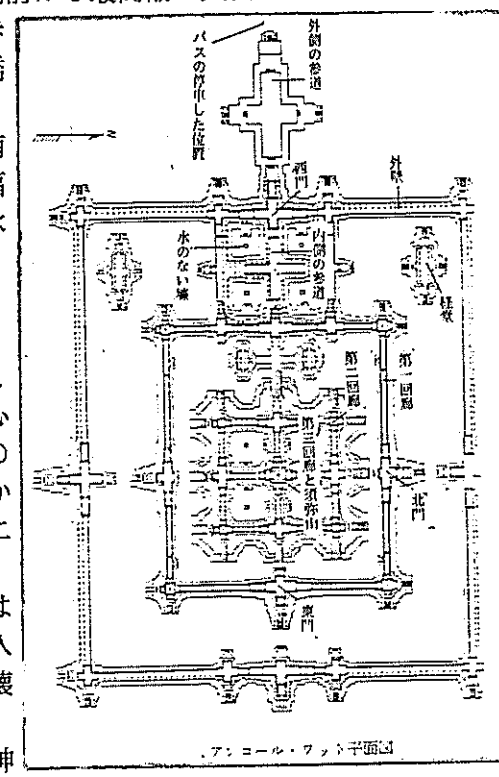
アンコール・ワット参観

巨大な（アンコール）な寺院（ワット）のアンコール・ワットは、別名をノコール・ワット（僧院となつた都の意味）と称し、大殿宇に通じる参道の向うは、点のように小さく見えていた。

参道の石板を踏みつけて緩りと足を運び、いよいよ４時間の見学の開始となった。今次旅行の最高の願望であつたアンコール・ワット詣での胸宇は、如何なる辞章を以てしても、表現は出来ないほどであり、参観前から最高潮の興奮である。

先ず、寺院を囲む外壁の門をくぐると、歩いて来た湖上の参道を延長したように、陸橋となつた参道が連っていた。（右図参照）

アンコール・ワットは東西１５００ｍ、南北１３００ｍの外壁で囲まれ、その内側は幅１９０ｍの壕となつているが、埋められて水はない。



アンコール・ワット平面図

第一回廊

ナーガに守られた内側の陸橋を渡って行くと、正面には西門の塔門があり、そこを中心にして東西２５０ｍ、南北１８０ｍの第一の回廊がある。総計して一周８５０ｍというから、ジァワーのボロブドール遺跡の、実に二倍の回廊が蜿蜒と伸びている。

現在、西門の塔門は修理中のため、我々は先ず北西の翼塔の門をくぐり、第一回廊に入ったところ、翼塔の石組の上部は完全に破壊されていた。

神聖な寺院を破壊したポル・ポト一派に神仏の加護はない。東洋民族の粋を誇る偉大な遺跡を、何と心得ているかと心憎い。本当に「芸術には無知という敵をもっている」という格言は、残念ながら生きていた。

「西回廊北側」

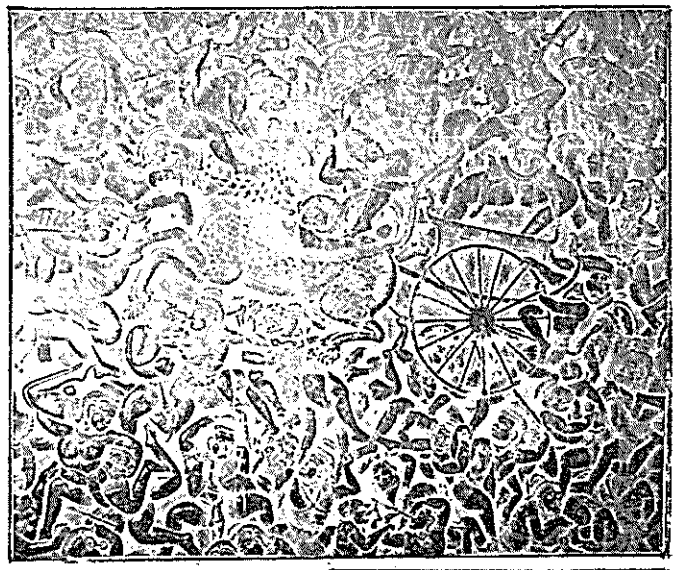
陰欝で静かな回廊が整然としている中を進むと、壁面の浮彫は長巻の絵巻物を見ているようだ。嘗ては色彩が施され、金泥が塗られていた画像は、数百年の間に人の指先で擦りとられていた。此処を詣でる群衆は、これに触れることが義務とされていたという話がある。

ここのレリーフは、インドの「ラーマーヤナ」における、魔王ラーヴァナの大合戦絵巻が、全長５１ｍにわたり描かれている。人間が波になり、渦を巻くようにして斜めになり、横になり、逆さになつて戦っている修羅場の光景だ。

猿王ハヌマンの肩に乗って指揮するラーマ王子、馬の体に獅子頭を持った怪獣の戦車に乗った魔王ラーヴァナーには、１０頭と２０本の腕がある。（次頁写真）

圧巻は右の写真ように、両軍が入り乱れた死闘の場面で、人と人、戦車と人、馬と人とが重り合い、其の熱気が感じてくるようである。

これだけの想像に絶する高度な技術は、他の仏教遺跡では見られない芸術であり、驚嘆の至りであつた。



此処には又、ラーマーヤナ物語の絵巻レリーフの外に、等身大の女神や天女（右中の写真）の像が彫刻され、アンコールを見学した人には、深く印象に残る一つである。

回廊にはレリーフばかりでなく、仏像や女神の石像が各所に置かれてあり、何れも手当たり次第に破壊され、首や腕のない痛ましい姿で立っていた。

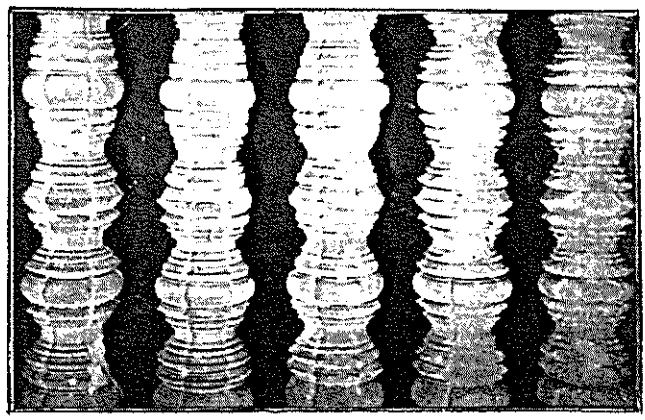
其の石像の中で、半球状の椀を伏せたような形の乳房は、参観に訪れた世の男性に撫でられたためか、つるつると黒く光り輝いていた。ヒンズー教の性は神聖な行為であり許されるのであろう。

第一回廊の総ての窓には、７本の石柱がはめ込まれて、薄暗い回廊に明かりを採り入れている。また窓と窓との間には女神の像が彫刻され、人をして微妙幽玄の世界に陥らすようであった。（右下の写真は窓の石柱）

「西回廊南側」

エジプトやインドを始めボロブドールの遺跡を見学し、或は中国各所の石窟遺跡を訪れたが、アンコール遺跡ほど回廊の発達した遺跡はないようだ。

通訳の熱心なラーマーヤナ彫刻の説明に、耳を傾けているうちに、破壊された西門に着いた。



塔門からはアンコール・ワットの中央に聳える須弥山が、見上げるように眼に映り、ピラミット型の五塔は、泰然とした気宇壮大なものであった。

五塔は即ち、世界の中心に聳え立つという須弥山の理念を具体化したもので、文化、信仰の中心である。

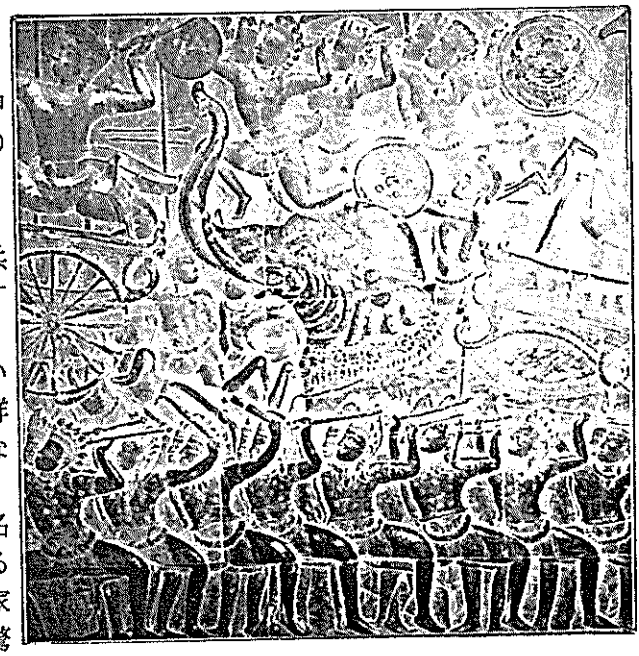
暫し厳粛荘厳な眺めに見惚れて、西回廊の南側に進んで行った。

此処には「マハーバーラタ」中の「パーンダヴァ」の大激戦絵巻のレリーフとなつている。

日本の絵巻が壁面の彫刻として、巧みに刻まれているようだ。裸の兵士が槍をかつぎ、旗鼓堂々と進軍する光景は見事である。

人力車のような大きな車輪のついた戦車や、高く跳躍する象や馬の群れは、激突する戦闘の場面を遺憾なく表現していた。

広大な面積の彫刻には、多くの名人芸の人手を要したことと想像すると、アンコール王朝が高度の芸術家を集めた、其の財力の偉大さにも驚嘆させられるのであった。（右の写真はパーンダヴァの大激戦の浮彫刻）



「南回廊西側」

ここはアンコール・ワットの建設を始めた、スールヤヴァルマン二世の功績を称賛した絵巻図の彫刻である。

玉座へ坐った王も従者も、すべてが裸のままで、その裸に飾るものは王冠、首輪、腕輪、腕輪、足輪のほか、腰に宝石をちりばめた帯などである。

頭上には、金の柄でつくられた傘がさされ、玉座の右側には胸に手を当てて忠誠を誓つている姿も見られる。（右の写真）

下には天蓋のついた輿に乗った王妃達がおり、その前方を整然と軍隊が行進している。円形の楯をもち、右手に槍を握った、近衛兵の姿も描かれていた。

「南回廊東側」

南門の塔門を過ぎて東側の回廊に進むと、此処には珍しい地獄極楽の絵巻図が彫刻されていた。ヴェーダ神話に登場するヤマ（閻魔）の世界だ。

次頁の写真のように、壁面の上部には幸福な生活の様子が彫刻され、下段には地獄の責めを受ける人間の姿が描かれ、閻魔は１８本の手に剣を持ち牛に跨っている。

地獄では舌をぬかれた象に叩きのめされ、火あぶりにされて苛責を受けている様相

のレリーフが数多くあった

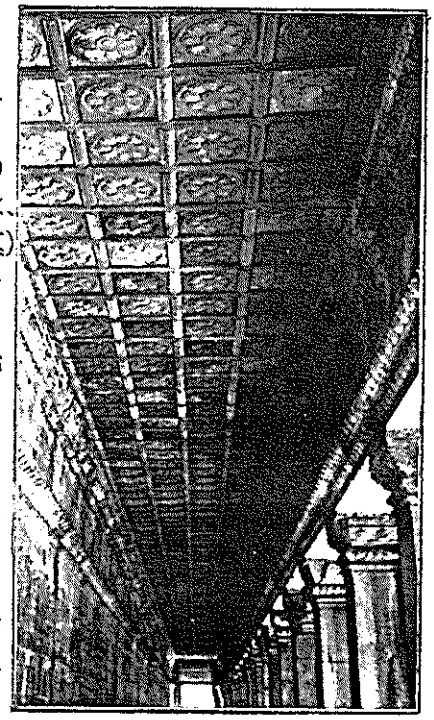
極楽の彫刻は地獄のような迫力のあるものはなく、仏陀を担いで歓喜している光景が多いようだ。

この回廊では、アンコール時代の浄土思想の一端を覗くことができるようで、彼岸の表現も、其の現われであろう。珍しく貴重な遺産と云わなければならない。

蜿蜒と巡らされている回廊の中で、この回廊の天井だけは風化などの破損もなく、ほぼ完全な原形で保存されている。右下の写真は唐草模様の石の天井である。

「東回廊南側」

ここには乳海攪拌の図が描かれている。ヴィシュヌ神を中心にして、神々と阿修羅が整然とならび、約５０ｍの壁面いっぱいに、ナーガを綱引きの綱のように、引っ張り合っている。この左右対象の図は、アンコール彫刻群の中で圧巻であろう。（次頁写真）（闘争を司るインドの鬼神を阿修羅と云い、これを略して修羅と云う）



この乳海攪拌の神話は、アンコールの誕生と栄光を象徴しているという。バラモンの城とも言われる膨大な彫刻の大半は、インド神話から取り入れたもであった。

【ヒンズー教（インド教ともいう）は祭司階級であるバラモン（婆羅門）によつて、基礎が作られた。のち大衆の信仰や呪術を取り入れて、多様な教養と儀礼を生み出した。二大主神のビシュヌ神やシバ神を中心とする多神教を形成し、業・輪廻の苦の世界からの救済を説いた。一方では、厳しい階級制度による差別の体系であるカースト社会と、浄・不浄の観念による人間世界の等級化を認めている。紀元前六世紀に発生した仏教やジャイナ教も、ヒンズー教の根本的性格を変えることはできなかった。】

ここの壁面のナーガを抱えた造形の原点は、乳海攪拌の神話である。乳海攪拌の象徴するものは、男女の媾合であり、大蛇はリンガム（男性器）を意味し、乳海（大洋や大湖、或は池など）はヨニ（女性器）を意味すると言われている。

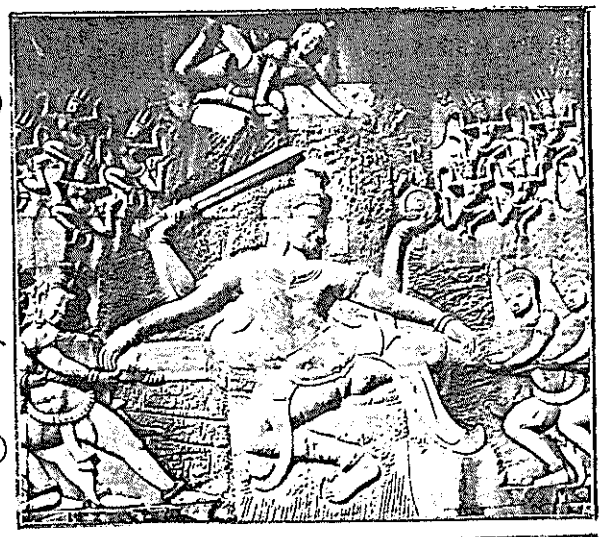
両者の媾合は多くのものを誕生させ、誕生は生命の永劫回帰を意味し、永劫輪廻が不老不死につながるという、ヒンズーの哲学が潜んでいると云う。

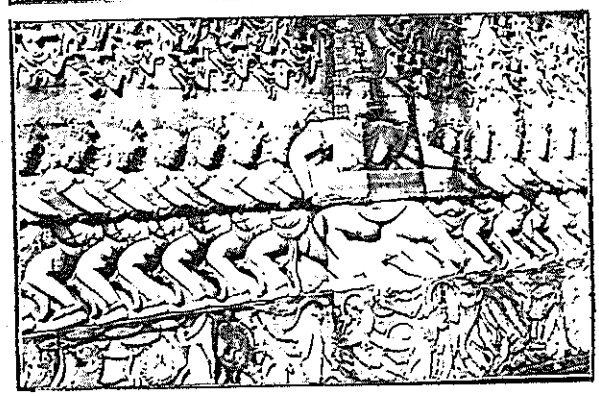
生命は聖なる交渉によつて得られる事を意味し、蛇神の都のアンコールには、乳海

を攪拌して生命を得るためのナーガが充ちている。（乳海は寺院の各池を表わし、トンレサップ湖を意味している）

そして攪拌によつて誕生した群は、寺院や城砦の中で永遠に守護するという解釈である。

「汝ら、わが命ずる如くせよ。大乳海に薬草を投じ、マンダラ山を攪拌の棒とし、大蛇を綱として大洋を攪拌し、生命の露を得る」と云うように、乳海の神話はおそらくアンコールの誕生を象徴するのである。（右は綱引きの図）





「休　憩」

第一回廊の主要部分を半周して東門に到着した。４時間という長時間の見学のため、通訳は我々を東門から東南角の広場に誘導し、休憩することになった。

この位置からは第二回廊の翼塔や、蕾型リンガムの中央塔、所謂、ピラミット型の壮大な須弥山（メルー）が良く見えていた。

クメール王朝の王たちは、神々と王とが一体とならなければ、統一と繁栄の道を開くことが出来ないと悟り、寺院の中心に宇宙の中心、世界の縮図である須弥山を造った。その小さな宇宙と天国との間の生きた絆が、王だとしたのである。

仏教神話の神とバラモンの神の中で、最高神の地位に居なければならなかつた王は、シバ神やビシュヌ神であり、王妃は魔神と戦う女神であるという、王即神の思想であつた。

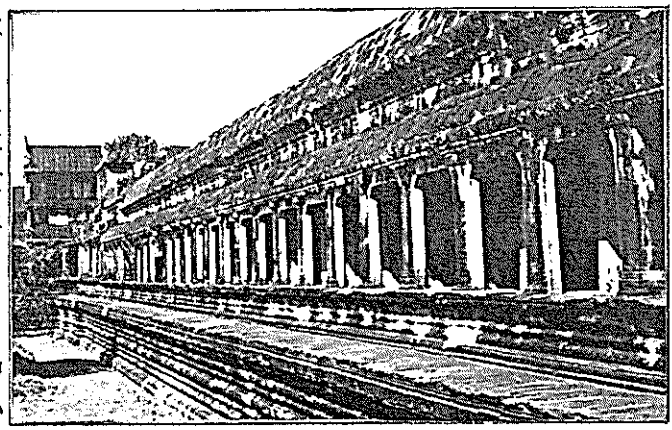
須弥山（シュミセン）とは梵語で、大海の中にある高さ８万４千由旬の山と書かれている。日が此の山に入れば夜となり、此の山から出れば昼となるという。（１由旬は約４０里といわれており、妙高山という名称もある）

高さは、水を出ること８万４千由旬だが、水に入る深さも８万由旬、横の長さも等しく、北側は黄金、南は瑠璃、西は玻璃からなり、日月は中腹をめぐり、金銀宝石が反映して虚空を彩なす。囲繞する山は七金山で、須弥山と七金山のあいだに七海があり、七金山の外側に鹹海（カンカイ）をへだてて鉄囲山がめぐり、鹹海の中に四大州があると書かれている。実に気宇壮大である。

アンコール・ワットは、世界の中心に聳え立つ須弥山の理念を具象化し、神王思想を結合させて建造したもので、須弥山には中腹に仏教でいう四天王の居所があり、最上部に最高神の世界があることになっている。

１３世紀の末、元の成宗皇帝のクメール王国への派遣使節の随員の一人であった、

周達観の記録によると、王には正妃のほかに４人の妃がいた。正妃は御座所に隣りあつた房に住んでいたが、別の４人の妃は東西南北の房に住み、後宮の女や踊り子は約４０００人も居たと想像されている。



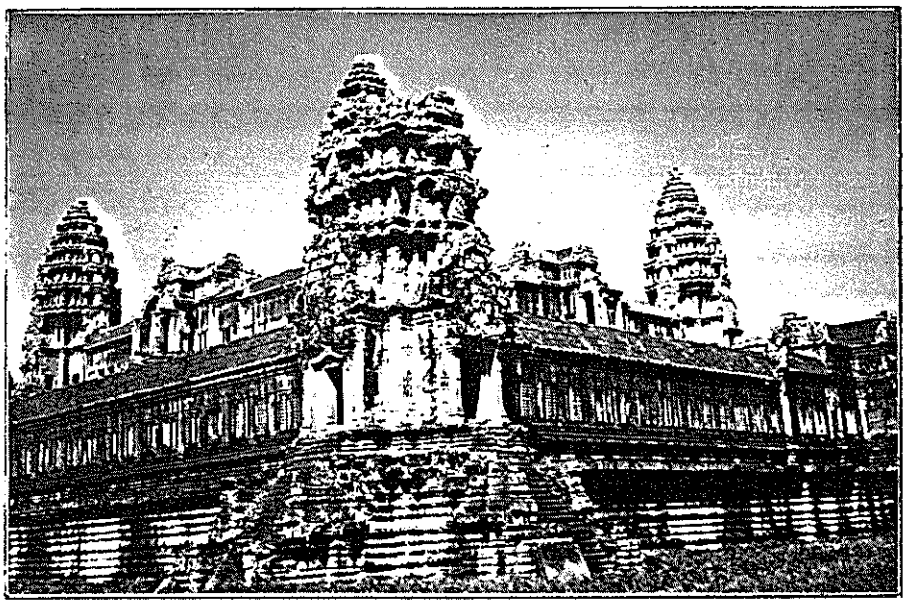
これらから判断して、アンコールの帝王たちの肉林が想像され、愛妾や後宮の女たちの愛憎が渦巻く姿が、彷彿として浮かぶようだ。（右上は第一回廊の南面外側）

前記したように第一回廊の窓と窓との間の女神の像や、或は回廊に立ち並ぶ天女の像を刻むことは、王に刺激された彫工たちの創作意欲を駆り立てたのであろう。

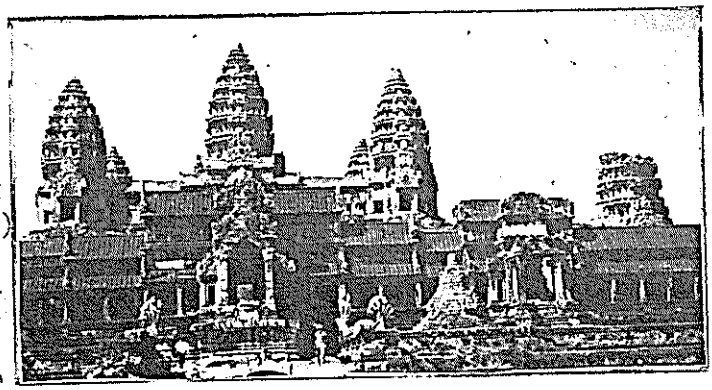
妖艶な乳房、細い腰、しなやかな四肢、ふくらんだ下腹部、厚い唇などの誇張は、性の聖化と崇拝を物語るようで、クメール女の踊る姿態は、エロチック的でもあるようだ。即ち、舞踏は宇宙のリズムに合致するための生命の躍動であり、エロチックの象徴でもあったのである。

通訳は休憩した東南角で商売を始めた。世界一貧しい国に生きる者にとつては、機会を逃すことは生活を捨てることだ。アンコール・ワットの白黒写真は８枚で３ドル、アンコール時代の古銭は３個で１ドルだと云い、希望者を募った。

カンボジアの労働者の平均賃金は、１ケ月４ドルといわれており、自然に私も彼に対して同情心が湧いて買ったが、瞬時にして売り切れてしまった。カンボジアの人も日本は、世界一の経済大国であることを知っていたのである。『下は東南角から眺めた破損した翼塔のある第二回廊と、左右に蕾型塔のある第三回廊（須弥山の一部）』



休憩が終つて東門の塔門を出た。太陽光線の関係から、東門の外からの写真撮影が最高であり、通訳は此処に誘導して、ツアーの記念撮影を撮った。（右は東門から須弥山）



右の写真の通り、注意深く観察すると、容易に手のとどく破壊の可能な所は、すべてポル・ポト派の魔の手にかかり、長い間の放置からくる崩壊とは、明瞭に区別ができるのであつた。

ワットの清掃に従事する人達は、中国式の慢々的な動作で雑草をむしり、草を燃やしながら、我々に羨望の眼を向けていたのは印象的である。

第二回廊

腕自慢の写真撮影が終わり、再び塔門をくぐって中庭を歩き、第二回廊に登る西側に進んだ。天を見上げるように聳え立つ第二回廊は、４５°もあるような急斜面を登攀しなければならず、空を仰いで、誰しも一瞬たじろんだ事だろう。

高所恐怖症の私でさえも、ここで尻込みしては恥を千載に遺すと意を決したが、戦場に於て突撃するような思いであった。階段に張つてある手摺りの鉄棒を命綱のように握り、見向きもせずに一気呵成に登った。

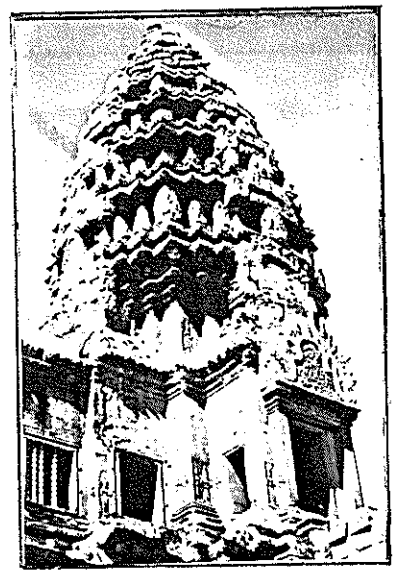
第二回廊は第一回廊よりも８ｍも高く、東西１１５ｍ、南北１００ｍの長さをもっている。今までは、一般庶民の入ることは許されず、見学は第一回廊だけだつたというから、我々は誠に幸運と言わねばならない。危険防止設備の不備と、王の棲む最高の聖殿とされてたたからであろう。

第二回廊は窓格子の柱のみが建ち、柱の内側は壁となつている採光の悪い、薄暗い陰気な回廊である。前頁の下の写真のように、第二回廊の窓が飾り窓にすぎないのは、ここより奥を一般庶民の目から遮断する為であろう。

第二回廊と第三回廊との間にある内庭は、石造りの泉水のある池だったという。しかし現在は排水されて自由に歩ける状態だ。嘗は此の池に強烈な陽光が照り映えて、光と影が交錯する素晴らしい景観を呈していた事だと想像する。

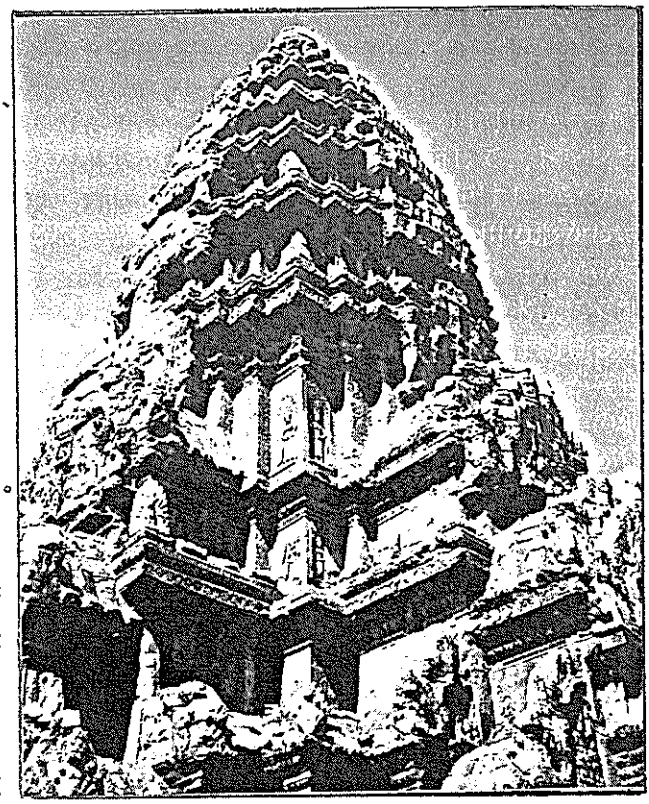
この空中庭園のような池は、寺院に参拝する身分の高い人達が、須弥山に登るために斎戒沐浴をしたのであろうか。

急いで第二回廊を一巡したところ、第一回廊のような眼を引き付けるものはなく、飾り窓の印象しか残っていない。



（右は第二回廊から見た第三回廊の須弥山の翼塔）

第三回廊と中央祠堂



神々の棲まわれるところは高く、第三回廊への階段は、幅の狭い石で造られた急角度の斜面である。

高さ１３ｍの階段は不思議なことに、第二回廊へ登るような恐怖心は生じて来ない。

階段を登り詰めて下界を眺望すると、目眩がするような高所感が全身に溢れ出て、待望久しかつたアンコール・ワットを訪れて、念願を叶えた実感が込み上げて来た。何かを征したような爽快な気分である。（右は須弥山の中心塔）

世界の中心に聳える須弥山を踏みしめ、最高神の世界である中央祠堂に辿り着いた喜びと、反面、私のような冒涜者が登って良いのか、という心境さえ懐かせた。

須弥山の中央祠堂は、第三回廊の幾何学的の中心に在り、高さ３４ｍ、地表から塔頂までの高さは６０ｍである。第三回廊に立って間近に塔頂を仰ぐとき、賛嘆の吐息が漏れたのも当然である。

この世界を表現する高塔は、第三回廊の中央の四隅（四つの内陣）に翼塔が建ち、最も高い中央塔から逐次、四隅の塔にゆくに従って低くなり、ピラミット型を成している。（５４頁の図面参照）

これは仏教の五宝を模ったと云われている。五宝とは金、銀、琥珀、水精（水晶）、瑠璃を指すことが多いが、説は一定していないようだ。アンコール・ワットはヒンズー寺院として建立さているかぎり、この見解も亦、真実かどうかは知らない。

五塔は彫刻といい、一糸乱れない幾何学的造形といい、東洋の誇る巧緻な彫刻を施した最高峰である。しかも陰茎的な形状の塔はリンガムを表現していると共に、頂の部分にある蓮の花弁は、ヨニを意味していると云うのである。そして蓮の実が開いて散る種子は、多産を象徴しているらしく、実に面白い見解である。

ワットの蓮華の塔は一般に蕾型のリンガムとして説明されたが、蕾はまた処女の子宮を象徴するものとされ、更に須弥山は女性の恥丘を表象しており、陰陽交合の複雑なシンボルとも考えられるのだ、という説もあるようだ。如何にもヒンズーらしい考え方である。

寺院の中心である聖なる中央塔の内陣には、四方に向かって四体の仏像と、一体の寝釈迦が祀られており、何れも破壊されずに原形を留めていた。然し乍ら、往時は燦然と輝いていたと想像する仏像も、歳月の風化には勝てず、今では見る影も痛ましく金箔は剥げ落ちていた。

内陣に祀られた仏像の由来は知らないが、内陣は暗くて陰湿な空気が漂っていた。一説では内陣を子宮のドームと仮定しているとも、伝えられている。そして５ｍ四方の中央塔の床下はその空洞を砂で埋め、寺院全体が積木細工のように、崩壊を防止しているらしい。（右は内陣にある南面の仏像）

世界の中で、最も沢山な石を積み重ねた内陣は、第一回廊のようなレリーフなどの装飾はなく、五体の仏像以外は何も見えない。此の世の凡る幻影を払い清めて、心から神に祈る聖なる場所には、其の必要はないのであろう。

須弥山を廻つて外周に眼をやると、一望千里とも思える壮大な眺景である。足下には寺院の構図が立体的に瞰下され、緑の樹界が果てしなく拡がっていた。残念ながら北方約３㎞にあるアンコール・トム（大きな都の意）は、視野の中に写らない。

巨大な石を積み上げて造った須弥山から、寺院の何の高い箇所を眺めても、総てが精緻な彫刻で覆われており、別れを偲びびながら驚嘆の眼を向けて降り始めた。誠に芸術は長く、生命は短いという実感を痛切に感じたのであった。

石を掘り、石を運び、石を刻み、石を積み上げ、石が転げ落ち、石の下敷きとなった人の多いこと等、当時の計り知れない苦労を噛み締める時、クメール王国の偉大さが彷彿として想起されて来た。

そして、歴史は繰り返すという格言から、世界の貧困のどん底に落ち込んだクメール族よ、是非とも、もう一度、過去の偉大な底力を発揮して欲しいのである。

回廊を去る

須弥山の第三回廊から第二回廊、そしてレリーフの第一回廊と、後髪を引かれるように振り向きながら、一歩一歩と降りて行った。宗教的な人間の芸術と犠牲によって造られた寺院は、将に人柱そのもので尊いものである。然し乍ら、今は死の大伽藍となって文明の進歩から置き去りにされ、痛々しい現実であった。

感慨無量に歩を進めて第一回廊の西の塔門に来ると、何人かの人達が修理の作業に従事していた。これが、ヘン・サムリン政権の要請に応じた、インド政府の協力工事のようである。

１２月の読売新聞の記事に、「白くなつたアンコール・ワット」と題した一文が、掲載された事を思い出した。

一昨年暮れから昨年の７月まで、インドの修理チームが生化学薬品を使って奇麗に洗い、作年末から再び開始して、５年後に修理を完了する予定だという。白くなったのはカビを取り除き、砂岩の生地が洗われた為であり、それによって石の侵食や剥離が防止できるとの考え方らしい。

インド式の外に、なるべく原形を留め、時代的な臨在感を残す方式もあり、日本が技術協力して修理したボロブドール（ジャワー島）は、後者のものである。

両者の良否は後世の評価を待たねばならないが、我々は以前のアンコールは知らず、見た眼には、それほど白くなったという感じは受けなかった。何れにしても自然の脅

威を防ぎ、８５０年も経過している遺跡は、全世界の協力によって修理保存しなければならない。

石の参道を進むと左右に経堂があり（５４頁要図）、廃屋になっていて経文はない。其処に１０人ほどの人が修理に従事していたが、小さな馬欠に水を汲み、二人の女性が天秤棒で運ぶ姿は、原始的な呆れる光景であった。栄枯盛衰は世の常だが、援助の手が望まれてならない。どうか神の恵が栄光のクメールに、加護されんことを祈るばかりだ。

先行していた私は西の外壁で腰を下ろし、一行の帰来を待つていたが、１０分以上も経過しても影が見えない。空腹と暑気のために疲労は倍加し、バスの待つ大樹の木陰に一刻も早く辿り着きたい一念であった。

外壁を出て、今日の感想を纏めながら焼き付く炎天下を歩み、遅い一行を待つ心理も働いて、参道の端に再び腰を下ろすと、自然に私の眼は草叢に向いていた。その時、「奇貨居（オ）くべし」とも形容したい偶然が現われた。

草叢にある小さく見える黒色の石ころが、回廊の窓にある石柱の一部分のように見えたのである。早速、参道から降りて手にすると、閃いた私の感覚には狂いはなく、将に其の通りだと判断されたのである。

中国は戦国時代の趙の都・邯鄲において、豪商の呂不韋が申した「奇貨居くべし」（これは掘り出し物だ。とっておけば今にえらい値が出る、と云う意味）という心は微塵もない。然し乍ら、憧れのアンコール・ワットの貴重な記念となった事は、間違いのない事実だ。（右は回廊の窓と石柱。５５頁写真参照）

重い足を引きずれながら、小さいとはいえ重い石を抱え、漸くバスの待つ場所に帰着したのである。

アンコール・ワットと離別

雲一つない蒼空の真上の太陽は、聖殿の群楼を照らして大慈悲のように輝いていた。往時五百人もの僧侶がいた此の大伽藍が、盤根錯節と形容したい熱帯樹の為に、幾百年も放置されていた事は不思議でならない。

シャムや安南、中国との戦いに疲れ果て、滅亡の運命に曝されたクメールの遺産を、侵略者は無視したからであろう。恍惚の森の中に蹲って彷徨い続け、陽の噛みつくような炎暑は火焔樹の成育を助長し、大自然の勝利に軍配が上がって居た。しかし現在、あのように燦然と光に照らされていた事は、喜ばしい極みであった。

四時間の参観は、終わって了えば一炊の夢である。バスは祇園精舎に永久の別れを告げ、守護神の七頭の大蛇と、睡蓮の美花に見送られて動き出した。やがて神秘とも思える殿宇が樹影に隠れようとした時、自然に振り返って別れの視線を投げていた。

宗教は不滅の星と謂れている通り、アンコール・ワットの不滅の威光が、クメールの人々の上に輝く日を、祈願して止まない次第である。

１３・００、シエムリアプのグランドホテルに入り、フランス料理の歓待を受けて、久し振りに私の胃袋は満足感を味わった。戦禍の被害甚大なホテルでは、アンコール・ワットの拓本だけが、飛ぶように売れていた。これも懐しい思い出の一こまである。

チャター機は１５・００にシエムリアプ空港を離陸して、カンボジアの首都・プノンペンへと飛び立つた。

プノンペンの概要

メコン川河口から約３３０㎞上流にあり、メコン本流と支流トンレサップ川との合流点に面して、トンレサップ川の右岸沿いに開けている。（３９、４１頁地図）

メコン川はトンレサップ川と合流したのち、直ちに本流と支流パサック川に分れ、その四本の川の形から、此の地点はフランス語で四本の腕、カンボジア語で四つの面と呼ばれている。熱帯に属している此の地域は雨期と乾期に分かれ、沿岸住民の生活はメコン川の水位に支配され、５、６月から増水して９、１０月に最高水位になる。

現在の人口は約６５万と説明されたが、一説では百万とも云われ、人口の把握の困難は、戦火の傷跡が残っている証左であろう。住民の大部分はクメール人だが、中国人、ベトナム人、その他のアジア人も在住している。

このほかチャム人がいるが、嘗てベトナム中部でチャンパ王国を形成していた民族の後裔で、ベトナムに滅ぼされて、１７世紀以降に移住して来た民族である（イスラム教徒）。中国人、ベトナム人は主として商業、手工業に、チャム人は漁業にに従事している。

プノンペンは河川交通の要衝として早くから開けたが、最も古い歴史を有するのは、市の北部にある「プノン・ペン」と呼ばれる周辺である。

１４世紀頃、近くのメコン川に流木とともに仏像が流れ着き、それを「ペン」と呼ばれる貴婦人が拾い上げ、附近の住民に人工の丘を造らせて、その上に寺を建てて祀った。これが「ワット・プノム」である。（プノムとはクメール語で丘の意）

人々は此の丘を「ペン婦人の丘」、すなわち「プノン・ペン」と呼び、ついには此の附近の町をも、同じ名で呼ぶようになったという。

プノンペンが最初にカンボジアの首都になったのは、１４３４年である。長く繁栄を誇っていた首都アンコールが、シャム（現在のタイで、民族名はシャム族である）の攻撃を受け、１４３１年に放棄した直後のことであった。

しかし、その後もカンボジアはタイやベトナムの圧迫を受けて、衰亡の一途を辿り、首都もプルサット、ロベク、ウドンと国内各地を転々と移動した。プノンペンが再び首都となったのは、１８６３年にカンボジアが保護領となり、フランスの植民地支配下に入ってから、３年後の１８６６年のことである。

以後、植民地時代にプノンペンはカンボジア王宮の所在地として、またフランスのカンボジア支配の中心地として、繁栄の一途をたどった。１９５３年１１月、カンボジアが完全独立を達成して以後、プノンペンは新興国家の首都として栄えた。

１９７０年１０月にカンボジアは、王制から共和性に移行してクメール共和国となり、プノンペンは首都として引き継がれた。その後の内乱では、３９頁からの歴史の項で記述した通りであり、依然として首都として現在に至っている。

市は四つの区域に分けられる。第一はフランスの行政官庁のあった北部地区で、その南側には中央市場を含む商業地区がある。、更に市の南部には王宮、国会議事堂、政府関係機関、国立博物館、独立記念塔、高級住宅街、ホテルなどがある南部地区、第四地区としては、湿地を埋立てて造成した西部の新市街地区で、アジア競技大会のあったスタジアムや、住宅、商店街、大学などがある。

プノンペンへ

陶酔したアンコール・ワットの余韻は嫋々として続き、航路を南にとつた搭乗機は再びトンレサップ湖の上空を飛行した。雨期には２倍もの面積に拡がり、国中が湿地と湖沼となる此の地方では、乾期の現在でも屈曲した大小の河川は、満々と水を湛えていた。

１５・４５、機はプノンペン空港への着陸態勢に入つた。瞰下する一帯は水の都であると同時に、機内温度が３２°を指す火の都でもあつた。内戦中であるヘンサムリン政権下の空港には、軍用ヘリが待機し、１０機ばかりの民間航空機も翼を伸ばして、軍都らしい様相を呈していた。

空港の前には、カーキ色の軍服を着用したベトナム兵が立哨し、道路の向う側には兵舎が並び、戦時色一色に塗り潰された感じである。然し乍ら、空港では可愛いいカンボジアの少女が、我々一人一人に花束を贈呈し、ベトナムでは見られなかつた歓迎の光景であり、心からクメールの人達に親しみを覚えたのであつた。

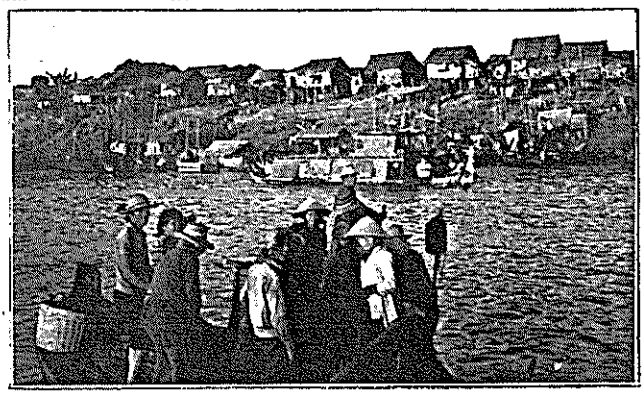
サイゴンを早朝に発ち、炎天下に４時間にも及ぶアンコール・ワットの拝観は、気も心も疲労困憊という状態であったが、残虐の流血と破壊となつたプノンペンは、私の眼を充血させていた。

眠れぬ日々を送り死の行進を強いられた市民たち、街には暴行と凌辱の痕跡はないかと、バスの窓から凝視を続けていた。空港から１１㎞の街道には、赤地に黄星の旗（ヘンサムリン政権の国旗）が林立し、ポル・ポト派の制圧を誇示していた。しかし、ソビエート・ユニオン通りを通過して行くと、ソ連の影響力が浸透していることが、強く肌に感じて来た。

錆ついた機関車が放置されたままの駅や、政治大学、師範大学、技術大学、病院、カンボジア・ソ連友好会館などを眺め、小さな国会議事堂の横を抜けて、河畔に建つホテル・カンボジアーナに着いた。トンレサップ川に面したホテルは、クメール王宮のような屋根を葺き、感じの良い質素な独立家屋式であった。

憩う暇もなく、１７・００からＯＰの川遊びに誘われ、船は茶色い滑らかな流れに向かってスクリューを回転させた。直ぐ右手の川岸の丘には、台湾籍の貨物船の巨体が残骸を残し、その下流には露天の魚河岸が開設されて、大賑わいの群衆である。

一方、川面には無数の小舟が出漁しており、群れをなして舟の中に網を曳き上げ、何れも大漁のようで意気盛んであつた。異国情緒たっぷりな夕暮の光景は（下写真）、原始漁業を見るような感じで面白く、小魚ばかりの中に大きな魚が捕れると、手に持ち上げて我々に見せていた。チャム族たちの無邪気な歓待ぶりである。



平和な静寂の中に陽はすっかり落ちて、空は茜色に映えていた。

漁をしている彼等は、乾期には漁業をするために水上生活を営み、雨期には農業に従事するために丘に上がり、半農半漁の生活をしている。前頁の写真に見える通り、ニッパヤシの小屋が、丘の上と川辺に建っているのは其の為である。

涯しない大平原の彼方に沈んだ陽は、真っ黒にヤシの木を写し出し、夕闇は緩慢な流れと共に涼味を誘つている。小さく光るホテルの灯に向かった乗船は、小一時間の川遊びを終えて桟橋に到着した。プノンペンの実情を知る上には川遊びも亦、価値のある歓迎行事だったと感謝したい。

プノンペンの都にあるホテルでさえも、レストランの設備はなく、夕食は遠く離れた河畔のレストランに案内された。疎らな街灯が照らす市内を通過して、暗闇の稲田の中へとバスは走り、澎湃とした流れに臨んで、カンボジア料理に箸を運んだ。

サイゴン料理と全く違う、鮮魚を主体にした料理は私の好物であり、貧弱な設備ながら珍味は満足感を与えてくれた。又、姿の見えない舟から漏れている灯も、単調な流れに夜の情緒を誘い、プノンペンの風情を味わっていた。

プノンペンは夜の９時から外出禁止の布告があり、ホテルの外周は鉄条網で囲まれて、武装した警備員が動哨している状態である。それに加えてベッドには蚊張が吊るされた。この光景は自然のうちにビルマの戦場を想起させ、挽歌を聞くようにして眠りに就いたのであった。

１月３日（日）晴　プノンペン市内観光

５時半に起床して河畔に臨むと、将に旭日の昇らんとする絶景であった。静かな流れ、底抜けに澄んだ天空、高く聳えるヤシの木、遮るものがない拡がり、すべてが魅力的な美しさである。

同胞が血を流し合った治乱興亡を繰り返した愚を、大自然が教えているようであり、「興国在人、倒国在人」と叫びたい感じであつた。

レストランでの朝食のためにホテルを６時に出発し、８時から市内観光に移った。アーチョメル通り（最初の大統領の名前）を通ってモンボン通りに入り、映画館やホテルの建ち並ぶ繁華街へと進んだ。

トゥールスレン旧監獄博物館

先ず案内された所はポル・ポト時代の監獄であった。未だに内戦が続くカンボジアらしい観光である。

広大な敷地の芝生の中に、処刑された人々の石棺が並んでいた。旧高等学校を刑務所にした此の場所では、処刑された数は２万人にも及び、死体は建物の裏側に埋めたと通訳は説明していた。

建物の入口に大きな絵が掲げてあり、水瓶に首を押し込み、或は後ろ手にして吊るし上げる拷問の図であった。（次頁の写真）

続く刑務所の個室には、鉄製のベッドと収容された人物の写真があり、縄で作った絞首台や水攻めの器具が展示されていた。何れも平常心では正視できない極悪非道な光景である。

重要人物を収容した独房は、煉瓦で仕切った一畳ほどの暗室で、その他の者は大広間に押し込み、広間には全国から集めた処刑者の写真が飾られていた。

中でも白骨を山のように積みあげた写真は（右下の写真）、見学者の眼を疑うような残酷な地獄図であった。

処刑された人達はロンノル政権の高官を始め、知識階級、僧侶、学者、教師、ブルジョア階級であったが、最後には農民、労働者、貧乏人、弱者、下層階級まで、人を選ばずに順番のように殺害したのである。

ポル・ポト支配下の４年間に餓死や狂死も含めると、犠牲者は３００万人にも達するという。

実に文明に対する憎悪であり、亡霊が漂うような感じを受けたのである。

１９７９年1月7日にプノンペンを占領したヘン・サムリン政権は、ポル・ポトの悪政の宣伝に努めているものの、勝てば官軍式であってはならず、前者の轍を履まないで欲しい。

苛酷な歴史を繙いてみると、１９７５年4月１７日午前９時半、赤いクメールの三派（ポル・ポト、イェン・サリ、キュウ・サムバン）は歓声と拍手で迎えられ、プノンペンを陥落させた。（ロン・ノル将軍は米国へ逃亡）

その後の内紛によって、親ベトナム派と反ベトナム派に分裂したが、中国の支援を受けたポル・ポト派が実験を掌握した。プノンペンを占領したポル・ポトは、一週間以内に市民を農村に下放させるという、原始共産主義的な超重農主義体制作りの、大下放政策を命じた。

国の体制を根本的に改めようとした政権は、外国の影響や支配を受けるものは敵、又、旧体制を支持した銀行、学校、市場などの公共機関や其の従事者も敵とし、凡る文明の影響を消す原始共産主義こそ、本当の平等を実現する道だと宣伝した。

米こそ国の基礎であり、米の生産さえ上がれば、カンボジアの繁栄は約束されるという単純な考え方である。貨幣経済を廃止し、都市と文化を完全に破壊して、凡の国民を水田に追いやる政策である。当然、反対の柱になりそうなインテリもに抹殺であった。

この思想は中国の文化大革命の毛沢東路線である。しかし、カンボジアは肥沃な土地に恵まれて飢えなどはなく、一般に云われるような貧農は僅少であり、自作農の農

民は食べることに不自由はなかったという。

時計の針をポル・ポト時代に逆戻りさせた感じがする。此の刑務所を去るに当たり、７００万人の国民のうち、３００万人といわれる人を死に追いやった事は、決して革命ではない申しておきたい。そのように白骨の山は絶叫している。

ウナロム寺

豺狼のような殺戮に心が痛んで声なく、天下を制す根本は人心の収攬だと感じながら、バスに乗車した。

新市街にある赤旗に囲まれた「勝利の塔」（１９５８年、フランスから独立した記念碑）を眺め、王宮前を通過してウナロム寺に着いた。（右の写真）

ウナロム寺はモハニカイ派の総本山である。モハニカイ派は大衆的な宗派で、全体の８割ほどの信者を占め、他の一つの教派であるトマヨット派は貴族的で、バラモン系だという。

この寺の山門の上にはヒンズ式の塔があり、門を入ると右手に同じような塔が建っていた。広い境内の中央にある本堂も亦、塔を乗せたタイ式建築の寺院である。

２１人の僧侶がいる此の寺の本尊には、七条七色に輝く光背があり、遍く光明を照らして平和を祈願しているようだ。本堂の裏手には古色蒼然とした須弥山が建立されていた。アンコール・ワットの第三回廊と同じく、四つの翼塔と一本の中央塔が高く聳え、１４４３年の建立された由緒のある寺院である。

寺の前の広場は閑散として活気は見られず、数台のシクロとアイスクリームを売る屋台が、当てもない客を待っていた。広場の隅には、小魚と果物を売る露天商が一軒店を開くだけで、首都の大寺院周辺にも戦禍の傷跡が残っていたのである。

プノム寺

大樹は枝を伸ばして参道を覆い、鬱蒼とした火焔樹の丘に建つワット・プノムは、６４頁に記述した由来の通りである。（右はナーガの守る正面の石段）

ペン夫人を偲んで参詣にくる影は後を絶たず、丘を囲む周囲は公園や動物園となっており、活気はウナロム寺と格段の差である。

正面の石段の右側には、アンコール・ワットと同じようにナーガ（蛇神）が守護しており、本堂の本尊は黄色い衣を被い、沢山の祠が本堂の周りを埋め尽くして、建っている。

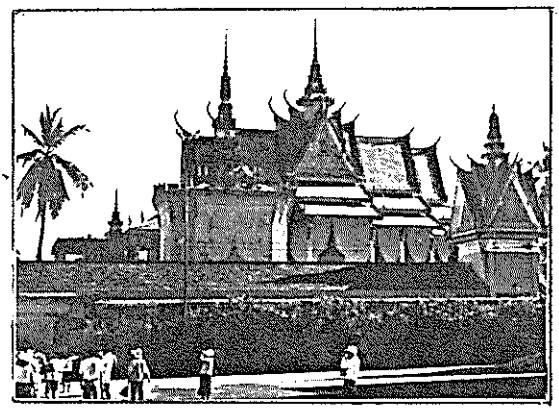
中国系住民の参拝者であろうか。両側に「一帆順風、合家平安」と漢字で書き、真中にお釈迦様を色刷りし

た印刷物を祠に捧げ、供物や線香を供えて無私無欲に祈願していた。これらの光景はベトナムと全く異なり、カンボジアはインド文化の影響が強いようだ。しかし歴史的には、元来、カンボジアは仏教国ではなく、土着の信仰が存在し、そこにバラモン教が結合したと云われている。

寺の後方の大樹に猿の一群が棲息して、人々が投げるバナナを上手にキャチして居た。猿たちは娯楽の少ない憩いの場に笑いを与え、市民の心を和らげる微笑しい光景である。

日曜日のためか公園は子供達で賑わい、若者はオンボロ自転車で爽快な気分を楽しみ、時間を持て余して暇つぶをしている。一方では、洗面器に蓮の花や果物を入れ、僅かな商いに精を出す孝行な少女も見られた。南国の何処の国でも同様に、本当に女性は働き者である。

王宮と銀寺



陽差しの強い午後、カンボジアの過去の偉大さと現代の無知蒙昧さに、このように大きな、隔たりのある国は少ないと思いながら、王宮に向かった。

生け垣で囲まれた王宮は主人公を失い、我々観光客以外には人影はなく、憐れみを禁じ得ない環境であった。

タイの影響を受けた建築物や庭園には華美さはなく、聖廟らしい清浄な空気が漂っていた。王宮の門を潜ると、右の方に演舞場（宴会場）が建ち、高い煉瓦の塀を越えると王宮があった。

庭園の向こうの正面には、１９１７年に建立した玉座殿が厳然として威容を誇り、絵に描いたように建っていた。然し乍ら、王様のいない王宮の中を、豚が散歩している光景に出会したが、国家のシンボルである宮廷としては、対外的にも戴けない景観である。（上の写真は王宮の一部）

我々は先ず王室の菩提寺であるギン寺に導かれた。尖塔の高く聳える寺の手前には、ナポレオン３世が寄贈した宮殿と、王の居間があり、北側には２基のパゴダと曾祖父の像が建ってる。勿論、シアヌークの父王の祠も祀られていたが、不運な彼の心中を察しながら、寺院の本殿を拝観した。

本殿の床は５２８０枚（１枚の重量は１kg）に及ぶ銀板が敷かれており、そのためにギン寺と呼ばれる。中央には金（約２０kg）の仏像が燦然と光を放ち、其の後方にはバンコクのエメラルド寺院と同様、エメラルドの仏像が高座に安置されていた。

見上げるようにして拝む仏像は、額に１５カラットのダイヤのほか、１８２個のダイヤを埋め込んであると云う。この仏像の取り巻く周囲にも、贅をつくした小さな仏像や、数千点に及ぶ調度品が飾られていた。

眼に映るものは絢爛豪華なものばかりで、流石に仏教王国の菩提寺であり、クメール王朝の繁栄を偲ぶに充分であった。然し歴史は流転しており、果たして美麗は幸福

を約束するものなのか、私には判らない問題である。

次いでシァヌークの伯父が、１９１３年から１９１７年にかけて建立した玉座殿に案内された。中央の正面に玉座があり、主要な儀式と謁見の間として使用され、其の奥にある一段高い玉座は戴冠式用の、さらに其の後方に女王の戴冠式用の玉座があった。

玉座に続いて王の間や女王の間、寝室があり、不思議なことにも、予言者の間や僧侶の間が両側に並んでいた。これらの部屋の前に飾られいた道具のうち、大きな象牙に吊るしてあるドラは、王の「お成り」を知らせ、田植の儀式用の輿や、女王の乗り物の一種、ハンモックまで飾ってあった。

一方、眼を上にやると、高い天井にはラーマーヤナ物語が一面に描かれ、アンコール・ワットの醍醐味を此処でも味わったのである。矢張り小なりと雖も絢爛たる王宮である。

この王宮は１９７２年の開放後、初めて一般に公開され、昨年から我々外国人にも開放されたが、栄枯盛衰の歴史を如何に理解すべきか。贅と悲哀は常に形影のように相伴うものだと、常に考えなければならない。

国立博物館

王宮を去り、西に傾く陽を追うようにして国立博物館に向かった。平屋建の館の正面にシバー神（ヒンズ教の主神の一つ）が乗用したという、半人半獣のガルーダの像があった。

アンコール・ワットではガルーダに比べてナーガの信仰が優勢であり、ガルーダの信仰はタイやインドネシアの方が盛んなようだ。ガルーダは伝説によるとナーガを喰い、やがてシャム（タイ）がクメール王国を滅ぼしたことも、神話的な因縁話のようで面白い。

ヒンズー神話のガルーダは、やがて仏教の守護神となる架空の鳥だが、博物館正面のガルーダの歴史に就いては、説明はされなかつた。次ぎに陳列してあるのは青銅器であり、断然、仏教的なものが多いが、ヒンズー的なものも多いようだ。興味深いものでは、シバー神の男根だという代物も陳列され、奥には１０世紀作の大仏の頭が安置されていた。

続いてインド製の青銅器やシバー神、ガルーダが多く陳列されていた。小さな博物館の見学は瞬時に一巡してしまつたが、カンボジアとしては貴重な物ばかりであり、これからの平和の到来と共に、遺跡や遺品の発掘を期待したいものである。

博物館の前にはベトナム兵が銃を手にして、何の目的もないように坐っていた。黒い服を着たヘン・サムリン政権の兵隊は、第一線に勤務中なのであろうか、未だに拝顔の栄に浴したことがない。プノンペンは完全にベトナムの支配である。

兵士達と並んだ十数台のシクロは、誰を待つという事なく我々に注目し、其の中の一人の青年は「ニッポンジン」と叫んだ。今回の旅行に於て、日本語で日本人と声を掛けられたのは最初であり、彼等が日本を知っている事は喜ばしい想い出である。

ポル・ポトが宗教を禁止して、見せしめのように寺院で虐殺を行い、仏が救つてくれるなどは大嘘だ言ったそうである。その祟りであろうか、各地に後遺症が強く残っているような感じの、今日の観光は終わったのである。

満月の夜

夕陽の余光の残る中を、夕食をとりにレストランに向かった。カンボジアの人達は新年の満月を祝う習慣があるのか、街では子供相手の風船や菓子を売っていた。歩きながら商売をしている人、腰を据えて僅かな品物を並べている人、頭上に籠を乗せて花を売る少女等で、街路は賑わっていた。

街の広場は極く簡単なイルミネーションで飾られ、市民たちは何の目的もなく彷徨い、人の海となった広場は若い男女の社交の場となつていた。

悲惨な粛清の嵐が過ぎ去り、平和を取り戻して幾年になるだろうか。しかし人間の吉凶禍福は定まらないのが現実であり、人間の本質は苦悩であることを、彼等も忘れないで欲しいのである。それは国家も個人も変わりはなく、去った過去は日に日に忘れるからだ。

バスの中で其のような感想を浮べながら、昨日と同じレストランに着いた。体調は完全に癒えて食欲は回復し、プノンペンの川魚料理は何の酒池肉林にも優り、食事を通して私はプノンペンに引かれてしまつた。

テーブルから眺める満月は川面を照らし、私の瞳孔は月面を注視して無心であった。このような心境に浸った事は何年振りであろうか。その時、ふと脳裏に浮かんできたのは、清らかな月光に映えるアンコール・ワットの光景である。

食事を終えてホテルに帰り着いたが、プノンペン最後の夜を楽しみたいと、自然に吾が足は河畔へと運んでいた。荒涼とした流沫は魅力的に美しく、沈黙と静寂に魅せられて漫々と歩いた。

其処には、自然の響きを楽しむように高橋夫妻が居られた。形影相伴うというか、続いて芦刈さん、三次さんも合流したのである。思いは私と同じだろう。

肝胆相照し、旅を愛し、気の合った人との話し合う光景は、「話尽山雲海月情」（かたり尽くす山雲海月の情）と形容したい情景であった。

1月4日（月）晴　孤児院の慰問

昨日は天道も許さないような暴虐な監獄を見学し、五臓六腑から戦争の罪悪を反省した。私も流血漂杵の戦線を転戦して、無辜の民に死よりも悲惨な苦渋を与え、さぞかし路傍を徘徊させたことだろう。直接、自らは手を下さなくとも、責任は強く自覚している。

早朝の５時に起床して７時に朝食をとり、８時に戦乱の遺した孤児院に到着した。これを企画した日比谷トラベルに対し、心から感謝の意を表したい。

孤児院の玄関では孤児たちが待ち受けて、早速、花束贈呈の歓迎であった。続いて院長からも歓迎の挨拶と、孤児院の概要の説明が述べられた。シァヌーク時代には国立の孤児院として運営され、ポル・ポト時代には軍の補給基地となり、１９７９年の開放以後、再び孤児院として復活したという。

以前は学校の校舎であった孤児院は、当初は１０５人から発足して５６０人にまで増加し、現在の収容人員は３８６人、職員数は３０人で教育施設はなく、一般の子供と同じ学校に通学している。

６歳から１９歳までの孤児たちは成年に達すると、概ね公務員や軍人の道を進むと

いう。全国には２７の孤児院が設置され、収容されている孤児の数は２０万人以上である。

想像に絶する膨大な数であり、栄養失調による乳児の死亡などを考えると、涙なくして語れない悲劇だ。しかも１ケ月の政府援助は一人１２０リアル、日本円に換算して約３０円に過ぎない。

奈落の底に落ち込んでしまつた、カンボジアの労働者平均賃金は、月に４ドル（約５００円）というから、致し方がないようだ。

自らの糊口を維持するために孤児達は農漁業に従事し、少女たちは裁縫や刺繍に励み、又、男子は灰皿などの手工芸品を作っている。我が孫たちの飽食暖衣の生活と比較して、極言すれば禽獣に等しいと言わねばならない。目頭を熱くした我々の同情心はもの言わぬ言葉となつたのである。

一応の説明がされた後、刺繍したハンカチを提供して、何分の寄贈を依頼すると、ツアーの人達は心の内側の問題として、進んで寄付をしていた。続いて懸命に手を動かして刺繍に励む教室を見学し、孤児達の歓迎する演芸会場に臨んだ。

正面にはベトナムのホーチミン主席の写真（上の写真の中央上）が掲揚されていた。泰山北斗を仰ぐように、他国の亡き元首の写真を掲げている事は、ベトナムの支配を意味しており、内戦の原因でもあるようだ。又、図書室にはレーニン、ブレジネフの写真が飾られており、完全にソ連の院政下の感じがする。

自由を愛すことは他人を愛すことである。自由に対する関心のない国、或は軍政に虐げられた国では、英雄崇拝が最も有力な支配の手段だと、痛感したような次第であった。

孤児達は此の事には関係がなく政治の問題だ。一食を得るために一日の仕事をする孤児の姿を眺め、人間の偶然性というか、人間の一生を支配するものは運であり、智恵ではないと考えさせられてしまつた。

演芸は先ず二人の少女の合唱から始まり（上の写真）、四人の踊りや男の子の演奏が続き、最後に孤児一同が揃って花を撒き、終わりを告げたのである。

演芸が終了すると、日比谷トラベルから孤児院に贈られる、日本人形や其の他の慰問品の贈呈式に移った。突然その時、添乗員は私に慰問品の贈呈と、挨拶をしてくれるようにと依頼した。

何の準備もないが、想い出に残る光栄だと快諾した。今日は我々に対して、温かい歓迎をして頂いた事に感謝の辞を述べ、虐境にもめけずに、すくすくと成長されることを祈り、併せてカンボジアの平和の到来を切望する、という意味の挨拶をした。

孤児たちが此れからの長い人生を乗り切るには、死ぬことよりも強い勇気が必要である。そして勇気と忍耐は希望を持つ技術であり、生きるための技術は、一つの目標に集中することだと、提言してやりたい気持で一杯であった。

然し乍ら反面、人間の最後の決定的な力は、天運と云うより仕方がない力があり、誠に天の時に如かずである。

工芸品センター

孤児院に哀惜を覚えながらバスは発車した。人の苦しみに同情することは人間らしいが、それを如何にして救済するかが問題である。そのように煩悶しているうちに、工芸品センターに到着した。

日本の田舎の町工場よりも貧弱な規模に過ぎず、昔の鍛冶屋という名称が適当である。通訳は時間を消費することと、少しでも外貨獲得の国策に沿う為に案内したようだが、我々にはカンボジアの実情を知る上に大切な事であった。

此のセンターでは工芸品というものの、主として簡単な鋳造品である。家内工業のような作業場を一廻りして、即売場に誘導されたが、国力に比例した粗悪なものばかりだ。しかしクメールの民芸品ということと、廉価のために、売れ行きは上々のようであった。

作業場の写真を撮り忘れて工場に引き返すと、私のカメラに向って撮影を催促するように、青年がポーズをとった。笑顔でシャターを押して彼に応え、挨拶の手を上げて踵を返した途端、私を呼び止めるように合図した。彼は戸棚の扉を開いて一品を取り出し、紙に包んで私の手に握らせたのである。

このような事は私の記憶にはなく、稍々戸惑いを感じたが、早速、煙草を一個進呈して有難く頂戴した。彼の行為は写真を撮って貰った喜びと、日本人に対するクメール人の好意の発露であろう。何時までも印象に残る出来事である。

トゥールトゥムポン市場

カンボジア最後の観光は市場であった。市民の台所を賄う各種の食料品から、日用雑貨類に至るまで、揃わない物はないマーケットである。しかし、魚類の悪臭が漂って来る不衛生さには息もつまり、ツアーの人達は手前に並んでいた民芸品店を覗いていた。

私も骨董品の珍しい品を目安にして、市場の中をを漫歩していたところ、工芸品センターでは見られなかった、アンコール・トムの四面塔の鋳物が眼に映った。今次旅行ではバイヨン（納骨堂）の見学は許されなかったが、記念になる有名な四面塔であり、.数枚の古銭と共に想い出の品として求めた。

旅の終わり

凡ての日程を悉く消化して１１・００にホテルに戻り、手荷物を纏めて昼食を済ませ、プノンペン空港へと急行した。

一昨日のプノンペン到着時の検査では、係員は一言も云わずに手招き、フリーパスだった私は、今回も亦、何等の解梱もされずに通過し、気に係っていた「奇貨居くべし」の逸品は、天運は我に味方して安泰であつた。

搭乗機はサイゴンへ飛び、同空港でエア・フランスに乗り継ぎ、１９・１０、無事タイのバンコク空港に到着し、１０日振りにエアポート・ホテルで骨を休めた。

翌１月５日（火）は、一行は３班に別れて帰国することになった。今回の１０日間の旅では勿論、友人を求めることは当然の事だが、旅の面白さは友人の数ではなく、

その選択であり、その質に依るところが大きいのである。其の点に就いては、今次のツアーは添乗員を含めて恵まれていた。心から感謝したい。

８・４５バンコク発の一行を見送り、今日はバンコクでゴルフを楽しむ芦刈・三好両先生とも、握手を交わして別れたのである。

私等は此れから３泊４日の間、バンコク日本大使館勤務の甥の官舎に寛ぎ、２年振りにバンコクに滞在して、のんびりと擊壌の歌に浸り、甘脆の味覚を楽しみ、華胥の夢を見るような団欒を味わった。そして１５日間の旅を終えて、１月８日、無事に帰国したのである。

旅を終える機会に、後日、再び紀行文を繙く時の参考の一端として、カンボジアの内戦は何故に惹起したか、自分なりの判断を加えて、経過を記述しておきたい。

今回の旅行の最大願望はアンコール詣であったが、それは其の都度、詳細に記述した。然し乍ら、訪れた其の他の各地は、数多くの人が枕を並べ、殺戮された鬼哭啾々の地、痛ましい戦禍の傷跡の地であったから、書き加えたいのである。

第二次大戦後、再度の植民地化を望んだ仏国はベトミンに大敗した。仏に代って真空地帯を埋めようとした米国はも亦、中ソ支援のベトナム軍とベトミンに敗れ去った。それからが残虐物語の場面に発展し、カンボジアの悲劇となったのである。

千数百年に及びベトナムを支配した中国は、インドシナ半島を虎視眈々と狙っていた。一方、ベトナムはインドシナ三国の第一の強国で、自国を宗主国にしたインドシナ連邦を、夢みていた事も事実である。

対米戦争時には共に協力して強敵に当ったが、其の後は上記の意図が歴然と表面化した。カンボジアはシァヌークからロン・ノルへ、そしてクメール３派政権と移行したが、中国はポル・ポト派を支援し、ベトナムはヘン・サムリン派を支援して内戦となった。そこにポル・ポトの殺戮の革命へと歴史は展開して行った。

嘗てインドシナを支配した仏、日本、米はさることながら、中国とベトナム及びソ連の代理戦争の戦場となり、同胞が殺し合うカンボジアは、常軌を逸した残酷無常の猖獗地獄と化した。

アンコール・ワットの無残な破壊、悄然としたカンボジアの人々の姿、文明の欠片もない生活、その奈落の底に落とした者はポル・ポト派だけではない。中国もベトナムもソ連も、一連托生にして非難しなければならない。

戦争は戦争のために戦うものであり、平和のための戦争などは、未だかって一回もなかった。勿論、義戦などと称した戦争も、ある訳がないのである。

戦争は人間の生活を何一つ解決しない愚行である。

最後にパリで行われていたシァヌーク（３派連合代表）と、フン・セン（ヘン・サムリン政権の首相）の会談は結論に達せず、次回は北朝鮮のピョンヤンで開催されることになったが、一刻も迅速に平和の成立に期待したい。

あとがき

如何にして歳をとるかを知ることは、生きるという偉大な技術の中で、最も難しいことである。そして又、どのように死ぬかではなく、どのように生きるかが問題である。

その意味に於ては今次旅行は誠に充実し、漠然ながら、生き方を学んだような気がする。即ち、心に感動という刺激の注射をした事ではないだろうか。

碧空高く聳える巨大な石塔群を眺めた一瞬、私の鼓動は若者のように、高鳴り続けて止まず、天なる神々の棲家、空中の楼閣アンコール・ワット、それはギリシャ神話の太陽神のような、アポロ的な冷厳な美であり、その美は忿怒の心を和らげるのであった。

今は同胞の間や異民族の間に紛争が続いているが、栄華を誇り華飾を極め尽くした殿堂は、西方浄土に面して生きていた。クメール王たちが築きあげた一大建築物は、彼等の生命の不滅の象徴として、地上に遺していたのである。これが歴代のクメール王の精神となり、クメール民族の信仰の的となって、将来も末長く継承されるだろう。

地上の須弥山アンコール・ワットはクメール人の心の聖地であ。彼等は他に何一つ遺さなかつたとしても、これだけで充分、大民族となり得るのである。

人間の一生には、晴れの日もあり曇りの日もあるのと同様に、国家、民族もまた然りである。戦争のために国土や同胞を失ったことは悲しい事だが、誇りを失うことは更に悲しいことである。

「薪火伝」という辞がある。これは薪は燃え尽きても、その火力は伝わって絶えない。即ち、精神は絶対に消えることはなく、必ず伝統は伝わるという事だ。

真理は永遠に古く、永遠に新しい。アンコール・ワットは「一黙如雷」、即ち無言ではなく真実の声として、クメール人、否我々参詣者に対しても説いていた。

熱帯の強烈な陽火の中に縹然とした高遠さは、人の及ばない不思議な智恵であり、長生不死の神僊な光景であった。そして又、何時まで眺めていようとも、更に溢れる喜びを覚えるような、神秘な霊光を放っていた。

巧緻を尽くした祇園精舎は、生命の結晶として荒廃することなく、地球のつづく限り人類のみいずであってほしい。

たった一人の、たった一度の、人生の厳粛さを感じさせてくれたアンコール・ワット、真に人間的な価値とは何ぞやと、我々を模索させていた。合って、知って、語って、別れて行くことが、我々の人生の物語りだと教示していた。そして年をとるだけが老人ではないと。

「夫万歳一期、有生之通塗、千載一遇、賢智之嘉会」（文選巻四十七）

「万年に一度しか此の世に生まれることができないのは、人間だれしも持っている決まりで、千年に一度でも聖人や賢人にめぐり会えるなら、それは幸せな出会いである」

（上は中国の東晋時代の詩人「袁宏」（３２８～３７６）の「文選」にある一節）

アンコール・ワットは無声の聖人である。その出会いの一こま一こまが、白昼の夢であった。

最も不幸な状態とは、何をしようと考えることの出来ないことである。これからの余生も、詩のような心境に接したいと念願して、まだまだ旅を続けたいものである。